食物分配における内発的動機を生み出す一致の感覚
―バヌアツ共和国の事例から―

2013 年 3 月

北九州市立大学大学院社会システム研究科
博士（学術）学位請求論文

木下 靖子

「食物分配における内発的動機を生み出す一致の感覚―バヌアツ共和国の事例から―」

木下 靖子

要旨

本論文は、南太平洋バヌアツ共和国（Republic of Vanuatu）の 2 つの島嶼社会を対象に、平等性が高いこれらの社会において、分配が実際に生活のなかでどのようにおこなわれているかを記述する。

ドゥ・ヴァールは、人間が平等を志向する動機について「社会的な脚」と「利己的な脚」があるという［ドゥ・ヴァール　2010］。「社会的な脚」とは、他者に共感すること、楽しみ、安心、気持ちいいというポジティブな感情であり、「利己的な脚」とは、不公平を嫌悪し、嫉妬や羨望、憤りというネガティブな感情を指す。両方の脚が、平等を志向する動機となり、相互行為をもとにした相互共生の社会がつくられる。

人類学における分配の分析は、社会における互酬性に注目するあまり、「利己的な脚」の分析に偏ってきたといえる。モースが『贈与論』であきらかにした「負債の念」をはじめ［モース　2009］、分配の受け手に発生するネガティブな感情を解消するために贈与し合うという分析は多くの研究においてなされている。しかし、社会が成り立つ上で必要なもうひとつの人の特性、他者へのポジティブな感情「社会的な脚」による分配の動機を分析することが、分配という行為について考える上で重要と考える。ゆえに、本論文では分配の場における「社会的な脚」、つまり共感や楽しみ、安心や気持ちよさの創出について、事例の分析を試みたい。

分配の与え手は何に留意しながら分配行為に乗り出しているのか。食物分配の事例の分析から、与え手が、自分が与える食物が、受け手にとって「報奨＝インセンティブ」にならないよう注意していることがわかった。与え手は、食物がインセンティブとして分配されることによって、受け手に暗黙のうしろめたさを感じさせていないかを気にしていた。

人は手に食物を持っていると、何か特別な理由や意図を持たずとも他者に与えたくなることがある。たとえば狩猟や採集によって他者が喜びそうなものを手に入れたとき、他者と分け合いたいと思う。

しかし、相互共生社会をつらぬく互酬性原理によって、受け手が恐縮し、明示されない「負債の念」を抱えることが、与え手の意図に関わらず、受け手に生じさせてしまうことがある。それを与え手は与え方によって回避しようとしていた。

相互共生社会では、分配行為が受け手に負債の念をもたせる可能性があることを知った上で、与え手は受け手が過剰な暗黙のうしろめたさを抱えないように注意し慎重にふるまっていた。そこからは、かれらがどのような状況であれ、他者の行動を「与えるもの」＝イ

ンセンティブによって操作してしまう関係となることを回避しようとしていることがわかる。

３章では、フツナ島の事例を用い、饗宴、共同作業、日常活動と、状況の違いから分配行為を３つに分類し、それぞれに見られる平等性など社会関係における働きを分析する。饗宴における分配は、参加者が同時にひとつの場に集い、衆目のもと時間をかけて等分に分配していく。共同作業とは主催者が作業協力を呼びかけ、参加者が集まり作業をおこなうことである。主催者は用意した食物を参加者へ等分に分けてみなで食べる。作業提供と食事提供の交換という互酬性が認められるが、主催者はただ食べものを用意するだけではなく、できるだけ参加者を喜ばせる演出をおこなうことが指摘できる。日常における分配は、「見る／見られる」ことを契機とする分配である。人は見られた食物に関して、惜しむ様子を見せずに、気前よく分け与えていた。

これらの事例にみられる、与え手と受け手の間でおこる食物のやりとりについて、互酬性や平等性だけでは説明できない。ではそれはなんだろうか。ここで見られる分配行為は何を実現しているのだろうか。それは食物が表わす楽しさや面白さ、驚きをもとに、他者との間に即興的な共感を得ることではないかと考える。

食物を惜しみなく分け合うという行為は、島で見られる日常的な事例から「人として当然である」と思われる。しかし、同時にただそれを分配の受け手は当然のようにやり過ごしてしまってはならないという、応答が期待される行為でもある。この応答とは、嫉妬や負債の念といったネガティブな感情だけを受け手に与えることを回避し、「あなたと共在したい」という内発的なモチベーションを見出すことを期待しているのである。

この相互行為としての共感をめぐる二重性が、即興性を帯びながら展開していく分配の特徴の根源にあるのではないか。そのような視点から本論文は、南太平洋の島に暮らす人たちの分配を理解することを目的とする。

The sense of coincidental expectation that courses:

From case example of Vanuatu

Summary:

In this paper, two islands' society in the Republic of Vanuatu in the southern Pacific are targeted. This will describe how food sharing is actually conducted in their daily lives under the highly equivalent circumstances.

According to Frans de Waal, people's motives to be equal are called "social leg" and "selfish leg "(de Waal, 2010). "Social leg" means to empathize the others, which is positive feeling such as pleasure, relief and comfort. On the contrary, "selfish leg" is referring to negative feelings such as jealousy, envy and anger, which detest inequality. Both "social leg" and "selfish leg" become motivation for people aiming at equality that forms a mutual society based on interaction.

Analyses of distribution in anthropology have only been focused on reciprocity in the society. Therefore it has been a bias toward analysing from the view of "selfish leg ". Staring from the Mauss who revealed "gift-bedt" in his book *the Gift* (Mauss, 2009), the analyses that people exchange gift to dissolve the negative feelings which is occured in a recipient of the distribution. It has been researched in many cases. However, to think of the action of sharing, it is important to consider the positive feelings, "social leg" which is another characteristics to comprise our society; to analyse the motives of distribution. Hence, this thesis attempt to examine the case in terms of "social leg " in sharing, in other words, empathy, pleasure and creation of comfortableness.

In what point does a giver heed to share something? From the case study of food sharing, it has become clear that a giver pays attention not to turn into receiver's incentives by giving. His concern is not to make recipient feels guilty because his food is considered as incentives.

When people have food in their hand, we feel like sharing with others without any special reasons or intentions. For instance, when we gain something through hunting or gathering which make someone delighted, we feel like sharing it with others.

Nevertheless, due to a principle of reciprocity pierced in the mutual society, regardless of a giver's intentions, there are some cases that a recipient feel sorry and hold a "gift-bedt" which cannot to be specify, but the giver attempt to avoid it by the way of giving things.

In the mutual society, the givers understand the facts that distribution might have possibilities of letting recipients feel "gift-bedt". Therefore, they behave carefully and pay great attention paid for receivers not to get tacit guilty feelings and. In fact, in any circumstances; they try their best avoid being the relationship to operate someone's actions by the incentives.

In section 3, using the Futuna Island's cases as examples, this thesis will classify the sharing by the difference of the situations: in a feast, conjoint work and daily lives and it will analyse the function of the sharing in the social relationship such as equality in each cases. Sharing in a feast is equally divided. Participants get together in one place and take a time to divide having all eyes on it. Conjoint work is to work together by the call of a chairman. The chairman shares his food equally and later on they eat it together. It is deemed that there is reciprocity by exchanging the labour and meal. It also has to be mentioned that the chairman not only prepares the meal but also directs the participants to become happy as much as possible. In daily lives, sharing is a chance of "seeing" and "to be seen". When people caught eyes on their food, they share it generously and he or she did not show their reluctance at all.

Reciprocity or the equality is not enough to explain these cases of food sharing between the givers and the recipients. Then, what is it? What these sharing actions make us realise? It seems that gaining the instant empathy among the others based on the fun, interests and surprise which food express.

Through the daily cases which can be seen in the island, sharing food without reluctance seems like "natural as a human beings." However, simultaneously, recipients of the sharing cannot be missed it as a natural thing. It is expected that the recipients reply something. This reply has to avoid giving people the negative feelings like envy or "gift-bedt" because they predict that they can see the motives that the recipients want to live together.

It can be said that the duality of the empathy as an interactive action is a root of the characteristic of sharing. Through this point of view, this thesis aims at understanding the sharing of people living in the islands in southern Pacific.

目次

はじめに

第１章　本研究の位置づけ
１－１．分配を志向する動機―「社会的な脚」と「利己的な脚」
１－２．分配をおこなう動機１―受け手の負い目
１－３．分配をおこなう動機２―与え手が威信を獲得する
１－４．分配をおこなう動機３―受け手に負い目を偏らせない
１－５．楽しさと共感― 一致の感覚

第２章　調査地概要
２－１．バヌアツ共和国
２－２．フツナ島
２－２－１．地理概要
２－２－２．生業活動
２－２－３．調査村概要―ナキロア村とイパウ村
２－３．メリック島
２－３－１．地理概要
２－３－２．歴史概要
２－３－３．調査村概要
２－３－４．生業活動

第３章　フツナ島の分配
３－１．饗宴における分配
３－１－１．山積み（ラウ）と分配
３－１－２．饗宴の種類と分配の事例
３－１－３．饗宴における分配の小活
３－２．共同作業における分配
３－２－１．共同作業と食物分配の山
３－２－２．喜ぶものを用意する
３－２－３．ピクニック―遊びと分配について
３－２－４．共同作業における分配の小活

３－３．生業活動に関わる分配
３－３－１．誇示を避ける獲物の分配
３－３－２．魚を売ること
３－３－３．子ども―若者の分配
３－３－４．生業（日常）における分配の小活

第４章　メリック島の分配―離島 15 人の共同体
４－１．所有する―名前と来歴
４－１－１．土地と木の所有
４－１－２．家畜の所有
４－２．共同作業について
４－３．分配する
４－３－１．ヤムイモの分配
４－３－２．獲物の分配
４－３－３．共食に見られる分かち合い―饗宴の開催
４－４．フツナ島と共通すること

第５章　考察
５－１．食物分配と時間の共有
５－２．分配の条件としての対等
５－３．分配への動機
５－４．即興的な共感、一致の感覚
５－５．人はなぜ分配をするのか
５－６．相互行為としての食物分配の獲得

第６章　結論

参考文献
資料

はじめに

2005 年と 2006 年の夏、筆者は沖縄県宮古諸島伊良部島の佐良浜地区にて調査をおこなっていた。佐良浜は漁業者＝海人（インシャ）の集落である。筆者は老漁師たちから、昔の旅の漁の話を聞いたり、近海でおこなう漁に同行したりして、のべ 5 か月ほど佐良浜に滞在していた。それ以前に、南太平洋のトンガやバヌアツに調査に行っていたものの、佐良浜集落で見聞きして教わったことは印象深く今でもよく思い出される。

初めのころにいつもいわれたのは、「遠慮したら、ダメだよ」という言葉だった。「漁のことを聞きに来たのなら、ちょっと見せてやる」「その話を聞きたいのだったら、だれそれのところに今から連れて行ってやる」「お昼は食べてけ」「おやつは食べてけ」といった誘いに対して、少しでも遠慮の態度を見せると「そんな、遠慮しているやつはダメだ」と間髪入れずに言われた。話を聞く、調査をおこなうということは、遠慮はしないということだった。

しかし、遠慮しないというだけでは、次の一歩に届かない。筆者は、あるときカツオ漁船の船長と話をして、深夜に出航する船に乗せてもらえることになった。カツオ漁船には乗ってみたかったので、船長に誘われてうれしかった。筆者は居候している家に帰り、家の人にそのことを報告した。すると家のおじさんは、「男の子ならいいけど、女の子だからな」といって心配した。筆者は「船長が大丈夫っていってくれたから大丈夫ですよ」と気軽に答え、その夜出港する船に乗るための準備を始めた。

カツオ漁は楽しく無事終わった。筆者は、おじさんが心配していたようなことは起きなかったな、などと思っていた。しかし、後日カツオ船の船長から聞いて、筆者が船に乗るにあたり、おじさんが缶コーヒーを 1 カートン、出航前の船に届けていたことがわかった。おじさんはこのことについて、筆者に一言もいっていなかった。

筆者が滞在していた 2005 年、佐良浜のカツオ漁は不漁が続いている最中だった。カツオ漁船の船長は一夏操業するために、船員を雇い、船のメンテナンス代と燃料代を投資しており、漁の成果をあげなければならない状況にあった。おじさんにとって自分が預かっている学生がそうした緊張状況のカツオ船で世話になることを思い、缶コーヒーを贈ることで船長や船員たちに「気をつかう」ことを示したと考えられる。船長とおじさんはよく知った仲なではあったが、そのような気づかいをおこなっていたのである。筆者はそのこと

を後で知り、そのように心配してくれていたおじさんに感謝を伝えた[1]。「人に対して遠慮してはダメだけれども、受けた行為を“当たり前”のようにやり過ごしてしまってはならない」ということを、このときに知った。まずは遠慮せずに親切を受けるが、それに対してきちんと感謝をいう、という一連のやりとりが、 「よそもの」がその土地で相互交渉し相互依存を始めることができる唯一のきっかけであるとも思った。遠慮してばかりでは、あなたに依存したくないということしか伝わらないし、当然とばかりに遠慮をまったくしなければ、ただ一方的に依存しているだけになってしまうのである。それでは一人前として信頼を得ることはできない。

このように、佐良浜では「人として“上等”[2]になるには、どうふるまうか」ということを生活の場面でいろいろと教わった。教わったといっても、こうしろああしろと説明はされず、間違えたときに教えらえるだけである。「だれとでもよく話すこと[3]」「もらったマグロやカツオを他の人に分けるのはいいことだよ」など、おばぁと呼ばれる年配の女性たちからよく教わった。

この佐良浜での調査は、老漁師の旅の語りとして修士論文としてまとめることができた［木下　2007］。それから、筆者は 2007 年から 2010 年にかけて、南太平洋の孤島で 500 人あまりの人たちと過ごすことになった。本論文の舞台は、佐良浜の海人たちがかつて漁のために船で旅して回ったという南太平洋である。

バヌアツ共和国のフツナ島で生活を始めて興味深く感じたことは、佐良浜で教わった「人として“上等”になる」ための教えが、通用するということであった。島の人は、熱心な信仰心を持つクリスチャンでありながら、呪術の話や精霊の話などもリアリティをもって語っている。日常には多岐にわたる伝統的な禁忌、タブー（*tapu*）[4]、そして慣習もある。それらは筆者にとってポリネシア的な異文化らしさを十分に感じさせた[5]。しかしその一方

---

[1] 佐良浜には女性はカツオ船に乗らないという禁忌がある。しかし、実際には中学生の学外学習の時間などで、男女の区別なくカツオ漁実習などはおこなわれている。筆者がいた 2005 年夏、カツオ漁は全体に不漁であったが、女性の筆者が船に乗った日、それが理由で不漁だったと揶揄する仲買がいたから、あまり気にしなくてもいいけど、そういうこともあるよ、と近所の年配の女性たちが教えてくれた。やはり、おじさんの「心配」に筆者は気づいて感謝しなければならない、と思った。

[2] 島の人は、素晴らしいひと・ものを表現するのに、「ジョートー（上等）」という言葉をよく使う。

[3] これは多くの人がいうことであったが、とくに印象深かったのは、佐良浜の言葉でアキャウダと呼ばれる仲買人であった 70 代の女性が、だれが相手でもおしゃべりできるというのが、島を渡るアキャウダの女性にとって大事なことであるといっていたことであった。

[4] 禁忌を示すタブーという言葉は、ポリネシア諸語のタプが語源である。フツナ語でも、いわゆるタブーのことをタプという。

[5] 日本人の筆者にとっては、「南洋の土着の文化」とは同じかそれ以上に「キリスト教」について、エキセントリックな印象を強くもった。

で、佐良浜で筆者が身につけた、他者と関係を持つときの作法ともいえるべきものは、そのままぴったりとフツナ島の生活にも当てはまることができた。いわゆる慣習や規範などの道徳的な面における両者の違いは、表面的な装飾品のように感じたのだった。

人類学のフィールド研究からは、狩猟採集民や牧畜民、農耕民、漁撈民といった人たちの生活における、いわば個別文化的な事例が集まってくる。フィールドの記述からは環境・生業と密接に関わって築かれてきた「かれらのかれららしいやり方」というものがわかる。それらは、近代社会と対比して語られることも多い。私たちは近代的な思想・社会に対して行き詰まりを感じるとき、フィールド社会から得られるやりかたをオルタナティブとしてつかうことはできないだろうかと考えがちである。人類学にはそのような可能性が期待されているであろうし、筆者もそういう望みを持ってこの研究に取り組んでいる。

しかしながら、ある思想を背景とした恣意的な分析は時代とともに間違いが指摘されるのは常である（たとえば、［ミード　1928・1976］と［フリーマン　1983・1995］）。人類学は間違いを繰り返しながら「人類とはなにか」という問いに取り組んできた。その研究史から、文化相対主義を越えて人間の普遍性（生得的な特性）を手掛かりに人間を知ろうとすることの重要性が、人類学、生物学、動物行動学などの分野から指摘されている［ブラウン　2002］。

人類学においてさまざまな地域の人に普遍的にみられる行動について、「遊び」を取り上げて研究テーマとする亀井は、人間の普遍性と個別文化依存性というふたつのモデルの統合を目指すことに意味があると指摘する［亀井　2009］。亀井は以下のように、そのふたつのモデルの関係をまとめる。

1）人は生まれながらにして遊びを生み出す能力を持っている（普遍性）
2）その能力によりどのような遊びを生み出すかは、生後の環境に委ねられる（個別文化依存性）

「このように生得的能力に言及すると、ヒトの文化的営為を否定する生物学的な遺伝決定論におちいるのかとの警戒心を招いてしまうかもしれないが、それは杞憂であろう。先にも述べたとおり、個別文化論者の陣営における、営々たる遊び研究の蓄積は否定すべくもない。しかし一方で、普遍論者たちが指摘してきた「どこに行っても遊びは似通っている」という点も否定するに値せず、両方の側面をあわせて説明するモデルを考えることが科学

的な姿勢というものであろう」［亀井　2009:16］。

筆者の研究テーマであり、人の普遍的な行動のひとつとして取り上げている「分配」も、このふたつのモデルで考えることができる。。

1）人は生まれながらにして分かち合う能力を持っている（普遍性）
2）その能力によりどのような分かち合いを生み出すかは生後の環境に委ねられる（個別文化依存性）

フィールドから帰り、見て聞いてきたことを事例としてまとめて発表すると、頻繁で伝統的な規範があり長時間かけておこなわれる食物の分配の様子や、持つ者と持たない者の関係において呪術が用いられ実際に妬まれたり、妬まれることを恐れたりしている様子に、私たちの社会とは分かち合いの作法が異なるものだと思われることがある。だが、筆者が強調したいのはそこではない。目指しているのは、かれらと共通する生得的なものを手がかりに、人はどのような分かち合いを生み出しているのかを知り、理解することである。私たちも印象的な出来事の度に共食の場を設定して楽しんだり、不公平な目にあったときには憤りが心を落ち着かなくさせたりという経験をする。私たちは日常的に呪術を用いて人が死んでしまうほどの憎しみを説明はしないが、時と場合によって人にそのような感情が起こることについては想像ができる。

フィールドワーカーは、自分の身体（生得的なもの）をたよりにしながら、行った場所で個別文化依存的な行動様式をまるで子どものように学ぶ。結果的に筆者はそのようなことをおこなっていたのだと、自分の経験から考える。

伊良部島佐良浜で暮らす経験と南太平洋のフツナ島で暮らす経験において、筆者は「違うけれども、なぜかよくわかってしまう」ことにおもしろみを感じた。わきあがる感情を人間関係の間で説明し、納得するための文化であるから、「個別」文化依存的とはいえ、その中身を分析することで、各文化に共通するエッセンスのようなものが抽出できるのではないかと考えた。

食物を分け合うという行為は、「人として当然である」ということができると筆者は考える。同時に、当然のものとしてやり過ごしてはならないという、応答が期待される行為でもある。この相手との共感をめぐる二重性が、即興性や多様性を帯びながら展開していく

分配の特徴の根源にあるのではないか。そのような視点から本論文は、南太平洋の紺碧の海に囲まれた島に暮らす人たちの分配を理解することを目的とする。

第１章　本研究の位置づけ

１−１．分配を志向する動機―「社会的な脚」と「利己的な脚」

人はなぜ分配をおこなうのか。これまでに人類学はさまざまな地域の社会・文化を対象としてこのテーマについて研究してきた。とくに狩猟採集民にみられる「気前のよい分配」、持てる者から持たざる者への分配は、平等性の高い社会の象徴である。しかし、あらゆる社会行動は互酬性がなければ発達しない。動物行動学の知見からドゥ・ヴァールは、動物の協力行動を可能にする条件（相互共生と互恵性の確保）として、1）過去のやりとりを記憶する、2）努力と報酬を結びつける、3）信頼を築く、4）ただ乗りをやめさせる、を挙げる［ドゥ・ヴァール　2010］。人間の分配も条件 1）～4）を前提にしておこなわれていると考えられる。1）について、たしかに人は過去のやりとりを記憶することができる。2）について、人は努力と報酬を結びつけて考えることができる。努力に報酬が見合っていないと怒ったり、他者を妬んだりする。2）は嫉妬や羨望の感情に関わっている。ドゥ・ヴァールによると、オマキザルやチンパンジーも努力と報酬を結びつけて考えることができ、他者と自分との不公平を嫌う行動をとる［ドゥ・ヴァール　2010］。3）について、人は他者との間に信頼を築き、社会生活をおこなう基本にしている。4）について、2）の努力と報酬を結びつけて考えることと、3）の他者と信頼を築くことの上に 4）は成り立つといえるだろう。信頼を築くということは、反面、他者を信頼するに足りないと判断する可能性があるということである。2）と 3）は、他者のただ乗りを検知し、やめさせる条件となる。

ドゥ・ヴァールによると、「最後通牒ゲーム」実験[6]によって明らかになった、人間が不公平と感じたときに生じる「軽蔑」や「怒り」の感情は非常に強く、人間が公平さを求めるのはこのようなネガティブな反応を防ぐためだという［ドゥ・ヴァール　2010］。つまり、人間が利益のみを最大限に求めるならば、不公平な条件を認め利益を得ようとするはずであるが、実験の結果が示しているのは、人間は条件が不公平であると、仮に少しの利益をもらえるとしても、拒否する傾向が強いということである。

ドゥ・ヴァールは、人間が平等を志向する動機について「社会的な脚」と「利己的な脚」があるという［ドゥ・ヴァール　2010］。「社会的な脚」とは、他者に共感すること、楽しみ、安心、気持ちいいというポジティブな感情であり、「利己的な脚」とは、不公平に対す

---

[6] 最後通牒ゲームとは、2 人の被験者にお金を分けさせることによって、行動規範を試すゲームである。被験者たちは 1 度だけ機会を与えられる。一方がお金を自分の分と相手の分に分けて、相手にその額を提示する。金額が提示されると主導権は相手に移る。相手がその申し出を拒絶すれば、お金は回収され、2 人とももらえない。実験の結果、ほとんどの文化では提示額は平等に近く、たいていは自分:相手が 6:4 程の差であった［ドゥ・ヴァール　2010］。

る嫌悪、嫉妬や羨望、憤りというネガティブな感情を指す。両方の脚が、平等を志向する動機となり、相互行為をもとにした相互共生社会がつくられる。

人類学における分配の分析は社会における互酬性に注目するあまり、「利己的な脚」の分析に偏ってきたといえる。モースが『贈与論』であきらかにした「負債の念」をはじめ［モース　2009］、分配の受け手に発生するネガティブな感情を解消するために贈与し合うという分析は多くの研究においてなされている。平等性を強く志向する社会であるために、相互監視によって個人的な蓄積を起こさせないようにする、噂をして悪口をいうことにより抑圧するという風間の島嶼国キリバス社会の描写や［風間　2003］、松村のエチオピア農耕民の社会において、潜在的な他者への「妬み」と「恐れ」が分配の交渉を構築しているという指摘は［松村　2008］、「利己的な脚」という一方の感情から照らし出した、なぜ人は分配をおこなうのかという問いに対する答えといえるだろう。

しかし、社会が成り立つ上で必要なもうひとつの人の特性、他者へのポジティブな感情「社会的な脚」を基にした分配の動機を考えることが、相互共生の社会における分配という行為について考える上で重要なのではないだろうか。ゆえに、本論文では「社会的な脚」、つまり他者への共感や楽しみ、安心や気持ちよさを軸にして、他者の自発的なモチベーションを確認し、食物を分かち合っているということをあきらかにしたい。

１−２．分配をおこなう動機―受け手の負い目

分配行為に乗り出すためには、モノを所有しているということが基本となる。実際に私たちは人から贈り物を受けるとき、それがだれのものかを基準にして、欲しいかどうかを考えることがある。所有者によって、贈り物のモノとしての価値とは関係なく、うれしくなったりそうでもなかったりするのである。モノを与えたり受けとったりする相互行為には、それがだれのモノかということが行為の意味を決定する。

分配と平等社会の関係について、モーガンは『古代社会』で、社会を「野蛮」「未開」「文明」の 3 つの区分に分け、文明以前の社会には「私有財産」の概念が欠如しており、ゆえに平等社会を成り立たせていると解釈した［モーガン　1958・1877］。つまり文明の誕生と発展は、財産を私有・所有することから始まったという。また、エンゲルスは『家族・私有財産・国家の起源』で、モーガンの区分における「未開」以前の氏族社会を共産的「共同所有」の社会であるとした［エンゲルス　1965・1891］。そこでは、共同で作り出すものは共有財産とされる。エンゲルスは、「未開」以前の「原始共産制」社会から、氏族制度の

崩壊、商品経済や社会分業の進展、階級の発達、国家の発明などの過程を経て「私有財産制」社会へと移行してきたとする［エンゲルス　1965・1891］。

モーガンやエンゲルスによる、氏族制度社会（未開社会）において平等（富が集中しない状態）が実現したとする理由は、彼らは私的財産を持たず共同体所有していたからというものであった。

しかし、人類学のフィールドからは、共同体所有とは単純にいえない多様な所有形態をもとにした贈与分配を詳細に記述した事例が紹介されるようになる。

マリノウスキーは、トロブリアント諸島のクラ交易やその他日常的におこなわれる 7 つの贈与システムを記述し、これらの交易は社会・儀礼的な制度であり、その交換をおこなうゆえに、それらの島々の間で社会的な連帯を持つことができるとした［マリノウスキー 1967］。

モースは『贈与論』で「全体給付のシステム」を唱え、そのために必要な条件は、返済する義務、与える義務、受ける義務の 3 つであるとし、これが互酬性の原理であるとした［モース　2009］。互酬性とは、贈与には等価交換の期待があることを意味する。モースによると、返済する義務は、贈りものを受け取ることによってその人に発生する負い目、負債の念によって支えられ、与える義務は、与えることによってその人が威信を得られることによって支えられている［モース　2009］。このモースの『贈与論』以来、分配の受け手が負債の念を解消する為に贈与し合うという社会のモデルが、人類学において一般的になった。

レヴィ＝ストロースは、氏族間の「女性の交換」までを含む、より広い互酬論を展開した［レヴィ＝ストロース　1977］。これは、交換をおこなう当事者が意識せずとも、社会的な連帯を維持する構造がつくられていることを説明した。リーチは、互酬性の成立には具体的なモノの交換だけではなく、感謝やサービス、地位や威信が贈り物の返礼として相手に贈られることによって可能になると指摘した［リーチ　1974］。サーリンズは互酬性のタイプを類型化し、社会的な距離と関係することを指摘した［サーリンズ　1984］。つまり、返礼を期待せず惜しみなく与える贈与「一般化された互酬性」は近親間に限られるものとした［サーリンズ　1984］。サーリンズによると贈与における“気前の良さ”は相手が近親者かどうかによって決まるということである。分配において、受け手からの返礼が必ずしもあるわけではない。しかし与え手と受け手との間で互酬性が成り立つことが、分配が続けられる理由であるとして、リーチやサーリンズは以上のように考えた。

しかし、狩猟採集民や牧畜農耕民などのフィールドの報告から、必ずしも贈与には返礼が

ともなっていないことが指摘されている。

岸上は、これまで二者（もしくは二集団）のあいだの互酬性について、北米の狩猟採集民イヌイットの事例から、狩猟採集民社会における食物分配は必ずしも「互酬性」にもとづく交換であるとはいえないことを指摘している［岸上　2003］。岸上によると、狩猟採集民の分配には、「食物分配の始まり方」によって「要求による分配」、「規則による分配」、「自主的な分配」の 3 タイプがあり、「食物の流れ」に注目すると「移譲」、「交換」、「再・分配」の 3 タイプがあり、これら 2 軸の組み合わせにより 9 つの食物分配の形態が存在するという［岸上　2003］。岸上は、この類型によりあきらかになったイヌイットの食物分配の形態の特徴は、「移譲」、「再・分配」が一般的で、「交換」は見られなかったことと、「要求による分配」がほとんどなかったことであった［岸上　2003］。平等な社会は互酬性を基本にして成り立つと考え、狩猟採集民などの社会を事例に、交換となる分配が論じられてきたが、実際には贈与（岸上の分類では「移譲」）がおこなわれているだけで、それに対する顕著な返礼はみられないことが多い。

松村は、エチオピアの農耕民の分配の事例から、多様な富の分配に対して、返礼がほとんどおこなわれておらず、サーリンズの「一般化された互酬性」（社会的距離に応じて惜しみなく与える）はあてはまらないという［松村　2007］。松村は、負債関係や権力関係を生じさせる互酬性原理そのものが絶えず人びとの間で交渉されており、規範やモラルを支えるローカル社会そのものに可変性があると指摘している［松村　2007］。

人類学における贈与をめぐる議論は、贈与が始まる“気前の良さ”を説明するものとして、「与える―受ける」という二者間に互酬性が成立することを証明しようとしてきたが、実際におこなわれている分配は二者間の互酬性だけでは説明できないと岸上や松村は指摘していた。では、分配や贈与に関係する互酬性と社会全体はどのように関わっているのだろうか。

１−３．分配をおこなう動機２―与え手が威信を獲得する

伊藤は『贈与分配の人類学』において、オセアニアの贈与分配の事例から「交換当事者が一方では相互に均衡をはかりながら、他方では相互に不均衡を意図的に創出するメカニズムを内在している」と指摘する［伊藤　1995］。贈与交換を中心とした社会では、同調原理が作動すると不均衡が調整され、競合原理が作動すると均衡が否定され不均衡が大きくなるという［伊藤　1995］。同調原理とは、贈与によってモノの分配がおこなわれ社会に平等

があらわれることを指し、競合原理とは贈与によって他方発生する負債の念を与え、威信を獲得することによって社会関係に不均衡が生まれることを指す

市川も、平等を志向する分配が多義的な行為であるとして、伊藤と同様の指摘をおこなっている［市川　1991］。物質のやりとりとともに負債のやりとりが発生するが、その対処のやり方によって徹底した平等社会を形成するか、個人に威信を認める不平等社会を形成するかが分かれるのだという。前者としてあげるのはアフリカのカラハリ砂漠の狩猟採集民サンの事例で、贈与分配をおこなう者には徹底的に威信を認めない。後者の例はニューギニアのビッグマン（首長制）の事例で、贈与分配における“気前のよさ”に威信を認め、権威を集中させていくという。市川は、平等社会を実現するサンについて「威信への希求が潜在的に大きいからこそ、少しでも不平等につながる行為に対しては厳しく監視の目を光らせている」とし、平等は不断の努力によって達成されるものであるという［市川　1991］。

伊藤も市川も分かち合いのありかたがその社会の人間関係を形成しており、多様な社会形態をつくり出していると指摘している。市川がいうように、個人に権威を認めないという点で狩猟採集民サンやアカ・ピグミーの社会は平等であるが［丹野　1991］、対照的に、首長制や階級制が見られ不平等ともいえる牧畜・農耕社会においても、「平等を志向する不断の努力」が見られないわけではない。むしろ、後者の社会には不平等という枠組みがあるからこそ、さまざまな交渉手段を用意し「不断の努力」をおこなっているといえる。そのような社会にとっては、不平等の枠組みさえも、平等を志向し維持するための工夫のように考えられる[7]。

１−４．分配をおこなう動機３―受け手に負い目を偏らせない

ここまでみてきたように、人類学においては、贈与分配のありかたが多様な人間関係を形成し多様な社会形態をつくるとして研究されてきた。贈与分配行為は、変化しうる動的な人間関係において平等をあらわし、確認する手段である。アフリカの狩猟採集民アカ・ピグミーを研究する北西は、アカ・ピグミーの獲物の分配の事例から「何段階かにわたる分配やこのような意図的とさえ思えるようなやり方で、何重にもなった食物の与え手と受け手という関係の網の目を作りだそうとしている。この関係の網の目によって、アカはキャンプ内のメンバー間の社会関係の形成、確認を日々おこなっている」としている［北西

[7] 掛谷はトングウェ社会の首長ムワミ制度について、「最小限の社会的・政治的な不平等性を導入することによって、平等性を基調とする社会を維持してきた」と論じている［掛谷　1991］。

2004]。北西は、分配の現場でだれがだれに与えたかということは決して曖昧にされてはおらず、むしろ所有者は明確にされているが、互酬性を軸に分配がおこなわれているとは思えず、獲物を持つ所有者の与える義務があるだけではないかという［北西　2004]。つまり、受け手は与え手になり、与え手は受け手になるという関係によって、負い目や威信が偏らないのである。

なぜ、「他者に分けるのか」という直接的な質問には、「そうするものだ」としかいいようのないものとしてこたえがかえってくる［北西　2004]。市川は、分配を余儀なくさせていることは、持たざるものへの憐みや助け合いの精神ではなく、他人の非難に対するおそれ、つまり持たざるものからの羨望や陰口ではないかという［市川　1991]。徹底して他人から妬まれないようにすること、「持つ者は与える」ことが、当然のふるまいとなるのである。

平等性を強く志向する社会において、個人から他者に対して発生する羨望や妬みが与える影響の大きさから、分かち合いが起こると指摘する研究は多い。

風間は、中部太平洋のキリバスの島嶼社会について、「周囲のひとびとは相互監視によって個人的な蓄積を起こさせないようにする。秘匿しようとする個人と、それを監視し、噂して悪口をいうことにより抑圧する周囲の人々との駆け引きが日常的におこなわれている」と表現する［風間　2003]。フォスターによる envy（持つ者への羨望と妬みの感情）と jealousy（持つ者が失うことを恐れる感情）の分類によると［Foster　1972]、キリバスで見られる強い嫉妬は、もっぱら envy の方であり、所有物をめぐる駆け引きは、a）他者のうわさや知識や嫌疑を遮断するために秘匿し、自らの所有物の排他性を強化する（つまり隠すということ)、b）あえて他者に見せ、鷹揚にふるまう（気前よくあげるということ）の 2 つであるという［風間　2003]。この事例分析は、市川が指摘する羨望や妬みが起こす分かち合いの論理と重なるが、風間のキリバス社会の記述では「相互監視の窮屈さ」が強調されており、分配する者がその行為に乗り出すときのネガティブな感情（つまり他者の目を恐れるということ）のみに焦点が当てられているといえるだろう。一方、今田は同じキリバス社会における現金贈与の事例から、かれらが現金を他者に与える理由がいかにあろうとも、それによって他者に対して威信を持ちすぎることを回避するために、直接的な集金（現金贈与）の場を、ビンゴゲームという遊びの場にしてしまうことを報告している［今田　2006]。他者からの妬みや羨望が贈与に影響することは確かであるが、その関係だけですべての贈与分配行為を説明することはできない。分配の場の形成には「遊び」の場を適用するなど多様な工夫が見られる。

松村はエチオピアの農村の事例から、互酬性原理が生み出す権威や負債を持ちすぎないために、人々がさまざまなはたらきかけによって、それを是正ないし緩和していると指摘している［松村　2008］。松村も風間と同様、人々が潜在的な「妬み」と「恐れ」を軸にして交渉を構築していると考察する。松村は、フォスターのいう envy は「妬み」であり、jealousy は fear「恐れ」を起こしこれを含むものであるとする。これが、物理的な利害（互酬性）だけではなく、「思い（＝人の豊かさにむけられるまなざし）」につきうごかされ、富の分配が起きる理由なのである［松村　2008］。

以上のように、羨望・妬み・恐れという他者へのネガティブな感情が、実際の分かち合いの現場を取り巻くという指摘は、各地域の研究でなされている。しかし、それらネガティブな感情だけが、分かち合い＝平等性の高い社会の維持のために、不断の努力をする動機ではない。

インドネシアのジャワ島の農村社会で見られる分配について関本は、「人々の富者への期待に無制限に応えていると富を失ってしまうという不安感を抱きつつ、過大な支出を避け、なおかつ悪口を言われぬ程度にふるまいをする均衡点をどこに見つけるか、人々はいつも微妙な打算と駆け引きをしている」と、先述の風間や松村と同様の考察をしている［関本 2004］。ジャワの農村社会は土地の所有形態や階級などにおいて個人差が大きく、一見不平等な社会と見えるが、関本のいう「駆け引き」は饗宴などにおいて、富者から品者への再分配で観察され、それは制限された平等観を形成しているという［関本　2004］。しかし、平等を志向する人々の駆け引きはそれだけではなく、ジャゴンと呼ばれる正式な饗宴に対して日常的なジャゴガンと呼ばれる遊びの場（夕刻から、ただなんとなく集まり軽食をとりながらおしゃべりに興じる場）で見られる言葉遊びによるヒエラルキーのパロディ化の「即興、創造性、変化、驚き、心地よさの感覚」こそが、圧倒的な不平等のなかでのもうひとつの平等への契機になっているのではないかと指摘する［関本　2004］。

分配の場における人びとの参加の動機は、持つ者―持たない者の間から生まれる妬みや羨望、それに付随する恐れといったネガティブな感情であるという指摘があったが、実際人びとを分配の場に駆り立てている感情はそれだけではない。最後に関本が示唆したような、即興、創造性、変化、驚き、心地よさの感覚といったポジティブな感情や、今田の示した分配を遊びに変えるなど、他者と時間を共有する楽しさがある。

１−５．楽しさと共感──一致の感覚

食物の分かち合いは人類社会に普遍的にみられるものである。人類の食物分配について、黒田［1999］は以下のようにいう。

「食物分配にはさまざまな意味や感情が込められるから、人類学者は食物分配を多面的に分析しようとするが、それにもかかわらず分配行為に付随する楽しさが言及されることはまずない。たしかに、分配の楽しさは状況や個人的な感覚の問題であり、分配を受けたときの「負債の念」の方が社会関係に上下の秩序を生み出すと考えられているのとは違って、「楽しみ」が社会関係におよぼす作用は明瞭ではなく、扱いようがない。しかしそうであっても、これが食物分配に付随する基本的な感情のひとつであることは忘れるわけにはいかない」［黒田　1999:122］。

たしかに、ここまで紹介した人類学の研究においても、与え手の「権威（威信）」と受け手の「負債の念」から発生する他者への妬み、嫉妬、羨望といったネガティブな感情が、社会の均衡（平等性）をあるときは調整し、是正し、緩和していることが指摘されていた。不公平や不平等を嫌う心情は、文化的な相違を越えても理解できる。また、その調整、是正、緩和のやりかたに、個別文化的な違いがあるということがわかる。

黒田の指摘どおり、「楽しみ」が社会関係におよぼす作用は明瞭ではなく、研究において扱いにくいものではある。しかし、まずは嫉妬や羨望と同時に、なぜ楽しみが分配をめぐる感情において重要であるかを確認してみたい。分配において楽しみという感情もまた普遍性があり、その取り扱いについては個別文化的な違いがあると考えられるからである。

黒田は『人類進化再考』において、チンパンジー属にみられる食物分配とヒトの食物分配とを比較し進化的な連続性を指摘している［黒田　1999］。

［表 1］チンパンジー属とヒトの食物分配の特徴[8]

チンパンジー属	ヒト
所有者をみとめる	所有者をみとめる
覗き込まれると平気ではない	見られたらあげてしまう
乞われたら、逃げるか、少しだけあげる	気前よく（積極的に）あげる
制度的なものはない[9]	制度（規範）によって分けることもある

チンパンジー属とヒトの食物分配にみられる特徴をまとめると表 1 のようになる。両方とも、食物を持つ者の所有を認めている。これはどういう意味かというと、基本的に他者が持っている食物を力にまかせて「強奪」しないということである。たとえば、チンパンジーは、アルファ・オス（群れで最も強いと認められるオスの個体）であっても、力の弱いメスが持っている食物を奪うことはない［ドゥ・ヴァール　2010］。覗き込みや物乞いのしぐさ（目の前に座って手を差し出す）をおこなったり、ボノボであれば積極的な性行動に誘ったりするなど、あくまでも他者の所有を認めたうえでしかおこらないと思われる交渉がおこなわれる。チンパンジー属の分配の場合は、持つ者に「惜しみの感情」が強くあらわれるが、ヒトの場合は積極的に「気前よくふるまう」ことが特徴である。チンパンジー属は食物分配の場で「惜しみの感情」が顕著に見られるからこそ、その分配はヒトがおこなう分配には到達していないとされてきたが、黒田はチンパンジー属が見せる「惜しみの感情」からこそ、他者を無視できない「我欲（食べものを自分のものにしてしまいたい）を断念できない葛藤」がわかり、ヒトの分配との進化的なつながりを考察する上で重要としている［黒田　1999］。

黒田はここから、ヒトの食物分配は「当たり前（分かち合うことが当然）とされながら、当たり前ではない（我欲があり葛藤がある）という二重性」を抱えているのが特徴であり、このバランスのとり方は文化によって異なっていると指摘する［黒田　1999］。つまり、ヒトの社会では、食べものを分かち合うことは当たり前とされながらも、できれば自分（もしくは自分の家族）で食べてしまいたいという欲求がないわけではない、けれども他者と

8 チンパンジー属のデータは、黒田［1999］、ドゥ・ヴァール［2010］による。
9 自然制度が認められる［黒田　1999］。

分け合う、そして分け合うことは楽しい、と分配の場で起こっていることが説明できる。この二重性を抱えているからこそ、人間は他者と分かち合うことで楽しいという感情を生むことができるし、それを他者と確認し合うことができる。人は他者の心がわかる。そのために、直接的な言葉のやりとりだけでは、信頼を見極めるのは難しい。「当たり前であって、当たり前はない」という分配の持つ二重基準を越え、他者と楽しさを共有することによって、はじめて相互に信頼を置くべき相手であるという確信をえることができるのではないだろうか。そこに共同体（社会）の維持と絶え間ない分配行為が切り離せられない理由があると考える。

狩猟や採集活動がもたらす共同感覚、連帯の気分とともに、だれもが喜ぶ食べものを分け合うことには格別な楽しみがある［黒田　1999］。筆者もフィールドにおいて、取るに足らない小さな獲物、手のひらサイズの魚やタコであっても、自分で獲れたことがうれしく、周囲からも「よく獲った」と喜んでもらい、魚であれば焼いてできるだけその場にいる人みなに食べてもらい、タコは釣りの餌として全部その場で分けてしまった。分配の楽しさは、「そうしたい気持ちになってしまう」としかいいようがないものである。

また、もらった方に生じる負債の念だけでは、しばしば同質の食べものを分配し合う理由が説明できず、そのような交換は相互依存の確認、あるいはコミュニケーションととらえられるが、要するに自己の食べものの一部を他者と共有することの楽しさがそうさせると言ってもよいのではないかと黒田は指摘する［黒田　1999］。食物分配のやりとりの楽しさは、おしゃべり（会話を続けること）と似ており、もらってばかりいる状況は一方的にしゃべられてしゃべり返すことができず我慢しがたい状況になり、しゃべる方もまた相槌を打ってしゃべり返してくれる方が楽しいことと同じである［黒田　1999］。分配のやりとりでは、そこにのぞむ自己と他者の楽しみが“いまここ”で一致することを確認しているのである。寺嶋は、その一致の感覚は、身体的不平等をないものとしてスタートさせる「遊び」にもみられると指摘している［寺嶋　2007］。

黒田や動物行動学のドゥ・ヴァールは、このように人を分配に駆り立てるもの、分配における「楽しさ」の理由は、進化の過程で獲得されたものとして分析する。

黒田は、ボノボやチンパンジーたちが食物を〈乞う―乞われる〉場において、食物に対する自制と他者への信頼をベースにふるまっていることがわかることから、他者への欲求を自己の欲求と同じように感知すると推測することが妥当であるという。これは、「他者の楽しみを楽しむ」ことができるということである。他者の楽しみを楽しむことを相互に検知

することが、嫉妬や羨望とはもうひとつ別に、分かち合いにおいて結果的に互酬性を確保する（ただ乗りを許さない）ためにある重要な共感の感情だったのである。黒田は、他者を我が身のように感じる能力（共感）を軸に分配が起こることについて、「食物分配においても、行為の意味は食物の入手だけでは説明できないことが多かったように、分配者と被分配者間の「思惑の一致」が重要な要素であった。もし、相手が欲求の断念で相対してくれるのなら、そのことが伝わっていることを私はあらゆる方法で相手に伝えなければならない。喜びとお礼の言葉、そして私自身の欲求の断念によってである」と表現している［黒田　1999:270］。

以上、分配における「楽しみ」の議論をみてきた。分配の楽しさは他者との思惑の一致であるため、遊びのつくる感覚に近いと考えられる。

第２章　調査地概要

本論文の調査地は南太平洋の島嶼国、バヌアツ共和国に位置する 2 つの島である。本章ではバヌアツ共和国の概要と、本論文の調査地域であるフツナ島とメリック島の概要を説明する。

調査期間は 2004 年 8 月 17 日から 10 月 9 日、2007 年 8 月から 2008 年 8 月、2009 年 8 月から 11 月、2010 年 5 月から 8 月である。そのうちフツナ島にはのべ約 1 年滞在、メリック島には、のべ 54 日間滞在した。滞在中は島の人の家に下宿し、日常的な生業活動に参加しながら調査をおこなった。

２－１．バヌアツ共和国

バヌアツ共和国（Republic of Vanuatu）は南太平洋のメラネシア地域に位置し、約 80 の島からなる島嶼国である［地図 1］。人口は 234,023 人で、そのうちの 44,040 人が首都ポートビラ（Port Vila）に住んでいる［Vanuatu national statistics office census 2009］。バヌアツはかつてニューヘブリデス（New Hebrides）とよばれ、イギリスとフランスの共同統治下にあり、1980 年に独立した比較的新しい国家である。公用語は英語が現地語化したピジンイングリッシュであるビスラマ語（Bisrama）、英語、フランス語であるが、それぞれの島や地域では独自の言語がつかわれている。宗教はほとんどの国民がキリスト教である。宗派はバヌアツ北部地域ではメラネシア教会（Church of the Province of Melanesia）、バヌアツ南部地域では長老会派（Presbyterian）が多数を占めるほか、カソリック、AOG（Assemblies of God）、SDA（Seventh-Day Adventist）、NTM（New Tribes Mission）、エホバの証人などがある。

主な産業は観光業と農業である。コプラ（ココヤシの果肉を乾燥させたもの）や木材、牛肉等を輸出しているが、工業製品や米、缶詰をはじめとする食品を輸入しており、恒常的な輸入超過による赤字を海外からの援助で補填している状況である。外貨獲得のために近年バヌアツ政府は首都ポートビラを中心とした観光業に力を入れている。通貨はバツ（vatu）で、1 バツは約 1 円である（2012 年）。

２－２．フツナ島

２－２－１．地理概要

フツナ（Futuna）島は、東経 170 度、南緯 19 度に位置する。首都ポートビラがあるエ

ファテ（Efate）島から、南南東に約 300 キロメートル、最も近いタナ（Tanna）島からは東に約 90 キロメートル離れた海上に位置している。島は急峻な隆起サンゴ礁からなる台形状で、標高は 666 メートル、周囲は約 4 キロメートル、面積は約 11 平方キロメートルである［写真 1］。水資源は豊富で、湧水を各村落まで簡易水道パイプによって引いている。島の頂上の台地は、タタフ（*Tatafu*）と呼ばれる。標高が高いため雲がかかっていることが多く、村落がある場所より気温の低い湿地となっている。タタフを利用して約 20 年前まではスワンプタロを栽培していたようだが、病気で枯死したため、以後現在にいたるまでタタフの土地は利用されていない。

焼畑の耕地は、標高 400 メートル以下の斜面に作られている。島は急斜面が多いため、そのなかでも比較的平らな場所を選んで耕地が作られている。土壌は火山性の基盤に石灰岩のためやせている。

人びとが居住する土地は、標高 30 メートルほどの段丘に位置する。大きく分けて 6 つの村がある。村と村をつなぐのは細い山道で、崖に阻まれたところどころに階段がかけられている［写真 2］。島内に自動車や馬などの乗り物はなく、移動は徒歩である。村から海浜部に降りるときも、急勾配の細い道を歩くことになる。

島は、空港があるミッションベイ、北西のヘラルドベイ、南東のマタギとおおまかに 3 つのエリアに分かれる［地図 2］。ミッションベイ地区にはイパウ（Ipau）村、ヘラルドベイ地区には北側にイシア（Ishia）、タロマラ（Taroumara）、モウガイルンガ（Mouga Iluga）村、西側にイアソア（Iasoa）村、マタギ地区には、イタヴァイ（Itavai）、イマラエ（Imarae）村がある。イタヴァイとイマラエは隣接しており、しばしばひとつの村として扱われている。各村の人口は、50～100 人ほどで、島全体の人口は 535 人である［Vanuatu national statistics office census 2009］。

現在、イパウ村に空港や看護士が常駐するディスペンサリーなどの公共施設が集まっているが、空港ができる以前は島の政治の中心はヘラルドベイ地区であったという。現在でも、学校（幼稚園、小学校、中学校）はヘラルドベイのイシア村にあり、3 つの村が集まる学校周辺は最も人口が多い。

島外に移住しているフツナ島出身者は、首都ポートビラ、近隣のタナ島、アナイチュム島を中心に 1000 人を超える［Vanuatu national statistics office census 1999］。首都があるエファテ島、タナ島、アナイチュム島には、それぞれフツナ島出身者が集まって生活する分村がある。進学や就労を理由に島を離れる若者が多く、以前に比べ島の人口は減って

いるという。また、ニュージーランドやオーストラリアへの出稼ぎ労働が 2007 年から始まり、20～40 代の男性を中心に島を出る人が急増している。労働内容は主に果樹園の収穫で、1 年単位で就労契約するため、出稼ぎで島を出ると 1 年以上戻ってこない。海外出稼ぎ労働者の増加は島の過疎化に影響している。

首都と島を結ぶ交通は、小型のプロペラ飛行機（5～10 人乗り程度）と貨物船がある。飛行機は首都から近隣の島々を経由してフツナ島へ週に 1～2 便発着する。船は不定期で年に 2～3 回運航する。島には船を接岸できる港がないため、湾内に投錨したあとは小型ボートやカヌーをつかって浜との間を行き来する。小型の飛行機では貨物はほとんど運べないため、船の運航によって島内の物資の搬入が決まる。島には、石鹸や缶詰、砂糖などの日用品を販売するための小さな商店を営むものもいるが、船の運航が不定期なため商品を計画的に首都から運ぶことはできない。船の寄港が 6 か月以上ないことはよくあり、そのようなときはどの商店もほとんど品切れとなる。船による物資はあてにできないため、島では自給自足が生活の基本である。

島内の交通は徒歩であるが、緊急時や移動する人が多い場合は、船外機付きボートをつかって海上を浜から浜へ移動することがある。島には船外機付きボートが 3 艇あり、トローリング漁に主につかわれるが、前述のように貨物船が来ず船外機の燃料が不足することが多いため、つかう機会は限られている。

言語はフツナ語である。近隣のアニワ島で使われている言語とはほぼ同じで、サモアやトンガのポリネシア語に共通する語彙が多く含まれており、言語学的な知見から、およそ 600～800 年前にポリネシアからの移民があったと考えられている［Tryon 1996］。島の人は、隣のタナ島、アネイチュム島とはまったく異なる言語であり、出身の島が異なるものどうしが会話をするときは互いに公用語のビスラマ語を用いている。

宗教はキリスト教で、宗派は長老会派が多数を占める。各村に長老会派の教会がある。島では少数派として AOG、NTM 、SDA のものもいる。AOG の教会はイアソア村に隣接するナキロア村にある。1960 年代、イアソア村の男性（A1）が島外において新興宗派の AOG の教義を知り、自分の島に AOG の教会を建立したいと、当時人が住んでいなかった岬の突端の土地を切り開いたのがナキロア村の始まりである。島の伝統では岬の土地は精霊が住む場所とされており、通常は人が立ち入れない禁忌の場所であった。しかし男性は「キリスト教への強い信仰心があれば、精霊は恐れることはない」といい、賛同を得られた島の協力者たちと共にナキロア村を開き教会を造った。NTM の教会はイシア村にあり、

ナキロア村の AOG の教会とは頻繁に教会活動を共におこなっている。SDA は一家族が近年信仰を始めた程度で、拠点とする教会建物はまだない。長老会派が島の人口の約 8 割を占める。多数派の長老会派に対して、AOG と NTM、SDA は礼拝や行事などをしばしば合同で執りおこなっている。通う教会の宗派が違えども日常的に互いに仲が悪いわけではない。長老派とその他の宗派も年に数回は合同で礼拝をおこなっている。しかし、教会運営は完全に独立しており、他島への遠征や勉強会、教会建物の改修に必要な費用を寄付金で集めている。週に 1 回の日曜日の礼拝やその他の教会活動によって、教会ごとのメンバーシップは形成されている。

島民はすべてクリスチャンであり、島の生活は教会関係の行事を中心に営まれている。一方で、キリスト教以前の祖先崇拝やアニミズムも根強く残っており、キリスト教への信仰と矛盾しない形で生活にあらわれている。たとえば、病気や死に瀕するなどの不幸があったとき、人びとはキリストの名や聖書を冠した祈祷をおこなう。祈祷は人に悪さをはたらく精霊を調伏するためにおこなうものと位置づけられている。かつては生活の一部に伝統的な精霊の名前や存在があった。しかし、キリスト教が島に広まったことにより、現在ほとんど消失したと人びとは語るが、善のキリストに対立する悪のものとして、依然精霊が身近にイメージされていることがうかがえる。自然環境に依拠する島の生活では、病気や死、自然災害や事故がある日突然起こりうる。人（キリスト教）と自然（精霊）との拮抗した空間に住んでいるというイメージが、島の人たちの熱心な教会活動、祈りや日曜礼拝につながっていると考えられる。

各村には 2～3 人のチーフがおり、チーフを集めた委員会、チーフカウンシル（FFCA；Futuna Fotoriki Chief Council）を中心に島の政治はおこなわれる。チーフは自分の村に聖地であり人びとを集める場所、マラエ（*marae*）を持っている。マラエは、なにもない草地であったり、村共同の台所（石焼き調理場）があったりと、場所によって形態はさまざまである。竹川によると、フツナ島のチーフには 2 つの半族があり、ひとつはカウィアメタ（*kauiameta*）という攻撃的な性格を持つチーフとされ、もうひとつはナンプルケ（*nampuruke*）という穏やかな性格を持つチーフである［竹川　2008］。両者の性格の違いは、会議において議論をうまく進行するために重要であるとされ、たとえば公の会議の場では、直接的な言い回しを好む攻撃的な性格のカウィアメタ半族のひとたちが主導権を握るが、意見が分かれたときの最終的な決定はナンプルケ側のチームにゆだねられることが多いため、ナンプルケ半族は別名「ネムリザメ」と呼ばれ、その発言は影響力が強いと

されている［竹川　2008］。島の人にきくと、昔ほど両半族の違いは明確ではなくなってきているという。しかし、日常的に目にするふるまいにおいて年長者のチーフの性格の違いは、筆者にもわかる程度ではある。たとえば、カウィアメタ半族のチーフは、初対面の島外の人や外国人に物おじせず積極的に話しかけるのに対して、ナンプルケ半族のチーフは遠慮がちにあとから話しかけてくるなど静かにふるまう。しかし、「学校教育がおこなわれるようになってから、チーフの性格の違いが失われてきている」と指摘する島の人がいるとおり、現在中年以下のチーフではその性格の違いは顕著ではなくなっている。

フツナ島に特徴的な二重チーフ制では、島には常に約20名のチーフがいることになるが、2007 年にバヌアツ政府の行政方針により、島のチーフは選挙によって全員で 10 名選出することとされた。これにより島では混乱が起こり、数年間チーフカウンシルは機能しなかった。これまで伝統的に認めてきたチーフを、選挙という新しい外来のシステムによってそれまでの半数に絞り選ぶことは、実際にはできなかったのである。2010 年に改めてチーフの数を 15 名にすることを政府との間で合意したため、混乱は幾分収まり、チーフカウンシルは政治機能を取り戻しつつあるといわれている。

島の人は、みなすべて 6 つの村（*mrai*）のいずれかに属する。その所属によって、饗宴時の分配や村別の共同作業などに参加する。所属は基本的には父方の所属となるが、子どもは父方母方問わず、祖父祖母、叔父叔母の養子になることも多く、同じ家族であっても所属が異なることがある。また、婚姻後、妻方の村に居住する夫婦があるため、その場合も所属する村と実際に居住する村とが異なる。

２－２－２．生業活動

本論文では食物分配の事例を分析する。島で実際に人びとのあいだでやりとりされる食物のほとんどが、日々の生業活動で得られるものである。フツナ島の生業は、主にアウトリガーカヌー（*vaka*）をつかっておこなう漁撈と焼畑耕作である。

漁撈や耕作など、個人の体力や技能の差から得られる食物の量にも当然差が生じるが、島では共同作業や分配をおこなうことによって結果的にその差の開きが大きくならないように調節されていると考えられる。以下に生業活動の具体的な内容について紹介する。

カヌーをつかって釣り漁に出るのは男性に限られる。フツナ島をとりまく海流は強く、サンゴ礁が沖に発達していないため、直接外洋に面した島の海は天候の変化を受け波が高くなりやすい。とくに岬周辺は潮が複雑に変化して危険であり、カヌーは高波を避けるた

めに艇の周辺に部品を取り付け一段高くしている。通常よくつかわれるのは、個人で所有している 1〜2 人乗り用の小型カヌー（*poruku*）で、集団でおこなう漁のときには、村で所有している 4〜5 人乗りの大型カヌー（*vaka sore*）が用いられる。近年では、船外機付き小型ボートによる擬似餌をつかうトローリング漁もおこなわれている。島内では燃料が不足しがちなため、頻繁にはおこなわれないが、大漁のときはサワラやカマスなどの大型回遊魚を数時間で 10 匹以上揚げることがあり、現在では重要な漁となっている。

島の西側には深いフツナ海溝があり、島の近海は大型回遊魚が通る好漁場とされている。フツナ島には伝統的に重要視される漁がある。トビウオ漁（*tutu*）とラマガ漁（*ramaga*）である。トビウオ漁は季節的に島の周辺に寄ってくるトビウオ（*save*）の群れを狙って夜間におこなうものである。ココヤシの葉を束ねてつくった松明[10]を用いて船上で灯かりをつくり、飛んでくるトビウオを網で獲る漁法である。ラマガ漁は、獲ったトビウオを餌にマグロ、サワラ、カマスなどの大型回遊魚を狙う釣り漁である。トビウオ漁とラマガ漁のとき、男性たちは浜に降りそこで食事や仮眠をとり漁に出る。そして、朝方になってから集落に戻ってくる。ラマガ漁で獲った魚（*ramaga ika*）は、「男の魚」と呼ばれ特別な扱いを受ける［竹川　2008］。内臓は浜で取り除いてはならず、必ず地面につけないようにして集落まで担いで運び、魚の解体は女性がすることになっている。肉は女性にしか分配されず、男性は食べてはならない魚となっている。男性はトビウオかその他釣りで得たリーフフィッシュを食べるべきとされている。

トビウオ漁とラマガ漁には季節があるが、その他の釣り漁、モリ突き漁は周年おこなわれる。沿岸からおこなう釣り漁も盛んである。釣り漁は男性だけでなく、女性も好んで盛んにおこなう。男性は木を削ってつくった糸巻に釣り糸を巻きつけた道具（*uka*）を用いるが、女性は細い竹に釣り糸を取り付けてつくった釣竿（*koune*）を用いる。餌は、沿岸にいるタコをしとめてつかうほか、あらかじめ夜間に集落の周辺で捕まえておいたオカヤドカリをつかう。大潮のときは絶好の磯歩き日とされ、老若男女、子どもたちも連れだってそれぞれ獲物袋を持ち、採集や釣りにいそしむ。タコ、サザエやカニ類、小型の貝類などが採集の対象とされる。

そのほか、罠漁としてイセエビ漁がある。パンダナスの気根をつかってカゴを編み、ナシシ（*najiji*）と呼ばれる罠をつくる。これを水深 1 メートル程度の沿岸に設置して夜行性

---

10 現在では手製の松明の代わりにコールマンランプをつかうのが一般的であるが、ランプを所持しているものは各村に 1 人程であるため、漁の最盛期には松明がつかわれることが多くなる。

のシマイセエビを獲る。ナシシは男性、女性のどちらもつくり、海に設置することができる。島ではイセエビについて禁漁期を設けたり、電灯を用いる夜間のモリ突き漁を禁止したりして資源の枯渇を防いでいる。

以上が海における生業活動である。フツナの人たちは他島の人と比べて自分たちは「海の人」であるという自負が強い。実際に隣のタナ島の人たちは外洋における漁撈活動などほとんどおこなわないという。フツナ島で獲った回遊魚は、ときおり販売目的でタナ島に輸送されている。

焼畑耕作の畑（*vere*）は、島の急斜面のうち比較的平面なところを選んでつくられている。畑を 1 年使用したあとは 3～5 年休ませて再びつかうというサイクルである。主な作物は、ヤムイモ（*ufi*）、タロイモ（*taro*）、キャッサバ（*pioko*）、バナナ（*fujitoga*）などである［表 2、表 3、表 4］。

畑に火を入れ始めるころ（9～10 月）は、畑やその境界線をめぐって各個人の間で争いが起きやすい季節である。決着が着かず深刻な場合はチーフが調停に関わるが、たいていは話し合いによってやがて収まり、植え付けが始まる。焼畑は休耕している数年の間に鬱蒼としたジャングルとなるため、境界線が定かではなくなったり、だれがどのようにつかっていたかがわからなくなったりする。そのため、このように毎年仕切り直しをする必要がある。土地は父系で相続されるが、結婚や移住によって親戚間で使用状況が複雑になるため、焼畑の火入れの季節に相続状況の確認と調整がおこなわれているといえる。

島の季節は、雨季（*noua mauri*）（10～3 月）と乾季（*noua mate*）（4～9 月）にわかれる。雨季のノワ・モウリは「生の季節」という意味で、雨が多く気温が高いため畑の植物がよく成長する時期である。乾季のノワ・マテは「死の季節」という意味で、冷たい南風が吹く季節となる［竹川　2008］。

以下、フツナ島の 1 年の生業活動と収穫される作物を簡単に紹介する。乾季の終わりの 9 月ごろ、クジラ（*tafora*）が子どもをともなって島の近くあらわれる。クジラが湾の近くでジャンプをすると大きな音が集落まで聞こえる。この音を合図に焼畑づくりが始まる。10 月には雨季に入り、パウ（*pau*）の実が収穫される。11 月ごろからパンノキ（*kuru*）が実をつけ、タロイモが収穫される。12 月、クリスマス時期にはパイナップルやスイカが収穫される。海ではトビウオの群れがイアソア村の沖に移動する。1 月はヤムイモの植え付けが始まり、マメ科のタイヘイヨウクルミ（*ifi*）が実る。3、4 月は焼畑に植物が繁り雨季が終わる。5 月はヤムイモの収穫が始まりマンダリンオレンジが実る。6 月にはパンノキが実を

つけ、トビウオがイパウ村の沿岸に寄り始める。8 月はトビウオ漁とラマガ漁が始まる。バナナ、キャッサバ、サツマイモ（*fue*）は、季節に関係なく通年収穫することができる。

２－２－３．調査村概要―ナキロア村とイパウ村

フツナ島における筆者の調査拠点は、島の西側に位置するナキロア村と北東側に位置するイパウ村である。

ナキロア村の行政区分は、隣のイアソア村に含まれる。ナキロア村とイアソア村は徒歩 5 分程度の距離である。2008 年の調査時には、ナキロア村の人口は 45 人、イアソア村の人口は 55 人であった。ナキロア村の成員の家系図を［図 2］に示す。寝室とする家屋や台所を共有する集団をひとつの世帯とすると、ナキロア村には全部で 10 世帯が暮らしていた。現在ナキロア村には、20 代～40 代の夫婦とその子どもたちからなる世帯が 10 世帯中 8 世帯と多い。未就学児と就学児をあわせると 27 人であり、村の人口の半数以上を占める。筆者が日常的に食事を共にし、生業活動に参加したのは、世帯 AⅠ、AⅡ、BI である。筆者は世帯 AⅡに下宿しており、島に来た当初は AⅡの家族とほとんどの食事を共にしていたが、1 か月程たち生活に慣れてきたころから、筆者と年齢が近い女性 Ac がいる世帯 AⅠで食事をともにすることが多かった。とくに生業活動をおこなう Ac に同行して過ごした。以下、各世帯を簡単に説明する。

〈ナキロア村〉

■世帯 AⅠ

A3 の母親の Aa と未婚の長女 Ac、未婚の五女 Ag の女性 3 人の世帯。Ag は末子で中学校に通っている。世帯 AⅠと世帯 AⅡの家屋や台所は隣接しているが、生計はわかれている。結婚してイアソア村に暮らす Aa の次女 Ad や隣に住む三女 Ae は、自分たちの子どもを預けに Aa を訪ねることが多い。

■世帯 AⅡ

ともに 30 代の夫 A3 と妻 Ab とその子どもたち 4 人の世帯。A3 は AOG の教会を建立しナキロア村を開いた A1（故人）の次男であり、現在ナキロア村のチーフである。A3 は青年期、首都ポートビラの高等学校の建築科で学んでおり、島における土木作業や大型家屋の建築を任されることが多い。フツナ島を一周する歩道の建設も A3 が監督した。作業はす

べて島の人の手でおこなわれ、歩道は2005年に完成した。以前は崖をよじ登らなければならない難所があったが、この歩道の完成により島内交通は容易になった。また2007年から2008年にかけておこなわれたイアソア村の教会の新築もA3が監督を務めた。AOG教会に通っている。

■世帯AⅢ

20代の夫A6と妻Ae、2人の子ども、A6の妹Haからなる世帯。世帯ＡＩ、ＡⅡと隣接して世帯AⅢの家屋がある。A6の両親はイアソア村の出身であるが、現在はタナ島に暮らしている。A6は子ども時代をタナ島で育ったため、一般的なフツナ島の青年に比べて漁撈活動が得意ではない。A6の妹Haはフツナ島の中学校に通うためにタナ島の両親の元を離れA6の家に下宿している。AeやHaはAOG教会、A6はイアソア村の長老会派教会に通っている。

■世帯ＢＩ

40代の夫B1と30代の妻Bb、その3人の子どもたちとB1の母親Baからなる世帯。BbはA3らの異母妹になる。B1は、焼畑耕作、漁撈活動ともに名人であるといわれ、カヌー製作も得意である。自分の分だけではなく、他の人に依頼されて作ったり作業を手伝ったりする。B1は学校の勉強は得意ではなかったため島を出ることなく育ったと話すが、生業に関わる伝統的な知識や技法に精通している。

B1の家は世帯ＡＩらの家とは10メートル程離れている。B1はモウガ村の出身で、そこにも土地と家屋を持っている。焼畑をつくる季節になると一家でモウガ村の家に泊まることもある。AOG教会に通っている。

■世帯ＢⅡ

40代の女性Beとその子どもの世帯。世帯ＢＩの家屋に隣接した家屋に住んでいる。Beの父親とB1の母親が兄弟姉妹である。Beは結婚しておらず、子どもの父親はタナ人であるという。生計は別だが、世帯ＢＩのBbと焼畑耕作に出かけることが多く、世帯ＡＩのAcとも出かける。AOG教会に通っている。

■世帯C

50 代の夫 C1 と 40 代の妻 Cb、その子どもたち 6 人と C1 の母親 Ca からなる世帯。C1 は AOG 教会の牧師を務めている。ナキロア村に住んでいるが、C1 の出身のタロマラ村でにも土地と家屋を持っており、両方の家を行き来している。C1 はチーフの家系に属しており、タロマラ村の郊外にあるタムタウトという岬の土地の所有者でもある。

■世帯 D I

ともに 40 代の夫 D1 と妻 Da、その子どもたち 5 人からなる世帯。D1 はイアソア村の出身である。夫婦ともにイアソア村の長老会派教会に通っているが、Da は AOG 教会に行くこともある。

■世帯 D II

ともに 20 代の夫 D6 と妻 De とその子ども 1 人からなる世帯。もともとイアソア村出身の D6 の両親は現在タナ島に住む。D6 は D1 の甥である。世帯 D I と世帯 D II の家屋は隣接している。イアソア村の長老会派教会に通っている。

■世帯 E

結婚はしていないが、ともに 40 代の男性 E1 と女性 Ea、子ども 3 人からなる世帯。イパウ村に住む Ea の母親 Eb や妹 Ec がときおり滞在する。ともにイアソア村の出身である。AOG 教会に通っている。

■世帯 F

30 代の夫 F1 と 20 代の妻 Fa、子ども 2 人からなる世帯。F1 は AOG 教会の牧師を務めており、モウガ村の出身である。そこにも土地と家屋を持ち、両方の家を行き来している。

以上がナキロア村の 10 世帯である。人びとは村単位の共同作業や冠婚葬祭の折には、自分の出身である村での役割を果たしている。島における人びとのコミュニティ（集まり）の単位は、血縁、地縁（村）、教会ごとに見られるが、その区分はゆるやかに交わっている。島の人たちは日常生活では、ひとつのコミュニティに限らず複数のコミュニティの成員として、他者と関わり合いを持っているといえる。

最後に、筆者がイパウ村で下宿していた世帯 G I ・G II を紹介する。家系図を［図 3］に

示す。2008 年の調査時にはイパウ村の人口は大人 63 人、子ども 36 人、合計 99 人 24 世帯であった。世帯ＧＩ・ＧⅡを含めイパウ村の人たちはイパウ村の長老会派の教会に通っている。

〈イパウ村〉

■世帯ＧＩ

50 代の夫 G1 と妻 Ga とその次男 G3 からなる世帯。Ga はナキロア村の世帯ＡＩの Aa の妹である。Ga は島では料理が上手だと評判で、共同調理の際にはみなをよく采配している。また夫妻の実子は 3 人と多くはないが、面倒見のよい性格もあってか養子として育てた子どもの数は多い。筆者が知っているだけでも 8 人はいる。現在は、隣接して住む長男 G2 の子どもたちの世話をよくしている。

Ga の兄はイパウ村のチーフのひとりである。Ga もマラエの所有者のひとりとされており、世帯 ＧＩの台所と家屋はマラエの中にある。このマラエは村の人の通り道にもなっているため、世帯ＧＩの台所周辺は人通りが多く来客も多い。Ga は人が訪ねて来ると、台所にある食物を出して勧める。Ga の人柄もあって、話をしに立ち寄る人が多い。

G1 は漁撈をあまりおこなわないが、次男の G3（20 代）は得意としている。G3 は 2008 年から 2009 年にかけてニュージーランドに出稼ぎ労働に行っていた。

■世帯ＧⅡ

30 代の夫 G2 と妻 Gb、子ども 3 人からなる世帯。G2 は G1 の長男である。G2 も G3 と同様に漁撈が得意で、ふたりの兄弟はよく連れ立って釣り漁やモリ突き漁に出ていた。世帯ＧⅡは世帯ＧＩの台所や家屋と隣接している。Gb が臨月のときには、世帯ＧⅡの人たちは世帯ＧＩの台所に合流していた。

２－３．メリック島

２－３－１．地理概要

メリック（Mering）島は、東経 167 度、南緯 14 度に位置する。首都ポートビラがあるエファテ島から北に 380 キロメートル、隣接するガウア（Gaua）島から東に 25 キロメートルに位置する離島である［地図 1］。ガウア島は別名サンタマリア島とも呼ばれる。メリック島からさらに南東 25 キロメートルの海上には、メレラバ（Merelava）島がある。メリ

ック島とメレラバ島でつかわれる言語は共通している。このふたつの島は「兄弟島」と呼ばれ、2 つの島の間には通婚関係もある。島の物語では、メレラバ島のトゥ山（Mt.Teu）の頂が移動してできたのがメリック島であるといわれている。「小さなメリック島はガウア島の子どもではなくメレラバ島の子どもなのだ」と島の人はいう。ガウア島、メリック島、メレラバ島の他、ガウア島から北 50 キロメートルの海上に位置するバヌアラバ（Vanualava）島と周辺の小島を含めたこの一帯は、バンクス（Banks）諸島と呼ばれる。筆者が訪ねた 2004 年のメリック島の人口は 15 人である。メレラバ島は 1000 人程度が住んでいると聞いた。ガウア島には、メリック島、メレラバ島の出身者がつくる分村が 2 つあり、両島の出身者 200 人程度が住んでいる。

メリック島の周囲は 2.2 キロメートルで、島の中心には標高 10 メートルの小高い山がひとつある［地図 3］［写真 3］。地形はなだらかであり、川はない。そのため飲水はタンクにためた雨水か、海浜部に湧き出ている水を使用している。川がないことによって島では水不足が起こりやすいが、マラリアを媒介する蚊が発生しないため、マラリアの流行を心配せずに過ごすことができるという。

島の西側にレヴォルヴォル（Levolvol）村があり、人はそこに集まって住んでいる［写真 4］。焼畑耕地は島中に点在している。島内には島を一周できる道があり、道の両脇に人の肩の高さほどの石垣が点在している。

この地域の交通は不便である。メリック島に行くには、まず首都から小型の飛行機を乗り継ぎ、飛行場のあるガウア島に行く。ガウア島からは個人所有の船外機付きボートをチャーターし、海上を東へ 1 時間ほど進むと到着する。メリック島にはボートを所有するものがいないため、ボートが来るのはガウア島からだけである。船の定期便はなく、コプラを集める貨物船が 1 年に 1 度島に寄る程度である。その際、島の人はコプラを売って得た現金で、船が積んでいる米や砂糖、石鹸などを購入するとのことだった。しかし船が来るのは不定期のため、船から買う食糧はあくまで余剰であり、メリック島の人たちは自給自足で生活している[11]。

島には公衆電話、テレラジオ（無線）がないため、他島への通信ができない。ガウア島からボートに乗って人が訪ねてきたときのみ、人びとは島外のさまざまな情報を聞くことができる。船外機付きの小型のボートでは外洋 25 キロメートルの距離を移動することはで

[11] コプラを集める船は、エスピリットサント（*Espiritu Santo*）島から出航し、メレラヴァ島やメリック島を回っていると聞いた。2004 年は 7 月に来ていた。しかし、船がいつ来るかは島からはまったく予想できず、2 月ごろに来る年もあるとのことだった。

きるが、風がなく波が 2 メートル以下のときを選ばなくてはならない。

２－３－２．歴史概要

バヌアツはイギリスとフランスの共同統治から 1980 年に独立した。独立以前と独立後では、メリック島をとりまく環境も変化していると島の人はいう。島の 50 代以上の人から、フランス領であった 1963 年に役人が来て、ココヤシのプランテーションで働かせるため、ガウア島やエスピリットサント島に移住するように促していたという話が聞かれた。そのころのメリック島の人口は 100 人程度だったという。

バヌアツの首都はポートビラだが、メリック島があるバヌアツ北部地域の人たちにとっての最寄りの街は、首都に次いで 2 番目に大きな街であるエスピリットサント島のルーガンビル（Luganvil）である。現在、メリック島やガウア島に住む大人はルーガンビルに行ったことがあると答える人が多いが、ポートビラに行ったことがある人はそれに比べて少なかった。独立以前はフランスやイギリスが定期船を島々にだしていたため、現在よりも、バンクス諸島、エスピリットサント島、マレクラ（Malakula）島、アンバエ（Ambae）島、マエオ（Maewo）島などとの間で行き来が盛んであったという。現在は不定期にしか船が寄らず、メリック島やメレラバ島には飛行場がないため、他の島との間で人や物の行き来は難しい。

共同統治以前の 1900 年ごろ、バンクス諸島の中心地は、貝貨を生産していたロワ（Rowa）島とバヌアラバ島で、バンクス諸島以南のマエオ島、アンバエ島、エスピリットサント島まで貝貨による交易のネットワークがあったことが、ポートビラにあるバヌアツカルチュラルセンター（Vanuatu National Cultural Centre）には示されていた。この交易ルートにメリック島も入っていた。貝貨をはじめ、土器、パンダナスで編んだマット、ウォーターロ、ブタなどが島々の間でやりとりされていた。交易はカヌーをつかっておこなわれていた。現在ではこの地域で貝貨は作られていないが、メリック島にはかつて貝貨をつくるのにつかっていたという、くぼみのある大きな石が残っていた。

バンクス諸島においてキリスト教の宣教師が教会や学校を建設したのは、1905 年ごろのバヌアラバ島やモタラバ（Motalava）島で、宗派はイギリス国教会だった［MacClancy 2007］。現在、メリック島やガウア島の教会はメラネシア教会であるが、島の年長者たちは、自分たちが子どものころの聖書や聖歌は、英語やフランス語ではなくモタの言葉をつかっていたことを覚えている。

２－３－３．調査村概要

2004 年のメリック島には、15 人、4 世帯の人が住んでいた［写真 5］。家系図を［図 4］に示す。4 つの世帯を簡単に説明すると以下のとおりである。【】内は家がある地名である。メリック島には現在レヴォルヴォル村があるのみだが、そのなかに、レヴォルヴォルとテヴェル（Tevel）という 2 つの地名がある。

■世帯Ⅰ【レヴォルヴォル】

50 代の夫 A1m と妻 a2m と 4 歳の孫娘 a3m の 3 人の世帯。夫妻の娘、a3m の母親が亡くなったため、夫妻が引き取って育てている。A1m は島にあるメラネシアン教会の牧師である。A1m はチーフではないが、現在のチーフはまだ年が若いため、A1m が島のまとめ役を引き受け、教会行事もすべて取り仕切っている。この世帯Ⅰに筆者は下宿していた。

■世帯Ⅱ【レヴォルヴォル】

島で一番年長である 73 歳の女性 bm がひとりで暮らす世帯。世帯Ⅰに隣接して bm の家屋と台所がある。ｂｍと a2m の母は姉妹である。bm は日常的な畑仕事、ニワトリやブタの世話をひとりでこなしている。昨年までは孫娘が一緒に住んでいたが、現在は進学のためにガウア島に行った。bm は自分のヤムイモ畑のほか、この孫娘の名義のヤムイモ畑も作っていた。料理上手なので、みなで料理をつくるときには指示を出す役である。顔に伝統的な入れ墨を施している。

■世帯Ⅲ【レヴォルヴォル】

19 歳の男性 C2m と 33 歳の男性 C1m の世帯である。C2m はメリック島のチーフである。両親や兄弟はガウア島に住んでおり、C1m と C2m は 3 年前にガウア島からメリック島に来た。C1m は世帯Ⅰの A1m、a2m 夫妻の長男である。Clm は数か月の予定で焼畑耕作、主にヤムイモの植え付けを手伝いにガウア島からメリック島に帰省していた。C1m は両親がいる世帯Ⅰの台所で食事をすることもあるが、基本的には C2m の家で寝起きし、台所で食事を一緒にとっていた。また、C2m と C1m は夜間のモリ突き漁やコウモリ猟、昼間のカヌー作りなど、ほとんどの行動を共にしていた。

■世帯Ⅳ【テヴェル】

35 歳の女性 d2m とその子どもたち 7 人と、d2m の母親である 65 歳の d1m が暮らす世帯。d2m の夫は別居中で、別の女性とガウア島で暮らしているということであった。d2m は働きもののたくましい母親という印象で、焼畑耕作に精を出すほか、C1m らに負けず魚やヤシガニを獲っていた。d2m の長女 d3m は 15 歳で、母と共に生業活動をおこなっていた。長男 D4m は 9 歳で、C1m らについて釣り漁やパチンコ猟に行くこともあった。ほかの子どもたちは幼いため、普段は d1m が家で子守りをしていた。d1m と A1m の母と C2m の父は兄弟姉妹である。

レヴォルヴォルのⅠ家とテヴェルのⅣ家の間は 20 メートル程度しか離れていない。Ⅲ家はその中間にある。地名はポイントとして語られ、明確な境界線はない。Ⅰ家はⅣ家の人たちのことを「テヴェルの」と呼ぶことがしばしばあった。

以上、4 世帯にわかれて暮らしている 15 人は、親戚関係を持っているといえるが、食物の調達（畑の手入れと収穫、狩猟行為、家畜の世話）はそれぞれの世帯単位で独立しておこなっており、その結果得られる食物の調理もそれぞれの台所で別々におこなっていた。しかしながら、そのようにして得た収穫物や採取物、家畜、調理した食物を、彼らはほぼ毎日他の世帯に分け与えていた。たとえば、8 月 21 日（土曜日）の夕方、Ⅰ家にはキャッサバ、Ⅱ家にはバナナプティング、Ⅲ家には米と卵、Ⅳ家には魚とバナナがあった。Ⅳ家から調理前の魚 3 匹がⅠ家に贈られ、Ⅰ家はキャッサバをⅣ家に贈った。Ⅰ家はⅣ家からもらった魚でつくったスープをⅢ家とⅡ家に贈り、Ⅲ家は卵焼きを、Ⅱ家はバナナラプラプをⅠ家に贈った。

これらはすべて島内で得られるものであり、とくに特別な食物ではないが、このように 4 つの世帯の間であげたりもらったりという行為を盛んにしているということが特徴である。前年の 2003 年には 35 人が島に住んでいたというが、通院や通学を理由に 20 人がガウア島に移り住み、現在にいたっている。

２－３－４．生業活動

メリック島の人たちの 1 日の活動は、畑に行くか、海に行くか、または住居近くでの手仕事である。畑へは、手入れとその日の食べるものと薪の調達、海へは釣りやカニ、貝類の採集を目的として行く。日が沈んでからの時間は、灯かりがなく暗いため仕事はほとん

どおこなわない。男性は夜間に釣りやダイビングによるモリ突き漁、コウモリ猟に出かけることがある。夕食後は、人びとは隣家の台所を訪ねて焚火を囲み談笑して過ごすことが多い。天候が悪い日は、住居近くで手仕事をすることが多く、屋根や壁（サゴヤシやココヤシの葉を編んだもの）を作り家屋の手入れをしたり、女性であればパンダナス[12]の葉でマットやバスケットを編んだりする。

2004 年 8 月 21 日から 9 月 4 日までの 2 週間、島の人それぞれが一日になにをおこなっていたか、世帯 I に対しては参与観察、他の世帯には夕方定時の聞き取りによって調べまとめた［表 5］。1 日における畑に行く平均時間は、世帯 I では 3.1 時間、世帯Ⅱでは 3.2 時間、世帯Ⅲでは 3.3 時間、世帯Ⅳでは 3.1 時間と、世帯別でほとんど差がなかった。1 日のうち半日は畑に行き、半日は海に行くか家で手仕事をしているというのが、メリック島の生活である。日曜日はキリスト教の安息日であるため仕事はいっさいせず、教会での礼拝が終わったあとは、全員が集まって共同で石焼き調理をおこなう。できあがったものは分配し持ち帰って食べる。

[12] パンダナス（*Pandanus tectorius*）、和名はタコノキ。長く丈夫な葉をつかってマット、バスケット、うちわなどさまざまな生活用品がつくられる［表 3］。布製品が入る以前は、衣類やカヌーの帆をつくるのにも利用されていた。現在、バヌアツの各地では日用品の他、観光客用の売り物としてバスケットが盛んにつくられており、村落に暮らす女性たちの主な現金収入の手段となっている。葉の加工の仕方、編み方などは地域によって違いが見られるものの、南太平洋一円、広範囲に利用する文化が見られる。沖縄ではアダンと呼ばれ、伝統的には草履などがつくられている。

第３章　フツナ島の分配

フツナ島では、島内の全員に行き渡るような大規模な分配から、日常的に個人間で発生する小さな分配まで、さまざまな形態の食物分配が見られる。これらを場面の特徴ごとに以下の 3 つに分けて記述し、それぞれの場でどのようなことが起こっているのか分析したい。

３－１．饗宴における分配

３－２．共同作業における分配

３－３．生業（日常）における分配

ひとつめの饗宴における分配は、儀礼や演説をともなう人の集まり、催しとしての分配を指す。島内人口約 500 人すべてに食物が行き渡る大規模な分配をはじめ、村ごとや各村のチーフを集めておこなうものなど饗宴の規模はさまざまである。特徴は、食物分配が儀礼や演説に付随するものではなく、催しの内容そのものとして位置づけられていることである。島内すべての人に行き渡る食物分配は、演説や儀礼以上の時間をかけておこなわれる。それは「他の人と同じだけに分ける」、平等に分配するという行為そのもののディスプレイである。一方で、1 人当たりの分配量がまったく同じにはならないということも了解されている。正確さを極める均等な配分は不可能である。分配はていねいでありながらも手続きに従っておおまかになされていく。人びとは分配に同等さを望みながらも、それを明言することで途端に「野暮な感じ」になってしまうことを避けているようである。つまり、人びとは同じ場所に集まり、分かち合うべき食物を等分に分けることで対等にその場に参加しているということをおこなっている。饗宴は、島の生活において歴史的な出来事の折々に開かれる。事例の分析から饗宴における分配によって人びとがなにを感じ、なにが得られているのかを明らかにする。

ふたつめの共同作業における分配は、個人や一世帯ではおこなえないような作業に協力してもらい、そのお礼として協力してくれた人に食物がふるまわれることを指す。島に暮らす人たちは共同作業に誘いあう。相互に依存する関係の上に生活を成り立たせていることがわかる。共同作業では、呼びかけ側が参加者側にふるまう食事を用意し、饗宴のときと同様にみなの目の前で分配をおこなう。ここでは作業を提供することと食事を与えることの交換がおこなわれているといえる。しかし、実際の事例からは、単純に等価の交換が成立することを両者が避けていることが指摘できる。自分と他者との間に互酬性を築きながらも、それを表現することを避ける理由と工夫についてとくに注目したい。

みっつめの生業（日常）活動における分配は、島に暮らす上で一番身近な分配を指す。島の人たちは山に登り焼畑耕作をし、海に降りて漁撈活動をおこなう。こうして自分たちの手で日々の糧を得ている。だれもが生業活動によって生活に十分な食物を得ることができるにも関わらず、人びとは手にした食物を他者に贈りあう。腕の良い漁撈者は魚を頻繁に分配することになるが、贈るときには謙遜の態度を見せ、与えることを誇示しないようにふるまう。また、人びとは自分が保持する食物を他者に見られたと思った瞬間、それを分配してしまう。日常的にみられる分配の事例からは、食物を見られたら分け与えるべきという、規範のようなものがうかがえる。しかし、島における規範とは状況によって変更可能なものでもある。規範は個別文化依存的なものであるとするならば、見られたらあげてしまうとしかいいようのない分配は、ヒトの普遍特性のひとつとして説明できるのだろうか。そのことに関して日常的な食物のやりとりの事例を分析して考えたい。

３－１．饗宴における分配

饗宴（*kai*）は、人が集まり、演説や儀礼のあと、調理した食物をわかち合い食事を共にすることを指す。カイとはまさにフツナ語で食物そのものを指す言葉でもある。

2007 年 9 月 11 日から 2008 年 1 月 24 日、3 月 4 日から 7 月 31 日の期間に実際に筆者が参加し数えた饗宴は 10 回あった［表 6］。島ではおよそ 1 年間に 10 回前後の饗宴がおこなわれていると考えられる。表には、各饗宴の規模をあらわした。「全体」と表記したものは、島の人口全体に分配が行き渡る規模を示す。「村」は村の成員全てに行き渡る規模を示す。「チーフ」は、各村のチーフや教会の牧師が集まったことを示す。

［表 6］フツナ島における饗宴（2007～2008 年）

行事	とき	場所	規模
葬儀	2007/10/14	タロマラ	全体
アウトリーチ帰還	2007/12/17	イパウ	全体
クリスマス	2007/12/25	イシア	全体
葬儀	2008/1/2	モウガ	全体
結婚式（2 組）	2008/1/9	イシア	全体
結婚式	2008/1/16	イパウ	全体
葬儀	2008/5/9	イシア	全体
収穫祭（ヤムの儀礼）	2008/5/12	イアソア	村
機材の祈祷	2008/6/5	ナキロア	チーフ
結婚式	2008/6/27	イマラエ	全体
パソコンの祈祷	2008/7/20	イシア	全体

３－１－１．山積み（ラウ）と分配

饗宴では主催する村の人たちが中心となり、当日分配する食物を準備する。島全体の人口 500 人以上分の食物の準備は大掛かりである。調理に必要な薪や食材は 1～2 週間かけて集められる。食物のほとんどは主催する村が用意するが、客の村の人たちも饗宴当日に合わせて、調理した食物をココヤシの葉のバスケット（*porapora*）に入れて持って来ることがある。とくに葬儀はいつ起きるか予測できない。そこで隣村の人たちが食材の提供や調理作業を手伝うなどホストの村に協力することが多い。

饗宴でふるまわれる料理のほとんどは、石焼き調理（*putoi*）によってつくられたものである。石焼き調理はポリネシアやメラネシアの全域で見られる伝統的な調理方法である［野嶋　1994］。1 時間以上かけて薪を燃やし、石を十分に熱しその場をオーブン（地炉）とする。このとき焼け石は摂氏 1000 度に達する。薪が燃え尽き石が熱くなったら、木製の大きなトング状の道具（*ikofi*）で石をつかんで動かし、葉で包んだ食材を中心に置く。焼いた石を食材の上にも置き全体を覆う。2～3 時間置くとできあがる。焼け石から出る輻射熱によって食材に火を通すという調理方法で、一度に大量の食材の調理をおこなうことができるという利点がある。饗宴のために料理を準備するときは、前日の夜までに食材を石のオ

ーブンに入れ終え、一晩置き、当日の朝取り出すのが一般的である。フツナ島では饗宴のために、マグロ、サワラ、カマスなどの大型回遊魚や家畜のブタ（*pakasi*）、各種イモ類やバナナをすりおろして葉に包んだものを石焼きで調理する。このイモやバナナをすりおろしてから熱を通した料理は、できあがりが座布団状のケーキのようである。フツナ語でプリ（*puri*）、ビスラマ語ではラプラプ（*laplap（Bis.）*）と呼ばれる。これも饗宴を象徴する料理である。プリはできあがると一辺 20 センチメートル程度の正方形に手早く切り分けられる。ココナツミルクのほのかな香りとうすい塩味で、食感はモチモチしている。いずれの石焼き調理も準備するのに半日以上かかる。人びとにとってこれらの料理は手間のかかったごちそうである。とくに島の生活においてブタを食べる機会は、ほぼ饗宴に限定される。日頃、動物性タンパク質はほとんど魚から摂取しているため、ブタ肉の味は特別である。クリスマスなど大規模な饗宴の際には、石焼き調理されたブタの背脂の塊が分配される。肉の部分とは違い、背脂はその場で直接食べるものではなく、もっぱら持ち帰ってラードを取るためのものであった。

石焼き調理の他、饗宴のときに特徴的な料理は、直径 50 センチメートル以上の大鍋で煮込んでつくるスープである。饗宴の規模に合わせて複数の鍋が用意される。食材はトビウオやボラ、大型回遊魚、ブタやニワトリがつかわれる。味付けは塩かココナツミルクのみのシンプルなものである。風味づけにネギ（*onioni*）や、バジルに似たシソ科の香草モレ（*more*）が入ることもある。大量の食材を煮込むことによって醸し出されるスープの味は饗宴のときならではのものであると人びとはいう。スープの具はスープができあがったらスープから取り出して別によけておく。具が魚の身の場合は、あらかじめ分配しやすいようにパンダナスの葉（*rou fara*）でつくった細い紐で煮崩れないように縛っておく。具の部分は分配の対象となるが、スープは分配後に食事が始まると鍋ごと中央に置かれ自由にすくって取ってよいことになる。

饗宴の調理と分配はマラエでおこなわれる。饗宴の当日、一通り演説や儀礼が終わったあと、マラエの中央にココヤシの葉で編んだマットが敷かれ、用意された料理の数々が並べられる。このとき、ホスト側の人たちは急がず、ゆっくりとした動作で食物を運び並べていく。すべての食物を並べ終わるのには時間がかかるため、食物にハエが留まらないよう子どもたちに細長い葉を持たせハエを追わせることもある。他の人たちは、周辺で談笑しながらのんびりと過ごす。

分配方法はて、現在では 2 通りある。ひとつは伝統的におこなってきた方法で、もうひ

とつは近年おこなわれるようになった方法であるという。どちらの分配も、ラウ（*rau*）と呼ばれる食物の山を少しずつ段階的に分配していくことを基本としている。ラウは食物を山積みにした一山のことを指すが、フツナ語で分け前や分配そのものも意味する。

まず一か所に集められた食物を 7 つの山に分ける。これは、島を大きく分けたときの 6 つの村、イパウ村、タロマラ村、イシア村、モウガ村、イアソア村（ナキロア村を含む)、マタギ村（イマラエ村とイタヴァイ村）と、島外からの客のグループがいた場合に 1 を足した数である。それから分けた村ごとの山を、2 つに分ける。これは先に紹介した 2 つの半族、カウィアメタとナンプルケとに分けるためである。そのあと、それぞれの半族の中で世帯別に分け、世帯の中で 1 人ずつに分けて終了となる。この伝統的なやりかたに対して、新しい方のやりかたは、村ごとの山に分けたあと、1 人分のおおざっぱな量を決めて配ってしまうというやりかたである。これは、クリスマスやクリスマスの直後におこなわれる結婚式などで見られた分配方法である。これについては、のちにクリスマスの分配のところで詳しく説明する。

では、実際に 2008 年 7 月 20 日の分配の様子を山に注目してみてみよう。

［事例 1］学校に初めてパソコンが来た

フツナ島のイシア小中学校に政府からパソコンが 3 台贈られた。そのことを記念し、教会の牧師たちが新しいパソコンに祈祷を捧げるための饗宴が開かれた。これは日本でおこなう「お祓い」に似ている。悪い精霊がいた場合牧師が新しいパソコンに手をかざして神への祈りを口にすることにより出て行く。その後は平安無事に道具をつかうことができるというものである。

午前 10 時ごろ、小学校の校庭に特設された場所で演説が始まった。5 人が話し終えたところで 11 時半になっていた。演説の内容は、主に小学校が現在の場所にできるまでの経緯であった。だれが小学校の土地を提供したか、またそのときどのような反対や問題があったかなどが語られていた。

最後の演説が終わったところで、ココヤシの葉でつくったマットが敷かれ料理が運び込まれだした。14 時ごろに料理はほぼ出そろい、まず 7 つの山に分けられた。子どもたちが山の横に立ってハエを追い払う係をやる［写真 6］。14 時半には、1 つの山が 2 つ（ナンムルケとカウィアメタ）に分けられ、さらに半族の中での分配が始まっている。主に作業をおこなうのはチーフであるが、それに加え同じ村の男性や女性 4〜5 人が手伝う。

［写真 7］。15 時ごろにはようやく世帯ごとの分配の山ができあがる。実際に分配が終わり食べることができたのは 15 時 25 分だった。

分配が終わるのを待っている間、人びとは周りにいて先ほど聞いた演説の内容や学校の先生についての噂話などをずっとしている。また、料理を持ち帰るためのココヤシ葉のバスケットを作りながらおしゃべりに興じている人も多い。分配が終わると、人が集まってきて自分の世帯の分を受け取る。この日は演説後から実際に食物が口に入るまで、3 時間 59 分かかったことになる。食事が終わったころ、16 時 5 分ごろ、パソコンを設置したトタン屋根の教室にて、3 人の牧師がパソコンに手をかざし 15 分程の祈祷をおこなった［写真 8］。

分配にかける時間の方が、演説や儀礼をおこなう時間よりも長い。また、7 つの山をつくり、次に分ける作業を始めるまでには、なにもしない空白の時間がある。準備した大量の料理を置いたままにしてしばらくディスプレイしていることがわかる。山をつくるとき、食物を分けるときの動作は急ぐことはなく、ゆったりとしている。

饗宴の分配について島の人から話を聞いていると、この伝統的な分配方法は時間がかかるから大変だという意見が多い。このような意見は首都ポートビラでおこなわれる結婚式などでの食事と比較して語られる。筆者もポートビラに滞在中、多いときは月に 1～2 度の頻度で、週末におこなわれる結婚式に誘われて行った。主催者が石焼き調理をメインとした大量の料理を準備して参加者をもてなすという形式は、フツナ島とも変わらないが、食事は分配ではなく、セルフサービスによるバイキング形式である。参加者は新郎新婦へのプレゼントを手渡して祝福を述べたあと、皿とフォークを渡され、自分で料理をよそって食べる。さまざまな離島出身者が集まる都市部だが、現在はこの形式が一般化しているようだった。このような街の饗宴を経験したことがあるものは、島の饗宴は分配に時間がかかるという感想をもらした。一方で、伝統的な分配方法は時間がかかるものだが、イパウ村の男性 G1 は「この徹底した山による分配（シェアリング *serem (Bis.)*）こそがフツナ島のよい文化を象徴していると思う」と話していた。G1 から話を聞いたのは 2008 年で、当時バヌアツ政府の首相はフツナ島出身のニパケ・ナタペイであった。ナタペイ政権が掲げる「平等な富の分配」は、彼が島の文化を知っているからであると G1 は説明していた。同様の話をポートビラに住むフツナ島出身者 A2 もしていた。時間をかけた分配は、平等を表現することと結びつけて考えられていることがわかる。

島ではどの饗宴でも、食物が運ばれ並び始めてから、ひとりひとりに行き渡り、食事が始まるまでに 2～4 時間はかかる。筆者も饗宴に参加しているとき、実際に分配が終わるのを待っている時間はとても長く感じ、しばしば空腹を我慢しなければならなかった。

島の人たちは待つことに慣れているのかとも思っていたが、教会の寄付金を集めるためのバザー（*found rasing（Bis.)*）で、1 食分 50 バツ程度の食物が売られるときは、小銭を持った人が売り場に殺到して 30 分程ですぐに完売してしまうのを目の当たりにし、決してみんなが食事を前にして待つことが平気ではないと知った。

以上、饗宴における分配の特徴は時間がかかるという点があげられる。ていねいに食物を分けて山をつくることによって、「私とあなたは同じである」という平等を表現しているといえる。しかし、分配内容が均等・均質であるかという点に着目すると、最終的に手に渡る 1 人分が必ずしも正確に均等・均質になっているわけではない。理由は料理の種類が多岐にわたるからというだけではなく、村から半族、そして世帯まで同じ山に分けられた場合、どうしても人数の多い世帯は少ない世帯に比べて 1 人分のおかずの量がやや少なくなるからだ。おおざっぱではあるが、世帯の山はどれも同じ大きさである。山による分配は、必ずしも数値化して表現されるような均等・均質な分配をおこなおうとはしていないことがわかる。それを目指すのであれば、始めから 1 人分を定めて分けてしまう方が均等・均質に近づくが、それはおこなわない。このことから、饗宴における分配は平等を表現しようとしながらも、結果として分配された量がまったく同じであることを達成しようとしていないことがわかる。世帯の構成、子どもの人数、男女の差、体格の差、多く食べる人、少なくてよい人、好きな食物、嫌いな食物、と分配にのぞむ前提条件は、世帯によって、そして個人にとってもともと不揃いである。このようにそもそも同じではない条件を、一度対等であると仮定し、分配の場をつくっているのである。

では、クリスマス、葬儀、結婚式、祈祷、アウトリーチの帰還、収穫祭（ヤムイモの儀礼）について目的別の饗宴の事例をみていく。

３－１－２．饗宴の種類と分配の事例

■クリスマス（*krismas*）

クリスマスは毎年 12 月 25 日におこなわれ、島では最大の行事である。12 月に入るころから主に首都からの帰省者が増え始める。帰省者はクリスマスを島で過ごしたあと、1 月の 1～2 週目に再び街に戻る。クリスマスから新年までの 1 週間程は教会での催し事も多い。

人が増え、島が最も賑わう期間である。

フツナ島のクリスマスは、毎年 6 つの村からひとつが主催となって開かれる。2007 年はイシア村で、2008 年はイアソア村であった。主催する村は、クリスマス中は 1000 人近い人の食事を用意することになる。そのために 8 月ごろから「今年のクリスマスはうちの村だから大変だ」といい始める。実際にクリスマス会場のためのトイレ作りや広場の整備などは 9 月から始まる。

クリスマス期間中は村の共同台所、石焼き調理場は連日大規模な炊き出しがおこなわれる。薪や食材の用意、島中の人が集まって催しを楽しむことができる野外席の設置などについて、1 か月程前から準備に追われることになる。

クリスマスには島外に暮らす出身者の多くが帰ってくるため、日頃は会えない者どうしの交流の場となる。主催する村となってクリスマスを準備することは大仕事であり、日頃は都市部に暮らす主催する村の親戚たちも、食糧を中心とした物資を島に輸送し自分の村の準備を手伝っている。

会場は主催する村にしつらえられ、中心となる広場では歌やダンスが披露される。食事を並べる場所は広場を囲むようにしてつくられる。簡易のトタン屋根を葺いた下にテーブルを置いた売店のようなブースが、村の数である 6 か所用意される。饗宴当日、テーブルの上に調理した食物が手際よく並べられ、各村の大人たちが 1 人分ずつ分ける作業をおこない、村の人に手渡していく［写真 9］。人びとはもらった食事を手に広場でおこなわれる催しを観覧しクリスマスを楽しむ。

先述したように伝統的な分配方法は段階的に料理の山を分けるものであるが、クリスマスのときは村ごとに山を分けたあと、２つの半族に分ける作業と世帯別に分ける作業が省かれる。6 つの村ごとに分けた山まではつくるが、そのあとは 1 人分をおおざっぱに決めて盛りつけられたものを渡すのである。理由としては、帰省者により人口が通常の倍以上になっており、島を出ている 2〜3 世以下の人たちについてはどの半族（家族）に所属すべきかがすぐにわからないため、分配の現場がもたついてしまうからである。そのため、島外からの帰省者が多いときは、山を村ごとに分けたあとの過程を省き、頭数で分配をおこなうと考えられる。クリスマス当日の夜は村の教会のグループごとに聖歌が歌われたり、ダンスを踊ったり、映画（DVD）が上映されたりするなど、人びとは夜を徹して会場で過ごす。

■葬儀（*mate*）

人が亡くなるとその日は遺体を家に安置し、泣きながら訪問する弔問客を迎える。女性たちはたいてい 2〜3 人 1 組で「エーン、エン、エン」と独特の抑揚を持った高い泣き声を出しながら遺族の家を訪れるのが習わしである。訪問客は布（1.2 メートル×5 メートル程度）を持ってきて、遺族に渡して帰る。遺族は遺体の横に座って、途切れることなく訪れる弔問客と共に泣き、悲しみ続ける。その一方で親族や遺族の所属する村の人たちは、屋外で炊き出しと翌日おこなわれる葬儀のための食事の準備を始める[13]。客は遺族を弔問したあとに、炊き出しをおこなっている村の共同調理場に行き、バナナやイモ類などの食材を届けることがある。

翌日、遺体を木でつくった棺桶に安置し、土葬する。棺桶の中には弔問客たちが持ってきた布が何重にも敷かれ、遺体も布で包まれる。棺桶を墓まで運ぶのは、故人に近い親族の男性 6 人とされている。土葬してその場で教会の牧師の祈りが終わると、人びとは村に戻り、饗宴の準備をする。村のマラエに料理が並べられ分配が始まる［写真 10］。分配が終わるころに、「イアソア村の何某がバナナを提供」というように、主催する村の人による食材提供者のアナウンスがおこなわれる。葬儀による饗宴は突然おこなわれるものである。そのため近隣の村の人が手伝って食材を提供し運ぶことが多い。

フツナ島では、葬儀後 2〜3 年経ったあとに、土葬した上をセメントでかため、立派な墓石を置く再葬の儀礼をおこなう。再葬のときの方が、親族にとっては葬儀よりも重要視されている。再葬は饗宴規模も大きく、とくに故人が偉大なチーフであった場合などは盛大に催される。現在はキリスト教の影響を受け土葬であるが、以前は水葬であり、数年後に骨だけを取り出し洗骨して再び埋葬儀礼をおこなっていた。数年後に墓をつくり直すという再葬はその名残と考えられる。

死は突然、だれにでも起こりうる出来事である。人が亡くなると、知らせが島を駆け巡り、故人が所属する村を中心に葬儀の準備が始まる。遺族は 1 週間ほど葬儀に関連するに追われる。島の慣習では、葬儀後、遺体に直接触れた遺族たちは海岸に降りて海水で禊をおこなわなければならず、そのあとは釣りをして過ごす。この遺族の一行は海に降りるときも村に戻るときにも人に見られてはならないという禁忌がある。今はみなクリスチャンなので、このような禁忌は厳密におこなわなくてもよいと筆者に説明する島の人は多いが、

[13] フツナ島の慣習では、葬儀の間子どもたちはアヤトリ（*pure*）をおこなう。葬儀のときには、子どもたちはみな紐を持参しており、盛んにアヤトリをして遊んでいた。

筆者が見る限り遺族の一行が海岸に降りるときには、村の人たちはそれを見ないようにふるまっていた。

■結婚式（*majike*）

フツナ島では、新郎側が新婦親族に対して婚資を支払うという習慣はないが、結婚式自体は新郎の所属する村が主催となっておこなう[14]。筆者も調理作業に参加した 2008 年 1 月 15 日～16 日におこなったイパウ村の結婚式の様子をもとに準備のスケジュールについて紹介する。新郎 G4 は、筆者がイパウ村で下宿していた G1・Ga 夫妻の養子のひとりである。実母はイシア村にいるが、結婚式は G1・Ga 夫妻の息子としてイパウ村でおこなわれた。新婦 Ia もイパウ村の出身である。

［事例 2］G4 と Ia の結婚式（イパウ村）2008 年 1 月 15～16 日

15 日

8:00～

新郎 G4 の親族が食材や調理に必要な材料を運び準備をする。同時に Ga は自分の台所にて、準備に集まる人のための昼食をつくり始める。米を炊き、キャッサバを茹で、魚のスープをつくる。

11:30～

イパウ村の人たちが手にナイフを持って、村の石焼き調理場を併設するマラエに集まってくる。饗宴のための調理準備が始まる。新郎 G4 と新婦 Ia も作業に参加している。女性はイモ類の皮むきやすりおろす作業、男性はココヤシの胚乳を削りミルクを絞る作業や薪を運ぶなどの石焼き調理のための作業をおこなう。男性も女性も同様に作業をするが、力が必要な作業から男性を中心としておこなっている。みな盛んにおしゃべりをしながら手を動かす。14 時ごろ集まった人たちに昼食が供される。食べた人からまた作業に戻る。Ga たちは、集まった人たちの作業とは別に、再び台所にて夕食をつくり始める。キャッサバと調理バナナを茹で、魚のスープをつくる。

17:30～

石焼き場に火が入れられる。薪が燃え始める。夕食が供される。

---

14 フツナ島の隣のタナ島では、新郎側が新婦側に婚資を支払わなければならない。フツナ島の女性たちはそのことを「女をこきつかうためにお金を払って買う」と面白そうにしばしば語る。しかしバヌアツ全土においては婚資を支払う方が一般的である。首都ポートビラでは、近頃の婚資の相場は約 8 万 vt ということであった。

19:30～

薪がほとんど燃え尽きる。石が十分に熱されている状態になる。

葉で包み準備した食材を石焼き場に入れ置く。

20:00

すべての食材を石焼き場に入れ終わったあと、ここで作業に集まった人は解散する。Ga は、解散して帰る人たちに「ありがとう（*fafetai fakasore*）」と感謝の意を伝える。

16 日

7:30～

Ga と近所に住む親戚の数人が集まり、石焼き調理した料理、プリを取り出す作業を始める。取り出したイモ類やバナナでつくったプリを切り分ける［写真 11］。

8:00～

昨晩村の男性たちが獲ってきたトビウオの調理を始める。鱗と内臓を取ったトビウオを油で揚げ、それをココナツミルクで煮こみスープをつくる。調理作業をする Ga たちはプリの切れ端と揚げたトビウオを朝食とする。

14:30～

教会にて式が始まる。

15:50～

新郎新婦は教会からマラエに移動する。マラエにはココヤシの葉のマットが敷かれ、料理が並べられ始める［写真 12］。新婦 H の希望により、筆者は教会の前で新婦の記念撮影をおこなう。

16:18～

集められた食物が少しずつ山に積み上げられていく。この日は島外からの客のグループはないので、分配の山は 6 つできた。食物は 6 つの山になったあと、しばらくそのまま放置される。

17:02～

6 つの山が分配のために解体され始める。村ごとの山がさらに 2 つに分けられ、そのあと世帯ごとの山がつくられ始める。

17:40

筆者にも分配された食物が手渡された。ようやく口にすることができる。

料理をマラエに並べ始め、各人に行き渡るまでには 1 時間 50 分かかった。

以上のように、結婚式では新郎の所属する村の人たちが前日から集まり大規模な石焼き調理をおこなって饗宴の準備をする。結婚式当日、教会での式のあとに準備した料理が分配された。分配では各村の各世帯分までに分けられるため、最終的には島の人全員に食物は行き渡る。当日式に参列しない人のところにも、その日の夕食には結婚式でふるまわれた料理が届く。

フツナ島の結婚式は、新郎は黒い燕尾服、新婦は白いウエディングドレスを身につけ、教会の牧師の前で宣誓と指輪の交換をおこなうという西洋化されたものである。西洋的な結婚式のファッションが取り入れられ一般化している様子は日本ともよく似ている。

もうひとつ取り入れられている象徴的なイベントとして「ウェディングケーキへの入刀」が挙げられる。初めて島で巨大な白いケーキを目の当りにしたときに筆者は驚いた。島にはケーキを冷やしておけるような場所がないため、いったいどのようにして準備したのだろうと思ったが、あとで真相を聞くとケーキは首都ポートビラから空輸したものであった。そのため、最近島の結婚式の日取りは首都から直行便が来る曜日に合わせて設定されるという。このウェディングケーキは、新郎新婦による入刀後、一口サイズに切り分けられて、大人も子どもも含めたすべての人にひとつずつふるまわれる。ケーキがない場合はスイカで代用する。G4 と Ia の結婚式ではスイカがふるまわれた。このふるまいは、教会の式の終了と食物の分配が始まる間におこなわれ、饗宴の分配とは異なり、時間をかけずにすばやくおこなわれる。饗宴の食事もごちそうではあるが、ふるまいのケーキやスイカはみなを驚かせる特別な食物である[写真 13]。実際ケーキを初めて食べる島の子どもたちも多く、饗宴で分配される食物とは別に、人びとを喜ばせることに一役買っている。

結婚式や葬儀など、個人にとって歴史性を持つ出来事を共同体で共有するとき、饗宴は開かれる。饗宴の内容は、人びとが協力して大量の食事を準備し、それを分け合うことで成り立っている。食物を介した時間の共有は出来事の共有を意味している。

■祈祷（*mouri*）

祈祷は、島に初めて持ち込まれた機材「パソコン」、「真空パック機」、「発電機」に対しておこなわれる。チーフや教会の牧師が集まり祈りを捧げる儀礼と共に饗宴が開かれる。

この饗宴はそれら島に持ち込まれた新しい機材を公的に人びとに披露する場でもある。分配の様子は［事例 1］で示したとおりで、葬儀や結婚式と同じである。［事例 1］では、分配と食事のあとに、チーフや教会の牧師たちが学校内に置いたパソコンの前に移動し、手をかざして祈祷をおこなった［写真 8］。祈祷の時間は 15 分程である。祈祷の対象となる機材類は、島の人のすべての生活に関係するというものに関しておこなわれている。「真空パック機」と「発電機」の祈祷については、2008 年 6 月 5 日にナキロア村でおこなった。真空パック機と発電機は、JICA 草の根協力支援型事業により筆者らが運んだものである。機材は A3 らの協力のもとナキロア村につくった共同作業場に設置した。

［事例 3］プロジェクト機材の祈祷（ナキロア村）

ナキロア村の A3 にいわれ、6 月 3 日に筆者は 4 通の招待状を書いた。A3 はこの饗宴の意味を筆者に説明するときに英語の dedication（奉納、献呈）をつかっていた。

1．J1（イパウ村の長老会派教会の牧師）
2．FFCA（フツナ島フィッシャリー、代表者 K1）
3．FFCC（フツナ島チーフ委員会）
4．L1（イシア村の NTM 教会の牧師）

饗宴当日の 6 月 5 日は、朝からナキロア村の A3 の家族（世帯Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）を中心に料理の準備を始め、調理をするものと会場の設置をするものにわかれた。行事の際には会場に生花や葉類を飾りつける。今日は前日からの石焼き調理はおこなわなかった。客は 9 名であった。用意した食事の内容は、炊いた米、すりおろしたキャッサバを葉で巻いてつくったチマキ状の餅（*natupa pioko*）、食用ハイビスカスの葉（*saru*）と魚の缶詰のスープであった。11 時に祈祷とあいさつが始まり、11 時 40 分には終了した。そのあと料理が分けられ、各自で食事をおこなった。

筆者らが取り組んでいた事業は FFCA（フツナ島チーフ委員会）と提携しておこなっており、マネージメントをナキロア村の A3 に任せていた。A3 はチーフ委員会の秘書を務めている。そこで機材が島に届いたのを機に、A3 はチーフ委員会と教会の牧師を呼び、島全体を招くような規模ではないが、饗宴を開くことにしたのである。

客が 9 名と小規模な饗宴であったため、石焼き調理はおこなわなかった。饗宴のために用意した米、魚の缶詰は都市部では手に入りやすい身近な食材であるが、島では現金が貴

重なため安価な食材ではなく、むしろ奮発して用意したことがゲストに伝わるものとなる。当日の午前中、筆者は A3 に頼まれ、モウガ村にある M1 の商店（小規模な売店）に買い出しに行った。このときは 3 月に貨物船が来た直後だったので、まだ店に缶詰類は残っているだろうと A3 は考えていた。しかし、頼まれたトマト味のサバ缶は売り切れていたため、ツナ缶（大 220vt×2 こ、小 139vt×3 こ）を購入してスープの具とした。筆者は、輸入物の魚の缶詰よりも島で獲れる鮮魚の方が上等であると思うが、島では魚の缶詰は「手に入りにくいもの」として、しばしばもてなしの食材に好んでつかわれていた。

パソコンや真空パック機などの機材類は、島の人にとって珍しく初めて目にするものである。機材が島に届いたという情報をみなに知らせるために饗宴を開くことによって、特定の家族や村が利益を独り占めするわけではないということを表現する。とくに A3 をマネージャーとしナキロア村を拠点として事業をすすめていたため、常に他の村の人たちから「A3 の家族らがフツナ島のための事業を独占するかもしれない」という疑惑を持たれやすいことを A3 は危惧していた。A3 は「饗宴を開きチーフを招待することによって、チーフらは自分のマラエに帰ったあと、自分の村の人たちに正しい情報を伝えるだろう」と筆者に説明した。みんなに見せるべき、知らせるべき、伝えるべき出来事を共有する機会として、饗宴は開かれることがわかる。正しい情報を伝えるということは、翻って悪いうわさを流布させないということである。饗宴は「噂話を止めるもの」といういい方をしばしばされる。集まった人みんなで「出来事を目撃した」ということが重要とされるのである。逆に饗宴で語られなかったこと、見られなかった事実をむやみに話すことはよくないこと、「噂話の禁忌」（*tapu ta fesao*）といわれる。

筆者は A3 と協力して饗宴の準備をするにあたって、「饗宴を開くタイミング（日時の決定）」と「参加者（参加してほしい人）に間違いがないように伝える」ということに A3 が細心の注意を払っていることに気がついた。饗宴の場で情報を公開するには、血縁、地縁、教会などのそれぞれの単位別に客に偏りが起こらないように注意していたのだ。集まった人で出来事を目撃するという、時間の共有＝饗宴においては、人を間違いなく呼ばなければならない。そうしないと饗宴は成立しないのである。人が欠けることなく参加できる日時の設定や、偏りのない各コミュニティの代表を呼ぶための人選が慎重におこなわれるのはそのためである。

■アウトリーチの帰還

2007 年 11 月 26 日、フツナ島の長老会派教会の人たちが初めてアウトリーチ（英語 out reach；辺境への布教）と称して、隣のタナ島にグループをつくって遠征した。目的は、まだキリスト教に改宗していないタナ島の奥地に住んでいる人たちに布教をおこなうことである。

タナ島は活火山（*Mt.Yasur*）を見るためのトレッキングツアーや、伝統的な生活やダンスなどを見せるツアーが人気の外国人観光客が多く訪れる島である。首都からは毎日飛行機が運航している。フツナ島から見るとタナ島の中心部レナケル（*Lenakel*）は、公共の病院があり商店が集まる街であるが、島の内陸部にはまだ伝統的な生活をしている村があり、キリスト教の教会が建っていない。今回のアウトリーチの主な活動は布教に加え、タナ島にあるフツナ島民の分村テニス（*Tenis*）村との交流であった。

12 月 17 日、タナ島からアウトリーチの一団が帰ってきた。16 日に帰る予定であったが、その日フツナ島が突然の天候不良におそわれた。飛行機の 1 便はなんとか着陸したが、2 便目は上空をしばらく旋回したあと着陸できず、結局タナ島へ引き返していった。上空の突風は激しく危険であったようだ。無事の帰還を祈る人たちがイパウ村の教会に集まっていたが、2 便の人たちの帰りは翌日に持ち越されたのだった。

［事例 4］歴史的な出来事

17 日の午後飛行機がフツナ島に到着し、アウトリーチのメンバーが全員島に帰ってきた。メンバーは男女合わせて 30 名程で、代表はイパウ村の長老会派教会の牧師 L1 である。みなを引率する様子は学校の先生のようであった。

16 時 22 分に教会横の広場にメンバーが集合し、タナ島で披露してきた歌やアクションソング（振りつきの歌）を次々とおこなった。L1 による演説もおこなわれ、タナ島への布教活動が、いかに歴史的な出来事であったかということや、交流したタナ島の村のチーフたちは、キリスト教の受け入れに好意的であり、今回の旅は成功であったということが語られた。歌や演説は 17 時 29 分に終了した。その日は遅くなったので、疲れているアウトリーチのメンバーは家路に着いた。翌日 18 日、再びイパウ村の教会横の広場にアウトリーチのメンバーと各村からメンバーを迎えに来ていた人たちが集まった。11 時 43 分から、集まった人たちに炊いた米と、ニワトリとキャッサバを煮込んだスープがふるまわれた。

牧師 L1 の演説では、アウトリーチが歴史的な偉業であると強調されていた。予期せぬことであったが、16 日の突風による飛行機の揺れはひどかったようで、このとき飛行機に乗っていた人は、「飛行機がそのまま墜落する危険性を感じ、みな大声で神へ祈り、まるで生きた心地がしなかった」という。翌日、無事に帰還できたことによって当事者だけではなく島の人にとっても、布教の旅の印象がより深まったようである。このように大きな出来事の完了時にも饗宴がおこなわれる。葬儀や結婚式と同様に、ここでも歴史的な出来事の共有は、饗宴による食物の分配と共食という時間の共有によって確認されていることが指摘できる。

■収穫祭（*pentecost /maka ufi*）

収穫祭と呼ばれる行事は 5 月におこなわれる。行事の主役はヤムイモ（*ufi*）である。現在は教会の言葉で「ペンテコスト（収穫祭）」と日常的に呼ぶが、かつては初ヤムイモの収穫を祝う儀礼でマカウフィと呼ばれていた。ヤムイモは焼畑耕作でつくる作物のなかで最も重要視される作物である。島ではヤムイモの畑は男性しかつくることができないとされている。収穫祭は各村でおこなわれる。半日かけて大量のヤムイモを中心とした調理がおこなわれ、夕方には村の人たちでそれを分配し、みんなで食べるというものである。

［事例 5］イアソア村の収穫祭（2008 年 5 月 12 日）

12 時半に牧師 L 1 夫妻がイパウ村から到着し、教会に収穫したヤムイモが運び込まれ並べられる。L 家はイパウ村に家を持ち牧師として住んでいるが、所属はイアソア村のため、行事の際にはこのように帰ってくる。村の年長の男性たちが集まるなか、L 1 が祈祷をする。イアソア村のチーフ N1 が、置かれたヤムイモの中から大きなものを選び並び替える。N1 はこれから調理する分としない分に分けていた。

12 時 50 分から調理が始まる。ヤムイモは大きいものは直径約 20 センチメートル、長さは 1 メートルをこえる。まずはそれを長さ 30 センチメートル程ずつに切る。収穫祭におけるヤムイモはすべて熾き火に置いて調理する。皮ごと置いて、片面が焼けたらひっくり返す。両面が焼けてきたら、火から取り出し、ガラス片やナイフなどを道具にして、焦げた部分を削って落とす。再び火に置く。これを根気よく続け、芋の中まで火を通すのである。フツナ語でこの削る作業をワレワレ（*uareuare*）という。同じ方法でパンノキの実やタロイモを調理することもある。フツナの伝統では、収穫した初物はヤムイモ

に限らず、熾火で焼いて食べるべきであるといわれている。そうしないと、その後の実りが悪くなるとされる。

ワレワレは時間と手間がかかるが、この方法でつくる焼芋は、中はよくふかされ外側は香ばしくなるため、島の人はみな好む。収穫祭の饗宴のメインはこのワレワレによる焼きヤムイモとなる。その他は、ニワトリを 6 羽つぶしてつくったスープ、すりおろしたキャッサバを石焼き調理したプリ、すりおろしたキャッサバを葉で包み茹でたチマキ状のナトゥパと呼ばれる料理がつくられた。

ワレワレ作業は専ら女性によって、おしゃべりをしながらおこなわれる。その間に子どもたちが約 2 メートルの長さのカヤ（*gasau*）を取ってきて、焚火の火で熱する。1 分ほど焚火にかざしたあと、熱で膨張した節の箇所をおもいっきり岩に叩きつけると大きな破裂音が鳴る。すると、ワレワレ作業をしていた女性たちが「ワワワワワワ」と裏声の高い声を上げる。この破裂音と女性の声によって、ヤムイモの中にいる悪い精霊が逃げるという昔の風習なのだと年長の女性が教えてくれた。これをフツナ語でウィガサウ（*ui gasau*）という。現在では、悪い精霊を追い出す祈祷は教会のお祈りによってすませているため、ウィガサウは遊びのように楽しんでいるのだという。

すべての調理が終了したのは 18 時ごろで、村の聖域マラエにココヤシの葉のマットが敷かれて食物が並べ始められたのは 18 時 36 分であった。すでに陽は沈みあたりは暗くなっていた。食物は村内の家族の数 6 つ（カウィアメタ半族 3 つ、ナンプルケ半族 3 つ）に分け、そこから各家族の中で世帯別、個人別に分配された［写真 14］。実際に自分の分の分配を受け取り、各自が食事を始めたのは 19 時 27 分であった。食事が終わったあとも、歌を歌ったり話をしたりして、解散したのは 21 時ごろになった。

収穫祭ではその名のとおり畑から収穫した初物のヤムイモを持ち寄り、集め、それから調理して分配をおこない共に食べる。以前はより競争的な性格を持つヤムイモの交換儀礼があったというが、現在は教会がおこなうことを禁じている［竹川　2008］。しかし［事例 5］からは、現在でも自分が収穫したヤムイモを各自で消費せずに、あえて一度同じ場所に持ち寄り、再び分け合うことが、収穫を祝う饗宴となることがわかる。持ち寄られたヤムイモは、村の人全員が集まり、1 日かけてていねいに調理される。それからさらに時間をかけて均等にみなに分配するのである。収穫祭はヤムイモの収穫というよろこばしい特別な出来事であると同時に、毎年やってくるべき循環する出来事でもある。

各人が持ち寄るヤムイモの大きさや収穫量は当然みなそろっていない。収穫祭の朝、教会の祭壇に並べ積み上げられたヤムイモは立派なものが多く目立つ。みな自分の畑で収穫したヤムイモの中からとくに大きく形の良いものを選んで持ってきている。この大きさや形がそろっていないものを一度集めて一緒にしてしまい、そのあとに分け合って食べるということが、饗宴が社会的な相互行為としての平等を表現し確認する場となっている理由といえる。ヤムイモの大きさの違いだけではなく、ヤムイモ畑は男性のみがつくることができるとされていることなどから、世帯の構成によってヤムイモの収穫量にも違いがある。筆者は女性たちとともに山の畑に行くことが多いため、実際にヤムイモ畑の作業を手伝ったことはなかった。ヤムイモをつくるには、陽当たりのよい斜面を持つ畑にツルを這わせる専用の棚をつくるといった手間をかけなければならない。そうしてできたヤムイモの味はイモ類の中で一番よいものとされている。世帯の構成によって、焼畑耕地の持ち方は異なる。このようにふぞろいな世帯間の事情を饗宴という場において、衆目のもとに一度対等な条件にそろえ、分配に参加するということが、収穫を祝うよろこび＝祭りとなっている。

３－１－３．饗宴における分配の小括

以上、饗宴において、食物の分配がどのようにおこなわれているか、事例をもとに紹介した。事例に共通する特徴は、食物を準備することと分配することに時間をかけるということである。人びとに行き渡るための分配には、ラウと呼ばれる山をつくり、段階的に分けていく方法が用いられていた。島の人全員を対象にする分配では、およそ 2～4 時間も時間をかけていた。饗宴では食物の分配の前に、演説や祈祷などがおこなわれるが、それらより食物を扱う時間の方が長い。前日もしくは数週間前からの調理準備の時間も含めると、饗宴の内容とはまさに食物を集め、調理し、分け合うことである。饗宴の舞台はマラエと呼ばれる各村の聖域である。用意した料理はそこに運ばれて、集まった人びとによく見えるように並べられる。料理はしばらく置いたままとなり、やがて各村のチーフや数人の大人たちがあらわれて、分配はゆっくりていねいにおこなわれる。食物の分配が参加者の目の前でおこなわれるということが、饗宴なのである。

マラエに並べられた食物は時間をかけてディスプレイされていると述べたが、これにはどのような意味があるのだろうか。饗宴では石焼きされた料理が用意されている。大規模な石焼き調理は、マラエに併設されている村の共同調理場でおこなわれる。食材や薪の調

達と運搬、食材の加工と調理、ココナツミルクづくり、石焼き場への点火などと分業して作業をおこなう。この作業は、ひとつの村の大人全員、約 50 人以上が関わって可能となる調理法である。また石焼き調理の一方で、男性らを中心に漁撈を担当するグループが編成され、一晩かけて釣り漁やモリ突き漁をおこない、トビウオやボラ、大型回遊魚、リーフフィッシュを調達する。マラエに並ぶ料理の数々は、それが食物であるという意味以上に、人びとの手間と時間がかけられていることを示している。

時間について、もうひとつつけ加えると、大規模な饗宴のために島ではラフ（*rafu*）と呼ばれる禁漁地域を海浜部に設けることがある。ラフはフツナ島の伝統的な海洋資源管理の方法のひとつである［竹川　2008］。ラフは海浜部のランドオーナーが設定する。ラフは禁漁にするエリアの浜にある岩の上に、切り落としたパンダナスの葉などをオーナーが置いて公示される［写真 15］。ラフが設定されると 1～2 年の間、その浜は禁漁となる。ラフは大規模な饗宴に合わせて設定される。ラフの解禁後に海に行くと、資源が増えているほか、魚が人間に対して警戒しなくなるため漁がおこないやすくなるという。これは、饗宴のための食材を簡単に獲得するための知恵である。このラフの設定も饗宴のための準備期間といえるだろう。実際に 2007 年 10 月 26 日、饗宴のためにラフが設定された。ナキロア村の海を臨む B 家の崖を下ったところに位置する浜から、島の西側に位置するチナロアと呼ばれる浜の入り口までがラフに設定された。その日筆者はナキロア村の Ac らとチナロアの海岸に釣りに出かけ、ラフの印が置いてあるのを見たのだった。置いたのはナキロア村の D1 だった。このラフは、2008 年 12 月 25 日に予定しているイアソア村が主催のクリスマスと新しい教会の落成式をかねた大規模な饗宴のためのものであった。Ac はラフの印を見て「D1 が置いたのよ。いやねぇ」と舌打ちしながら、ラフに指定されていない方向に歩いて行った。饗宴のためという大義名分があるとはいえ、ラフが設定されると、解禁までのあいだみなで浜の使用を我慢しなければならないのである。やがて饗宴の日を迎え、マラエに並ぶ食物の数々の中に魚介類を見たとき、人びとはこれまでの日々の我慢が報われラフによる禁漁が終わったことを感じるだろう。

島の人にとって饗宴で大量の食物が並べられたということを見ることが、実際に食物が分配され口に入る前に知りえる情報そのものなのである。すなわち、それは人びとが共有する出来事に賛同し、手間と時間をかけて協力したという事実を可視化した情報であるといえる。

では次に、山をつくって次第に細かく分け、時間をかけて分配をおこなうということに

ついて考えたい。公平な分配は平等を表現するが、それは必ずしも同量に分けたという結果がつくるものではない。事例から人びとが饗宴の場で重要視しているのは、結果として分配された食物の量ではなく、分配をおこなうという過程にあると考えられる。どの事例でも、マラエに並べられた食物は、最初に 6 つか 7 つの山に等分される。6 は島内を大きく分けたときの村の数である。7 の場合は、村ごとに分けた 6 を島外からの客のグループの 1 を数え足した数である。どの分配でも大きな山から小さな山へと次第に細かく分けられていく。最後の山は「世帯」である。当然各々の世帯の家族構成は同じではないが、分配の山は 1 世帯に 1 つ与えられる。ここでは世帯を単位として、だれもがまったく同じ条件、対等な分配に参加するということがおこなわれていた。6 つの山に分けるときも同じことがいえるだろう。世帯と同様に、各々の村を構成する人数も均一ではない。厳密に数値化すると、村の人口も多い少ないがある。しかし分配の山は、村は村で等分、世帯は世帯で等分していく。そういう意味で人びとは饗宴の分配に参加する前に、ふぞろいな条件を同じ条件にしてしまう。つまり「私たちは対等な状態だ」という前提をつくってから、分配を始める。それは島でおこなわれる饗宴の分配が、時間をかけ慎重にていねいでありながらも、決して分配された結果の量が均一になるように 1 人分の量を数で決定し正確さを極めようとはしない理由といえるだろう。

筆者が実際に受けた分配では、滞在し始めて最初の数か月は「島外からの客のグループ」の山から分配を受けていたが、次第にあとからは下宿しているナキロア村の A 家か、イパウ村の G 家の世帯の一員としてそこから 1 人分の分配を受けるようになった。客のグループからの分配量の方が、A 家や G 家からもらう量よりも多い。客のグループの山にはもともと人数に対してかなり多い量が分配されているからだ。A 家からもらうときは A3 が、G 家からもらうときは Ga か G1 が分けたものをくれた。それぞれの世帯内で、人の数に合わせて等しく分配したものである。このようにして受け取る 1 人分の量は 1 食分にしては多いので、残った分は台所に保管して、またあとで家族と食べることになる。実際に分配で感じることは、饗宴に参加して分け合うことで「一員」となることのうれしさである。客のグループで分配を受ける際には、島外から来たものだが島の一員と数えられ分配される。村の山から分配を受けることは、その村の一員として数えられ、世帯の山から分配を受けることは、その世帯の一員として数えられているという感覚がある。分配の結果として同じ量をもらったということではなく、その場に参加している人たちと共に、まったく同じ条件、対等な状態で分配されているという一連の行為そのものが、分配を受ける楽しさや

よろこびと結びついている。

最後に、饗宴と出来事の関係について考えよう。饗宴をおこなう出来事には 2 つの特徴が挙げられる。ひとつは循環することであり、もうひとつは歴史的なことである。［事例 5］のヤムイモの収穫祭やクリスマスは年に 1 回やってくるもので、循環する出来事である。循環する出来事と饗宴の組み合わせは「祭り」といえるだろう。村単位でおこなわれたヤムイモの収穫祭は、ヤムイモを熾火で時間をかけて焼くという調理作業を村の人びと全員で楽しむ時間だった。結婚式や葬儀は、生と死の循環という点では共同体にとって循環する出来事ともいえるが、個人に起こる転機でありそれをみなで見届けるという点では歴史的な出来事である。［事例 1］のパソコンが初めて島の学校に設置されたこと、［事例 3］のプロジェクト機材（真空パック機等）が島に持ち込まれたこと、［事例 4］の初めてフツナ島からタナ島にアウトリーチ（布教活動）に出かけた一行が使命を果たし無事帰ってきたことは、まさしく歴史的な出来事を記念して開かれた饗宴である。歴史的な出来事の共有に饗宴が欠かせない理由は、饗宴における食物とその分配が、参加した全ての人たちの時間と空間の共有を可視化するからである。饗宴の場に並べられる食物があらわすことは費やされた時間や人びとが協力した事実などさまざまである。たとえば、数年間ラフと呼ばれる禁漁期間を守ること、数か月および数週間かけて作物や調理に必要な植物、薪を調達すること、饗宴の前日みなで集まって石焼き調理をおこなうこと、夜間カヌーを出して漁に出かけることなどである。自分たちの手を介して生み出した食物は、それ自体が他の人との時間の共有を意味する。それを並べて確認し、あらためて島や村や世帯の「一員」として分かち合う饗宴は、分配を祝祭の場とし歴史的な出来事をみなで記憶する方法なのである。

３－２．共同作業における分配

共同作業とは、個人や一世帯ではおこなえないような人手を要する作業があるとき、みなに呼びかけて協力してもらうことを指す。たとえば島の生活では、家屋の屋根の葺き替え、数年休ませた焼畑のジャングルとなった雑木を切り払うこと、農作物の植え付けなどがよくある共同作業として挙げることができる。島の子どもたちはたいてい 10 代後半からは生業活動に関わることや生活に必要なことは一通りできるようになっている。フツナ島では性的な分業が顕著なのは外洋に出る漁撈活動を男性がおこなうことぐらいで、調理をはじめとする家事、育児、焼畑耕作については、男女はほぼ同様に参加している。成人ひ

とりの能力からすると、自分がおこなう活動のみで生活を完結できないこともないと思われる。しかし、実際には共同作業の機会は多く、島では完全にひとりでは生きていない状態になっている。共同作業があるということは、人びとが相互に依存しながら生活を送っていることを示している。ひとりでできないことはない作業でも、みなで集まっておこなう方が効率がよいし、なにより楽しい。これが共同作業をおこなう大きな動機となっている。

共同作業に不可欠なのが、作業を呼びかけた主催者が用意する食物である。作業への参加者は、自分の身体と山刀（ナイフ）（*majira*）さえ持って行けばよいといわれる。参加者が熱心に作業をおこなっている間、主催者はその作業には加わらず、別の場所で参加者たちにふるまう食事の準備に専念していることが多く見られた。主催者はそもそも自分が呼びかけた理由である作業のことは忘れてしまい、参加者への食事の準備に集中しているように見える。共同作業における食物の分配は、提供された「作業（*fijikau*）」への「食物（*kai*）」の返礼となっている。このことからは社会の基本ともいえる互酬性が成り立っているといえるが、実際の事例を細かく観察すると、ただ作業と食物の交換と説明される状態に陥らないように、むしろ人びとがさまざまな工夫をしていることが指摘できる。本節ではその理由を分析したい。

３－２－１．共同作業と食物分配の山

共同作業を呼びかける相手は、必要な人数や都合に合わせて、血縁、地縁、教会といった関係から選ばれる［表 7］。ここに挙げた 3 つの関係は完全に独立しているわけではないため、ところどころメンバーは重なり合っている。とくに血縁と地縁は重なるところが大きい。クリスチャンとして教会活動に熱心な島の人たちは同じ教会の所属メンバーとの関係は親密であり、共同作業を手伝うグループとなる。

［表 7］筆者が参加した主な共同作業（2007～2008 年）

作業の内容	とき	場所	主催者	集まりの種類
石焼き調理	2007/9/10	ナキロア	A3	地縁（イアソア）
焼畑耕作植え付け	2007/10/25	モウガ	O1	教会（NTM、AOG）
焼畑耕作草取り	2007/11/17	タヴァイ	C1	血縁、地縁（タロマラ）
パンダナスの葉の収穫	2007/11/22	チナロア	Pa	地縁（イアソア）
焼畑耕作草取り	2008/1/21	イアソア	B1	教会（AOG）、地縁（ナキロア）
ココヤシの葉の収穫	2008/4/11	タロマラ	C1	教会（AOG）、血縁
屋根づくり	2008/4/18	ナキロア	C1	教会（AOG）、血縁
教会建築工事	2008/4/23	イアソア	イアソア村	血縁、地縁（イアソア、モウガ、タルマラ、イシア、マタギ）

作業の内容や親しさなどによって呼びかける相手は選ばれており、たとえば、数時間程度の畑の草取りであれば近所の友人 2～3 人を誘い、1 日おこなうパンダナスの葉の収穫であれば 10 人程度を誘うが、力仕事ではないので女性を中心とした地縁のグループに声をかけるという具合である。作業に来てくれた人のために主催者が用意する食事は、作業の合間か終了後に昼食か夕食として供される。食事は 1 人ずつに手渡されるが、分配方法は饗宴のときと同様に、一度目の前で均等に山をつくって分け終わってから配る。作業を提供した人に返礼として食事が差し出されるわけだが、その場面を見ると、受け取る方は「当然」という態度は決して見せず、うやうやしくもらっている。ではまず、20 人程が参加した共同作業と食事の分配の事例をみる。

［事例 6］イアソア村の教会建設作業―梁を設置する（2008 年 4 月 23 日）

9 時、作業に参加する約 10 人がイアソア村に集まってきた。来たのは主に 20～30 代の男性である。建設中の新しい教会は、すでにセメントの床とコンクリートブロックをつかった壁部分はできている。この日参加者に手伝ってもらうのは、屋根の梁（木材）を設置することである。梁を設置する場所は、地上から 6 メートル程の高さである。竹でつくられた高所作業用のやぐらは、前日までに現場監督の A3 によって組まれていた。

A3 はこの作業について「フツナ島のこれまでのなかでも一番大きな教会で、持ち上げる梁はとても大きく重たいから、男が 20 人いないと運べないだろう。街にはトラックがあるからいいが、島は人の手しかないから大変だ」といっていた。

20 人の男性がそろい、10 時 13 分から屋根の中心となる梁を引き上げる作業が始まった。やぐらに立つ人、壁の上に立つ人、梁を地上から支える人、梁を滑車によって引き上げる人、角材をつかって梁を押し上げる人などにわかれる。20 人がいっせいに力を合わせて、太く重たい梁を移動させる［写真 16］。掛け声とともに梁をてっぺんに向けて押し上げた。梁が地面に落下したり、高所に登っている人があやまって落ちたりしては危ないので、声を掛け合いながら作業は慎重におこなわれる。イアソア村の女性や子どもたちが離れたところから、「ゆっくり！（*fariki mana*）」と声をかけながら緊張して作業を見守った。

10 時 47 分、梁を設置すべき屋根の一番高い位置に移動させることができたが、まだ梁の向きを変えたり、固定したりする作業が続く。梁を押し上げるのに疲れた人は休憩を取る。筆者は台所で昼食をつくる女性たちを手伝う。

13 時 6 分、女性たちが参加者のための昼食を運んできて並べ始める。食物を並べる場所は、トタンで屋根を葺いた簡易教会である。食事はイアソア村の人たちが前日から準備してつくったものであり、石焼き調理でつくったキャッサバ料理プリ、男性たちが前日の夕方にモリ突き漁で獲った魚、ハギ類（*umeume*）のスープ、キャッサバをすりおろして葉に包んで茹でたチマキ状の料理ナトゥパ、バナナのナトゥパ、キャッサバを食用ハイビスカスで包んだ料理ポノバイ（*ponovai pioko*）、炊いた米であった。1 人分（1 皿）が同じになるように料理が分けられる［写真 17］。魚の肉はスープから取り出されて、皿に均等に盛り付けられる。魚の切り身は分配することを見越して、煮崩れないようにあらかじめ紐でしばってある。

13 時 24 分、モウガグループ（モンガ、イシア、タルマラ村）、マタギグループ（イタヴァイ、イマラエ村）、イアソアグループの順に、1 人ずつ名前を呼ばれたら食事を受け取りに行く。男性たちは食物が運ばれ始めてからすでに 30 分ほど待っていたのだが、名前を呼ばれても機敏に動かず、ゆっくりのろのろと受け取りに行く。食事の入った皿が手渡され、もらった人から食べ始める。筆者を含め、ほかの人たちも食事を受けとる。子どもたちも父親か母親と一緒に食べる。

13 時 41 分、現場監督である A3 が今日おこなった作業と今後のスケジュールについて

説明を始め、みなは食事をしながらそれを聞いている。14 時過ぎに解散して今日の作業は終了した。

イアソア村の新しい教会は、2008 年のクリスマスに落成式をするべく 1 年以上工事をおこなっていた。島の一般的な家屋は島で手に入る植物素材で作られているが、この教会はセメント、コンクリートブロック、木材（角材）、金属製の部品などの建築資材を首都から運んでつくる建物である。完成すると島で一番大きな建築物となる。日頃の作業は土木建築の技術を首都のカレッジで学んだ経験がある A3 が中心となり、イアソア村の男性たちと作業をすすめていたが、人手が欲しいときは近隣の村に協力を求めて助けてもらう。イアソア村の人たちはお礼に十分な量の昼食を前日から準備して用意した。スープにしていた魚は前日にイアソア村の男性たちがモリ突き漁をして獲ったものだ。料理の分配は 30 分かけてていねいにおこなわれていた。スープの具である魚の肉は、一度鍋から取り出されて、1 人ずつ肉が均等になるように分けられる。そのあいだ、作業に参加していた男性たちは、昼食会場の周りに集まってきて談笑しながら待っていた。饗宴のときと同様に、分配は台所など奥まった場所でおこなわれるのではなく、人びとの目に見える場所でおこなわれる。しかしながら、集まっている人たちがわざわざ分配の様子に見入ることはなく、遠巻きにして談笑に夢中になっている。配られるまでは、食物をあまり見ないようにしているようである。

参加者たちは、待っていたにも関わらず、1 人ずつ名前を呼ばれると、ゆっくりと受け取りに行く。そこで急いではかっこ悪いといった様子である。協力して作業に従事したお礼に食事を受け取るのであるが、そこで受け取るのが当然であるような態度を示すことはなかった。むしろ遠慮を見せながら、うやうやしく皿を受け取っていた。

1 人分として渡される食事は、ふつうの 1 食分にしては多い量である。食物は昼食として供されるが、家に帰ってからも食べられるように手みやげ分も含まれているのだ。そのため皿に盛られたスープや米飯など持ち帰りにくいものを先に食べ、石焼き調理のプリやチマキ状に茹でたキャッサバやバナナなど、葉で個装された食物を余らせて持ち帰る人が多い。島の生活で仕事といえば、山に行くにしろ海に行くにしろ「食物を得るための活動」に時間をつかっている。それは翻れば、必要な食物さえ確保できているのならば、その時間をなににつかってもかまわないということである。共同作業でその日の食物が用意されることによって、参加者は作業する時間をリラックスして過ごすことができると考える。

では、次にもうひとつ、焼畑に関わる共同作業をみていく。

［事例 7］キャッサバの植え付けを手伝う（2007 年 10 月 25 日）

9 時ナキロア村にて、家を出ようとする B1、Bb の夫妻に会った。今から山の上の方の畑（*vere*）に行くというので、一緒に行くことになった。「今日はモウガ村の上にある O1 の畑を手伝いに行くよ」と B1 がいう。

10 時 27 分、B1 夫妻の長男 B2（10 歳）の畑という場所に到着した。そこでいくつかのパパイヤ（*esi*）とネギの束とキャッサバの茎を収穫する。両手で一抱え程の量のキャッサバの茎を刈り取った。キャッサバの茎はこれから行く O1 の畑の植え付け用のものである。B1 によるとこのキャッサバはライス・マニオクと呼ばれる品種で、島では人気があるのだという。イモが太くなり過ぎず、米を調理するように早く煮上がるのが名前の由来である。収穫したものを 3 人で手分けして持ち、O1 の畑に向かって歩いている途中、モウガ村の女性 Qa（70 代）に会った。Qa は自分の畑の手入れに来ており休憩をしているところだった。B1 は持っていたネギの束をひとつかみ Qa に渡した。

10 時 47 分、O1 の畑に着いた。すでに畑には、O1（60 代）、妻の Oa（50 代）、R1（60 代）、R1 の長男 R2（30 代）、次男 R3（20 代）、三男 R4（20 代）、B1 の甥 B3（20 代）、R3 の妻 Rc（20 代）の 8 人がいた。それに、B1、Bb、筆者の 3 人が加わり、全員で 11 人になった。まず取りかかったのは、30 センチメートル程掘って土を柔らかくし、雑草を取る作業であった。

12 時 27 分、作業を中断して昼食の時間にする。人びとは木陰に入ってくつろぐ。O1 から、炊いた米をひと塊ずつ葉に包んだもの（約 1.5 合）、キャッサバをチマキ状に茹でた料理ナトゥパ、ツナ缶が 1 人に 1 つずつ配られる。フツナ版弁当といった感じである。それに、B1 が来るときに畑から取ってきたネギとパパイヤを切ってみんなに配った。ネギは生のまま齧る薬味として島では人気がある。食べきれなかった食物は、手近な葉を取ってきて包み直し、持って帰るようにする。食物の包みはアリにたかられないよう枝に吊るしておく。

13 時に作業を再開する。土を掘って柔らかくしたところを直径 50 センチメートルの円形に盛り上げる。それがパッチ状に隙間なく畑全体につくられる。土を盛り上げたひとつの山に、円形になるように 4 本のキャッサバの茎を刺し、中央に 3 粒のトウモロコシの種を植える。この植えかたは B1 が今回提案した新しいやりかたで、試しにやってみる

のだという。15 時にはすべての植え付けが終わり解散した。筆者は再び B1、Bb 夫妻とともにナキロア村に帰った。

O1 が畑作業に誘ったのは同じ教会の仲間であった。O1 夫妻は NTM 教会、R 家と B1 夫妻は AOG 教会である。長老派教会に対して少数派の NTM と AOG は合同で教会活動をおこなう関係である。O1 と R1 は年齢も近く親しくしている。O1 夫妻は 60～70 代と高齢で、2 人だけで植え付け作業をおこなうのは難しい。夫妻の近隣に娘夫婦が住んでいるが、今回娘は来ていなかった。O 家はイシア村、R 家はモウガ村、B 家はナキロア村とそれぞれの家は離れているが、畑に誘うことによって 1 日一緒に時間を過ごすことができる。また B1 は島では評判の畑作りの名人である。今回 B1 は新しい品種のキャッサバの茎を持参し、植え方も工夫していた。また R1 の息子たちが 3 人来て手伝ってくれたことを O1 はよろこんでいた。

O1 夫妻が準備した食事には、炊いた米とツナ缶があった。米もツナ缶も輸入品である。これらは都市部では一般的に安価な食料として常食されているが、フツナ島のような離島では日常の食卓にはあがらない。しかし O1 は自宅に商店を併設しており、［事例 3］で登場した M の商店と同様小さな売店だが、石鹸や乾電池、釣り針などの生活雑貨や、米、砂糖、缶詰などの食材を扱っている。O1 は参加者にふるまう食物として、商店で取り扱う米とツナ缶を選んだのだ。［事例 3］で紹介したように、島では人に食事をふるまうときに、ツナ缶をよいものとしてスープにつかうことがある。しかし、今回の O1 のように、1 人に 1 つずつ配ることはない。ツナ缶と炊いた米を用意したのは商店を経営する O1 ならではの振る舞いといえる。

R3 の妻 Rc は臨月で腹が大きかったので、軽い運動程度に畑を歩くが、みなが作業中は木陰で休んでいることが多かった。一方作業では R1 の息子たちと B1、B1 の甥の B3 がとくに動いていたが、昼食のときの分配は彼らを優先させるようなことはなく、畑にいる人の人数で均等に食物の山をつくって分けた。朝偶然 B1 夫妻について行った筆者にも、同じように 1 人前が分配された。共同作業の分配においても、饗宴の分配と同じく、その場にいる人全員が参加者として山をつくって分配される。主催者が用意する食事は、作業に来てくれたことに対する返礼ではあるが、働いた時間の長さや成果への評価が、分配量に反映されることはない。

３－２－２．喜ぶものを用意する

［事例 6］や［事例 7］でも、主催者が参加者のために食事を準備していることを紹介した。［事例 6］では前日にモリ突き漁をしてスープをつくるための魚を準備したり、［事例 7］では島では食べる頻度の少ない輸入食料を提供したりしていた。いずれも参加者に喜んでもらいたいという意図が感じられる。次の事例もそのひとつである。

［事例 8］B1 の畑の草取り（2008 年 1 月 21 日）

ナキロア村の B1 に呼びかけられ、Ac と Ec と筆者の女性 3 人で B1 の畑の草取りに出かけた。たどり着いた B1 の畑には、半分はスイカ、半分はタロイモが植えられていた。4 人でおこなった炎天下の草取り作業は 2 時間程で終わった。B1 は、畑から大きなスイカを 4 つ選んで切ってくれた。Ac も Ec も一口食べては「甘くない！」と遠慮なしにいう。B1 も「甘くないのは捨てて次を食べろ」という。スイカは収穫時期が少し遅れてしまったようだ。彼女たちは「結局甘くておいしかったのは 1 つだけだった」などと辛口の評価をいい合いながらも、スイカで満腹になった。B1 はみやげ用にスイカを Ac と Ec、筆者に 1 つずつ持たせた。帰り道、別れるときに B1 が「今日はありがとう」と感謝を述べた。

日頃 B 家はナキロア村に住んでいるが、このときは 1 月 2 日に B1 の母が亡くなったため、葬儀を彼らの出身村であるモウガ村でおこない、そのままモウガの家で喪に服していた。B1、Bb 夫妻は仲がよく、畑仕事にはたいてい 2 人で出かけるが、この日は葬儀に関する連日の調理作業で妻 Bb が疲れ切っているということで、B1 は Bb を家に残し、1 人でナキロア村に来て、隣に住んでいる Ac らを畑の草取りに誘ったのだった。畑つくりの名人といわれる B1 は、イアソア村の郊外にある自分のタロイモ畑の草取りのことがずっと気になっていたのだろう。

B1 は Ac らが作業を手伝ってくれたことに対してスイカをふるまい、感謝を述べた。ちょうど 12 月に旬をむかえるスイカは、島の人にとってクリスマスを象徴する甘くておいしい果物である。B1 はスイカの大盤振る舞いをしてくれた。Ac らはスイカの辛口評価をしているものの、B1 の心意気にうれしそうであった。手伝ったのは数時間のことではあるが、作業を頼む場合には相手が喜びそうな返礼＝食物を用意している。

このように共同作業における分配では、主催者はただ昼食や夕食としての食物を用意す

るのではなく、相手が喜びそうなものを工夫して準備しようとしていることがわかる。作業と食物をただ交換することに、人びとは魅力を感じないかのようである。食物を用意する人が相手を喜ばせようとする意図が表現されることによって、対象の他者は、自分が匿名ではない他者として存在していることを知る。この思惑の一致〈喜ばせたい―喜ぶ〉が分配の場で楽しみを生む理由と考えられる。

相手が喜びそうな食物の演出は多岐にわたる。一期一会の演出となるほど、思惑の一致の効果は高まるといえる。それゆえに、島の人たちは様々な工夫を凝らしている。

次の事例は、子どもたちを集めて作業をおこなったときのことである。相手は子どもたちであるが、かれらが喜びそうな食物が用意されており、大人との共同作業とまったく同様のことがおこなわれている。

［事例 9］子どもたちの好きなもの（2008 年 4 月 26 日）

ナキロア村にて A3 は新しい家をつくっていた。アナイチュム島で中学校の教師をしている弟の A2 が、来年はフツナ島の学校に赴任するので、A2 の家を自分の家の隣につくり始めたのだった。A2 の希望で、家屋の形はフツナ島の伝統的なものであるが、A3 は地面にはコンクリートをうつことにした。

この日の作業は、浜からあらかじめ運んでおいた白い砂とセメントに水を混ぜてコンクリートをつくり、木枠を取り付けた箇所に流し込んでコテでならすというものであった。A3 はその日、子どもたちを中心に手伝ってもらうことにした。作業に参加したのは、A3 の妹 Ag（16 歳）、長女 Ah（5 歳）、近所に住む Ce（5 歳）、Ec（30 代）と筆者で、みな女性である。作業内容は、砂とセメントを混ぜ続けコンクリートをつくることである。交替で砂を運んだり、木の棒でコンクリートをかき混ぜたりした。これらは力仕事であるが、Ah や Ce は楽しそうに砂を運んでいた。子どもたちは働きもので、バケツリレーのチームワークもよい。重たいものを持ち上げる場面では、Ah と Ec が活躍した。A3 は作業を指示しながら、コンクリートが固まる前にコテをつかって水平にならした。作業は午前中の約 2 時間をつかっておこなわれた。

午後、A3 は前日畑から採ってきていたトウモロコシを大鍋で茹で始めた。茹であがったところに風味づけにココナツミルクを入れ再び火をかける。トウモロコシとココナッツミルクの甘い匂いがただよう。これを作業を手伝ってくれたみんなにふるまった。島ではトウモロコシは主食のイモ類のようには食卓にあがらないが、甘味があるので間食として

とても人気がある。子どもたちは思わぬトウモロコシの登場にとてもよろこんだ。

このように共同作業を呼びかける主催者が参加者の喜びそうなものを選んで積極的に用意する。A3 は、子どもたちに対しても大人にするのと同じように食物を用意してふるまった。筆者は A3 に、「今日は子どもチームだね」というと、「子どもの方が大人より頼みやすいし、しかも働きものだからいいんだ」といった。大人に作業を頼むときは、だれを誘うかなど気をつかうこともあるようだ。しかし子どもたちがメンバーだったとはいえ、A3 は感謝のためにココナツミルク風味の茹でたトウモロコシという、いいものを用意した。A3 は子どもたちの歓声が上がるものを選んで用意していた。次の事例も、主催者が参加者の好みを想像して用意する食物を工夫している。

［事例 10］赤いジュース（2007 年 11 月 17 日）

筆者は Ac と畑に出かけた帰りの山の中で、別の畑で作業をする 6 人に会った。場所はナキロア村とモウガ村の中間に位置するタヴァイと呼ばれる北向きの斜面の土地である。Ac が「ここは C1 のヤムイモ畑だ」と教えてくれた。畑にいたのはナキロア村の A6（30 代）と長男 A12（4 歳）と C1 の長男 C2（18 歳）、C2 と同年代の友人である D7、H1、B3、Re だった。筆者らを見て 6 人は作業の手を止めて木陰に入り休憩を取った。Re がラジオを持ってきていたので、それで音楽を聴いたりおしゃべりをしたりする。

彼らと別れて、筆者らはナキロア村に帰った。C1 の家の前を通ると、C1 は慌ただしく台所で炊き出しをおこなっている。タヴァイで作業をしている人たちにふるまう昼食を用意しているところだった。C1 が手招きをするので近寄ってみると、コップに入った赤い液体を差し出された。なにかと思って飲んでみると、粉を溶かしてつくったインスタントのストロベリー風味のジュースだった。彼は 2 リットル容量のやかんいっぱいにジュースをつくって用意していた。先月出かけていたタナ島からジュースの粉を買って帰ってきたという。「若者たちがよろこぶに違いない」と笑いながら、C1 は再び炊き出し作業に戻った。

筆者はこのときにそれほどインスタントのジュースの珍しさを感じていなかったが、その後約 1 年島に滞在していて赤いジュースを目にしたのは、このときとある日曜日の教会の礼拝で葡萄酒代わりに儀礼につかわれていたときの 2 回きりであり、C1 の考えた演出効

果の大きさがうかがえる。作業に参加した若者たちは、驚いてよろこんだと想像される。とくに10代の若者はまだ島を出たことがないものが多い。彼らにとっては、インスタントのジュースやチューイングガムなどの駄菓子は、自動車など同様、まだ行ったことのない都市部の雰囲気を象徴するものである。作業の参加者がC1にとって息子とその友人たちという若者中心のメンバーだったので[15]、C1 はジュースをふるまうことを思いついたようだった。

次はさらに食物の準備に「よろこび」だけでなく「おもしろさ」を演出しようとした事例である。

［事例 11］一晩中ブッシュを歩いて獲ったカニ（2007 年 11 月 22 日）

11 月 21 日の 20 時ごろ、「明日はイアソア村の女性 Pa（60 代）のための作業があるから、今からチナロアに行こう」と Ac に誘われ一緒に出発する。チナロアはナキロア村から歩いて 45 分程のところにある海岸である。イシア村の Ob（30 代）も一緒に行く。道は暗いので、乾燥したココヤシの葉を束ねてつくった松明に火をつけて歩く。

チナロアに着くと、Pa と夫の P1（60 代）、Pa 夫妻の次男 A5（20 代）、Eb（70 代）[16] がいた。A5 がココヤシの葉を切って数本持ってきたので、それをつかって女性たちは寝床用のマットを編み始めた。チナロアの海岸には崖が風雨によって削られてできた窪みがあるので、みなそこに集まって寝る。窪みの下は雨が降っても濡れないようになっている。

翌朝 5 時ごろにみな起床し、6 時に作業する場所に移動する。Pa のための作業とは、パンダナスの葉を刈りとることであった。パンダナスの葉は、女性たちがバスケットやマットなどの日用品をつくる材料である。フツナ島では白っぽく乾いた葉を取って集落まで持ち帰り、葉のふちにあるトゲと葉脈を切り取ってから保存する方法がおこなわれている。海に近い Pa の斜面の土地にはパンダナスばかりがぎっしりと生えていた。女性たちによると、海風を受けて育つパンダナスの葉は、長く丈夫で色も白く質がよいものであるという。

7 時に A5 と P1 があらわれた。2 人は焼いて真っ赤になったトゥパ（*tupa*）と呼ばれ

---

[15] 島にはヤムイモの植え付けには、ラマガ漁（大型回遊魚漁）に参加したものは行けないという禁忌がある。そこで、このときの参加者は、まだラマガ漁には参加していない 10 代の若者が中心であったと考えられる。

[16] Eb はイアソア村の人で、ナキロア村に滞在することもあるが、普段はイパウ村の親戚の家に住んでいる。このときはナキロア村の Aa の家に滞在していた。

るカニと、同じく焼いて調理したバナナを袋（30 キログラム用の米袋）に詰めて持ってきた。トゥパは 1 匹が大人の拳ぐらいの大きさである。Ac が手伝って、運ばれてきた大量のトゥパの胴体とハサミ、足をバラバラに解体する。そして 9 つの山をつくって均等に分け始めた。できるだけ均等になるように、ハサミや胴体を分けているようだ。最後にバラバラになっている足を分けて置いた［写真 18］。バナナも同様に分けられた。朝食には多すぎる量であり、昼食の分も兼ねたものだった。現場の人数は全員で 7 人であったが、あとからやってくる予定のイアソア村の女性の分も分けていた［写真 19］。

みんなは A5 が袋から焼いたトゥパをどんどん取り出すのを見て驚いていた。トゥパは陸生のカニで夜行性である。これだけの量のトゥパを獲ってきたということは、A5 と P1 は一晩中松明を持ってブッシュの中を歩き回っていたということがわかるからだ。トゥパは見た目の割に食べる肉の部分が少ないカニなので、日常的な食卓には一品としてはのぼりにくい。薄暗くなってきた夕方、畑の帰り道などで見つけたら運がいいという程度の間食のような食物である。

女性たちは「A5 も P1 も夜な夜な歩き過ぎよ！」と笑う。みんなこれを話題にしながらおしゃべりを続け、朝食としてトゥパとバナナを食べた。朝食後、パンダナスの葉をとっては束にする作業を続ける。その作業は 15 時 30 分までおこなわれた。昼食休みは各自適当に朝食の残りを食べていた。15 時 40 分ごろ、P1 が茹でたてのキャッサバをイアソア村から運んできた。また朝と同じように山をつくって分ける。そうしていると再び P1 の袋からトゥパが取り出され、また目の前で分けられ始めた。女性たちは「まだあったの！」と驚いている。作業は終了となり、みんなで分けられたキャッサバとトゥパを食べる。「このキャッサバおいしいけど、なんていうキャッサバ？」とたずねる女性に対して、「ちょっと前にタナ島から持って帰ってきて育ててみた新しい品種のキャッサバだよ」と P1 が答えた。

食事を終えたあとは、刈りとって束にしたパンダナスの葉をみな背負ってイアソア村までもって帰った。大きな束を担ぐため、後ろから見ると葉の束が歩いているように見える。ときどき休憩をとりながら帰るなか、「今日は一日中トゥパを食べ続けた変わった日だった！」とみんな笑って語り合っていた。

［事例 9］～［事例 11］では、主催者が用意する食物について、作業の参加者に驚きや楽しみを感じさせるように工夫していることがわかる。筆者が赤いジュースを［事例 10］

以降見ることが 1 度しかなかったように、カニに関しても［事例 11］の日のように大量に食べることはなかった。共同作業の主催者にとって、用意する食物の演出は、工夫のしどころであるといえる。P1 はカニだけでなく、キャッサバに関しても珍しい品種を用意して話題を提供していた。おもしろい話題を提供するという行為は、食物を贈与するのと同様かそれ以上に人びとの関心を引いている。とくに共同作業中はおしゃべりをしながら手を動かすという状況が多いので、主催者による話題提供は重要である。主催者は、ただ分配されてうれしいものから、やや驚かせすぎてでも、おもしろがってくれそうなものを苦労して準備することがある。

次は、主催者が「驚かせ喜ばせよう」と用意する食物に関して、少しやりすぎてしまった例である。

［事例 12］イアソア村の若者がつくったごちそう（2008 年 4 月 28 日）

［事例 6］で紹介したとおり、このごろはイアソア村では教会工事の作業が連日おこなわれていた。この日も、ナキロア村から A3 が来て、イアソア村の男性たちに指示をしながら作業を進めていた。女性たちはトタン屋根の仮設の教会に集まって、ココヤシの葉のマットを編んでいた。

両方の作業を見ていた筆者に、N2（20 代）と S1（20 代）の 2 人から今から食事の準備をするから一緒にやろうと声がかかった。今日は 2 人がみんなにふるまう料理を担当しており、石焼き調理をおこなうという。材料を見に来いというので呼ぶ方に行くと、石の上に 8 匹のオオコウモリが転がっていた。それまで子どもが遊びで獲って間食として食べているのは見たことがあったが、このようにまとまった量を獲っているのは初めて見た。コウモリは、2 人が昨夜パチンコ猟で獲ってきたものだ。コウモリ猟は月明かりのある夜に出かける。猟に使用するパチンコ（*maka*）は Y 字型の木とゴムでつくった手製のものである。弾（*vatu maka*）には、フシアイという海岸で拾う直径約 3 センチメートルの球状の石を用いる。子どもも大人も男性は島を歩くときに、獲物を見たらいつでも撃てるようにパチンコを首にかけていることが多い。獲物は小鳥やコウモリのほか、野生化したニワトリも撃つ。N2 と S1 はコウモリの皮をきれいに剥ぎ、タライに入れた水で洗った。2 人は皮を剥ぎながら「乾季で寒い今ごろのコウモリ（*peka*）は、脂肪がたくさんついているからうまいはずだ」という。確かに今まで見たコウモリのなかでは大きく、比較的肉がたくさんついている。コウモリを解体しながら、ふつうは捨ててし

まう羽の部分（見た目は黒いビニルのようである）を残している［写真 20］。どうするのかと尋ねると、「新しいスタイルを試すため」という。コウモリの肉と、タロイモとバナナの皮をむき拳ぐらいの大きさに乱切りしたものを、包み焼き用の葉に置き、ココナツミルクを回しかけた[17]。臭み消しということで、ネギも多めに入れた。最後に、とっておいたコウモリの羽をデコレーションするように置いた。これらを全て葉で包み、石焼き調理した。3 時間たったら完成であると、2 人とも満足げである。石焼き調理場からはココナツミルクの焼けるよい匂いがしてきた。

N2 と S1 は 3 時間後に取り出して、作業をしていたみんなが休む場所に料理を運んで行った。包んでいた葉を取り除いて出てきた黒いものに、みんな眉をひそめる。「なにこれ？」と尋ねる人に 2 人は「ペカ（コウモリ）だよ」と得意げに答えた。「えー、ペカを石焼き調理したの！」と、あきれる人が多い。辺りには、できたての料理のよい匂いが漂っているが、結局 3 分の 1 程の人は、「あまり好きじゃないから」といって手を出さなかった。現場監督の A3 も断っていた。

実際にコウモリの肉の味は、血合いの多いニワトリの肉といった感じで特別臭みが強いわけではないが、日常的に魚を好んで食べるフツナ島の人は、獣肉自体を苦手とする人が少なくない。とくにコウモリは好き嫌いがわかれるようだ。しかし、料理をつくった 2 人は食べない人がいるのは想定内で、むしろあきれたり驚いたりする反応がもらえて満足な様子であった。ちなみに、村の女性たちが「ふつう」の炊き出しをしていたので、A3 をはじめコウモリが苦手な人たちはそちらをもらって帰った。

ここまで紹介した事例では、共同作業の主催者は、参加者がよろこぶような食事を用意していることがわかったが、［事例 12］では作業参加者を「驚かせて喜ばせる」だけではなく「驚かせてあきれさせる」という食事を演出していた。N2 と S1 は、参加者たちの驚く様子を想像して調理作業をおこなっていた。共同作業の返礼として主催者は食事を用意するが、できるかぎり、参加者がよろこぶものや楽しめて話題になるようなものを提供できるように工夫していることがわかる。主催者は共同作業の日そのものが楽しいと思われるようにしようと努力している。

共同作業をおこなう際に提供する食事の内容や、いつ出すかといったタイミングなどを

[17] 肉や魚、バナナやイモ類など、さまざまな食材を乱切りにし、ココナツミルクをかけて葉で包み焼く調理法はプニア（*punia*）という。ブニア（*bunia*）はビスラマ語でも同じ調理法を指す。バヌアツで一般的な伝統料理とされている。

主催者が入念に組み立てているのに対して、参加者の方は身体ひとつとナイフのみを持って行けばよいという気軽さがある。参加者はその日作業をおこないながら、参加者同士でおしゃべりをして過ごすことができる。そのため共同作業には、日頃頻繁に顔を合わせる近しい人だけでなく、共同作業の機会によって遠くの人とも場を共有し親交を深めるという効果があるといえる。作業に参加すると自動的に食事がついてくる。作業によって身体を共に動かす時間を共有することと、食物を分配し共食するということ、ふたつの時間の共有が共同作業にはある。そのような点で共同作業は、作業と呼ばれながらも、仲間と集落を離れて過ごし食事を共にするピクニック（遊び）と同じ形態であるといえる。

３－２－３．ピクニック―遊びと分配について

これまで事例でみてきた共同作業の分配の特徴は、島でおこなわれているピクニック（遊び）の場における分配でも同様にみられる。誘い合って出かけるということ、集落から離れた場所で、その場にいる人全員で食物を分けるという共通点がある。両者は「作業」か「遊び」かという点で目的が違うのだが、これまでの事例からは共同作業の主催者は食物の分配を介した楽しみの演出に工夫をしており、共同作業は限りなく遊びに近いものになっていた。共同作業とピクニックを分ける境界線ははっきりとしていない。以下の共同作業の事例は、日頃は立ち入らない土地で 1 日を過ごし、その場で収穫したものを分け合って食べるという点では、ピクニックともいえる事例である。

［事例 13］屋根葺き替えのための作業（2008 年 4 月 11 日、16 日）

フツナ島の家屋の屋根はココヤシの葉、サトウキビの葉、パンダナスの葉のいずれかから 1 種類以上を使用してつくられる。これらは約 5～10 年おきに葺き替えなければならない。葺き替えには大量の葉を集めなければならない。

11 日、9 時にナキロア村を出発してタロマラ村に行き、タロマラ村を通り抜けて海岸の方に行くと目的地であるタムタウトに着く。タムタウトはヘラルドベイを構成する岬の土地で、C1 の一族が代々継承する土地である[18]。この日の作業は C1 の呼びかけによるもので、屋根を葺く材料としてココヤシの葉を集めることだった。参加者は教会グループ（AOG と NTM）と血縁の人たちが集まっていた。ナキロア村からは、主催者の C1、

[18] タムタウトは非常に力の強い精霊のいる土地であるといわれる。フツナ島では岬は精霊の住処とされてきた。現在でもタムタウトは無人である。岬にはさまざまな呪術的な意味を持つ石や穴などが隠されているという。

Cc、C5、A3、A6、Ae、Ac、Ec、B1、Bb、Be、モウガ村からは R1、Ra、R4、イシア村からは Cg、Ch が来た。筆者を含めて全員で 17 名（男性 7 名、女性 10 名）であった。これに未就学の子ども 2 名がいた。

10 時 30 分から作業が始まる。タムタウトはココヤシの林になっていた。男性たちは歩き回って、乾燥して茶色になっているココヤシの葉を集め、女性たちはナイフをつかって太い軸から葉だけを落とす。葉が両手で抱えるほど集まると、パンダナスの根を割いてつくったロープで束ねる。これを 16 時までつくり続けた。途中、昼食としてココヤシの実のスポンジ状の胚乳（*nisomo*）を殻ごと熾火に置いて火を通して食べる。大人はこのニソモを 5 個以上食べる。食べ終わるとまた作業をおこなう。雨のあとで蚊が多いため、落ち葉を集め火をつけて煙を焚きながら作業に取り組んでいた。

16 時ごろ、つくった葉の束をすべてタムタウトの海岸に運び始める。海岸に出るとヘラルドベイを挟んで対岸にはナキロア村の浜、テアナ（*Teana*）が見える。テアナから船外機付きボートがこちらに向かって来た[19]。16 時 15 分、A3 と A6 がボートを操縦してタムタウトに着いた。みなで海岸から葉の束をボートに投げて積む。最後に、ナキロア村の人たちは海に飛び込んでボートに乗る。筆者も海に飛び込みボートに乗った。ボートはナキロア村に向けて出発した。

16 日の 10 時ごろから、ナキロア村の C1 の家にて、11 日の作業で集めた葉を材料に、屋根をつくる（フツナ語では、屋根を編むと表現する）作業をおこなった。参加者は 11 日と同様に教会メンバーが多いが、今回はみな女性であった。イシア村から Ta（70 代）、Ob（30 代）、モウガ村から Ra、タロマラ村から Ca（70 代）、ナキロア村から Ac、Bb、Eb、Aa、Ae、Cc、主催者の C1 と筆者を含めて 12 名が参加した。C1 の妻 Cb は、みなに振る舞うための昼食の準備をおこなっていた。昼食は 14 時ごろに出された。前日の夜間に C1 がカヌーを出して釣り漁で獲ったハタ類を香りのよいココフェ（*kokofe*）と呼ばれる葉で巻いてスープにしたもの、炊いた米、キャッサバをチマキ状に茹でたナトゥパが出された。米は 1 食分以上によそわれていたので、各自余ったものはオオハマボウの大きな葉（*rou fau*）[20]で包みなおして家に持って帰った。食事を終えて作業は解散となった。

---

[19] A3 らが操縦してきたこのボートは、チーフ委員会所有のボートである。個人的な依頼は燃料代を払ってつかうことができる。

[20] オオハマボウの葉は両掌ほどの大きさある。島では、“布巾”のように生活のあらゆる場面でつかわれる。そのため木は台所の近くや集落内にある。

C1 の屋根づくり作業は、2 日にわたっておこなわれた。1 日目は、日頃は人が立ち入らない岬の土地、タムタウトへ行きほぼ一日中そこで過ごした。ココヤシの葉を取るという目的があり、確かにみなよく働くものの、同じ教会のメンバー同士で他の人の目を気にすることなくおしゃべりを楽しみながら、落ちているココヤシの実を飲んだり食べたりした。この様子はピクニックとよく似ている。この場の雰囲気は、前日から浜に泊まりに行き、翌日カニを食べ、1 日中パンダナスの葉を取った［事例 11］ときと同じものであった。日頃生活している集落を離れて、気の合った仲間と誘い合って出かけることは共同作業ならではの時間の過ごし方である。

ピクニックでは作業をおこなうことが目的ではなく、釣りをして魚を獲ったり畑で収穫したものを焚火で調理して食べたりすることを目的とする。釣った魚や収穫したバナナなどは、一緒にピクニックに来たメンバーで等分に分配して食べて帰る［写真 21］。ピクニックは日帰りのときや、1 泊するときがある。ピクニックへは同性の友人と出かけるか、家族で行くことが多い。

ピクニックとして浜に出かける場合、ナキロア村の人たちとはチナロアの浜に行き、イパウ村の人たちとはイラロ（*Iraro*）やシノウ（*Sinou*）といった浜に出かける。人びとが泊りがけで好んででかけるそのような海岸には、水場が比較的近くにあり雨宿りできる場所がある。ピクニックでも共同作業と同様に、食事のときに分配がおこなわれる。ココヤシの葉で編んだマットを敷き、釣った魚やイモ類を参加者全員で山をつくって均等に分けるのである。

［事例 14］チナロアへピクニックに行く（2007 年 10 月 11 日）

7 時、ナキロア村の Ac、妹の Ag（17 歳）、姪の Ah（5 歳）Ec、Be とでチナロアにピクニックに出かける。メンバーはすべて女性である。Ah 以外は、みな各自が竹でつくった手製の釣竿を準備して持って行く。筆者にも Ac が 1 本用意してくれた。Ac はチナロアでは釣りをして楽しむのだと説明する。

浜に到着してすぐに、Ag や Ec は釣竿を持って海に向かっていく。ふたりはさっそく釣りを始めている。餌は昨夜捕まえておいたオカヤドカリをつかう。Ac と Be は、海と反対のブッシュの方に入って行った。両手をつかわないと登れないほどの急斜面を登る。しばらく行くと、ナパニシラとフシトンガという 2 つの品種のバナナの実があるのを見

つけそれを取った。聞くとそこは Ac の畑で、「チナロアから重たいバナナを家まで持って帰るのは大変だから、ここで食べた方がいいのよ」という。確かに、5 段程に房が付いたバナナの軸は長さが約 1 メートルあり、担ぐと 10 キログラムはある。

バナナを担いで浜に戻り、Ac らは焚火をおこしバナナを皮ごと焼く。Ac がココヤシの葉でマットを編み、その上に焼けたバナナを皮から取り出し並べていく。Ag や Ec が釣った魚を、Ah も手伝って鱗や内臓を取る。Ag たちは釣りをすると同時に、サザエも獲ってきた。Be がそれを手際よく焼く。すべての食材が調理できると、Ac が 6 等分の山にしてココヤシの葉のマットの上に並べる。5 歳の Ag も一人前である。食物を分け終わると、Ac が短いお祈りを唱え、それぞれ自分の分をもらって食べ始めた。昼食後、みな釣りを楽しみ、家に帰りついたのは 18 時であった。

ピクニックは島の人にとっての大きな娯楽である。都会で暮らす人と違い、島の人がピクニックですることと日常生活ですることは大きく異なるわけではない。つまり「自分で食材を集め、火をおこして調理をする」という点で日常とピクニックは同じである。しかし、ピクニックでは、村を離れてその場にいる人だけで獲ったものを分け合うということに解放感がある。人びとはそこに楽しみを感じているといえる。また、Ac がいうように、しばしば食物を担いで村まで持って帰るよりは、自分たちがその場に行って食べる方が楽である、というのもピクニックの機能的な利点である。

３－２－４．共同作業における分配の小括

共同作業における分配は、作業をする人に対して主催者が食物を提供することによって互酬性が成り立っている。この互酬性は、共同作業をおこない共食を終えて即時的に成り立つ。一方、共同作業に参加し合うこと自体は長い期間での互酬性を成立させている。他者のために時間をつかうという交換を成り立たせているといえる。本節の最初に述べたように、島で頻繁に共同作業がおこなわれているということは、島の人たちは相互に依存する関係の上に生活を成り立たせているということである。他者の共同作業に参加するという行動選択自体が、翻って自分の生活に他者が関わってもらうための信頼と結びついている。共同作業を呼びかける相手が血縁（親戚）だけに偏らず、地縁や教会仲間などから積極的に選んでいるという点でも、共同作業とそれにともなう分配自体が、その人の生活を安定させる人間関係の確認となっているからだと考えられる。

共同作業における分配も、饗宴における分配と同じく、主催者が用意した食事は全て一度みなの前に並べられる。それをその場にいる参加者の人数で等分に山をつくって分ける。参加者は［事例 11］や［事例 13］のように老若男女おり、各自の仕事量が同等になることは当然なく、食事のときには一人一山として等分に分配される。これは集まった参加者たちが時間を共有したことを食物分配であらわしているようだ。分配された食事を受け取るときには、自分は作業をしたのだから当然食事をもらう権利があるという態度はとらず、みなうやうやしく受け取っていた。

一方、主催者の方も、食事を与えるのだから作業をしてもらうのは当然である、という態度はとらない。そのための工夫として、相手がよろこびそうなもの、おもしろがりそうなもの、驚きそうなものなど、特別な反応を示すような食物をわざわざ用意する。たとえば、おもしろさを演出する夜行性のカニや、コウモリの石焼き調理、インスタントの赤いジュースなどが挙げられる。だれもがではなく、あなたがよろこびそうなものを用意した、という意図が表現されている。主催者は参加者との間に一期一会の演出をおこなうことによって、作業への返礼としての食物から、できるかぎり報奨性を取り除こうとしていると考えられる。一方が一方へ報酬を与えるという立場は、他方に対して強制力や権威を持つことになる。主催者のさまざまな演出はその立場になることを避けるためだと考える。それゆえ、演出はピクニック＝遊びのような楽しい状態をつくることを志向しているのである。

３－３．生業活動に関わる分配

本節は、分配の場をめぐる最後の節であり、島の人たちが生業活動によって得る食物を日常生活においてどのように分配しているかを紹介する。フツナ島では、男性がアウトリガーカヌーか船外機付きボートでリーフの外に行き大型回遊魚を狙う漁、ラマガ漁をおこなう。とくにこの漁で得られるマグロ、サワラ、カマス類は「男の魚」と呼ばれ、他の人への分配の対象となる［竹川　2008］。そのほか、夜間の漁で得られるトビウオ、昼間の釣り漁やモリ突き漁で得られる各種のリーフフィッシュなど、漁撈の腕のよい男性はたくさんの魚を獲り、それをほかの人に分ける。「男の魚」とよばれる、伝統的に分配方法が決まっているものもあるが、基本的には「見られたら与える」ということがおこなわれている。魚を持っているところを見られたら、見た人に与えてしまう。また、与えるときに男性はそのことを誇示しないようにするという特徴があり、与える際に様々な工夫をおこなって

いる。

生業に関わる分配には伝統的な禁忌にもとづいた規範もあるが、実際には状況に合わせて禁忌や規範に変更をつけ加えていることがみられた。なにを基準にそのような変更を可能としているのか、島における鮮魚の売買をめぐる事例を通して分析する。

また、子どもと若者の分配の事例から、食物を介した相互行為によるソーシャルスキルの獲得との関係についてみていく。島の子どもたちは、山で木登りをして果物やナッツ類を採ったり、海に行ってサンゴ礁の上を歩きサザエを獲ったり潜水して魚を獲ったりして遊ぶ。そのようにして自分たちで得た食物は間食として仲間と食べるが、大人たちに気前よくあげるという場面もよく見られた。一方、10～20 代の若者たちは隠れて浜で獲った魚を食べてしまったことを、大人の女性たちから揶揄されていた。身近な大人の誘いにのって子どもが食物を他者に渡すことと若者が大人の誘いを断って自分たちだけで獲物を食べてしまうこと、大人が獲物を他者に積極的に与えることの関係を考えたい。

まず、伝統的な禁忌がある大型回遊魚の分配について事例をみてみる。

３－３－１．誇示を避ける獲物の分配

ナキロア村の男性 B1 は、優れた漁撈の技術を持つと語られる。そのため B1 は魚を分配する機会が比較的多い。B1 は専ら一人用の小型カヌーに乗り釣り漁に出かける。

［事例 15］ラマガ漁で獲った大型回遊魚を分ける（2007 年 11 月 5 日）

朝 6 時、昨夜から朝方にかけてまでカヌーで沖に出ていた B1 が帰ってきた。6 キログラム程のマグロ（*uorukago*）を 1 人で釣ったという。トビウオを餌に大型回遊魚を狙うラマガ漁で獲る魚には禁忌が多い。浜で内臓を抜いたり、地面に直接置いたりしてはならないため、B1 はマグロをロープで吊るして肩に担ぎ、村に持って帰ってきた。

妻 Bb と、Ac が知らせを聞いてナイフを持って来た。禁忌ではラマガ漁の魚は女性しか解体できないとされる。B1 は石焼き調理をするために、薪を集め石を焼き始めた。6 時 54 分、Bb と Ac の 2 人によって解体が始まる。まずハラミを切り取り、内臓を抜く。身に切れ目を入れ、リアイ（*liai*）と呼ばれるバショウに似た葉でマグロを 2～3 重に包む。肉から出る余分な脂を葉に吸い取らせ、肉をおいしくするため、包み込むときにナマシ（*namasi*）とよばれる食用の葉をマグロのまわりに詰める。最後にココヤシの葉でカゴを編む要領でマグロを包んだら完成である。見た目はマグロのミイラのようである。

これはフツナ島の伝統的な調理方法で、他の島では見られない独特なものである。

7 時 33 分、完成したマグロの包みを焼いた石の上に置き、包みの上にも焼いた石を乗せて全体を覆う。7 時 52 分には石を乗せ終わり、そのまま置いておく。

17 時 35 分、包みを取り出す。朝と同様、Bb と Ac、B1 で作業をおこなう。マグロはおいしそうに火が通っている。切れ目にそって肉を骨から外すと、ひとつの肉の塊は大人の拳の程の大きさになる。これを、オオハマボウの葉をつかい、ひとつずつ包み紐でしばる。作業をしていると、ナキロア村の子どもたちが集まってきて、崩れた身の部分や肉がすこし付いた骨の部分などを Bb や Ac からもらって食べる。

17 時 53 分、全ての肉を葉で包み終わると、B1 は地面に敷いたマットの上でそれを分け始めた。包みは全部で約 20 個ある。B1 は、ラマガ漁の禁忌に従って、ナキロア村の女性の数で分けるという［写真 22］。「Ea、Da、Bb、Ba、Ac、Ae、Aa、Be、筆者…」と B1 は女性たちの名前を唱えながら、分配の山をつくる。そのうち「Bb と Ba」「Ae と Aa」「Ac と筆者」は同じ家として、2 人でひとつの山となる。その 3 つの山と、Ea、Da、Be の山がそれぞれひとつずつあり、合計で 6 つの山がつくられた。他の村に滞在するため一家でナキロア村を離れていた、C 家（Ca と Cb）、DⅡ家（De）、F 家（Fa）の 4 人は勘定されなかった。塊のひとつひとつは量が不揃いなために、山の大きさができるだけ同じになるよう、B1 は包みをあちらこちらに動かしながら均等にし、6 つの同じ山をつくった。

しかし、完成したと思ったところに、イアソア村の Pb（14 歳）が学校帰りでナキロア村を通りかかり、ちょうど B1 が分配をしている場所の前を通る形となった。急いで通り過ぎようとする Pb に、B1 は「待ちなさい」といって、つくったばかりの山を全て崩して、7 つの山につくり替えた。そして「Pa の分」といって、分けなおした山から、一山分の包みを渡した。Pa は Pb が一緒に住む彼女の祖母の名前である。Pb は「ありがとう」といってイアソア村の方に帰った。

わざわざ最初から山をつくりなおす B1 の行動に筆者が感心していると、「見た人には、あげるものだ」と B1 がいう。そのあと、その場にいたナキロア村の女性たちは包みを受けとった。その場にいなかった女性の分は、B1 が自分の子どもたちに届けさせた。マグロはその日の夕食と翌日の朝食に熾火で焼いて食べた。

B1 が獲ってきたマグロは「男の魚」と呼ばれるラマガ漁による特別な魚で、島では取り

扱いに関していろいろな禁忌がある。女性しか解体できず、また女性しか口にしてはならないといわれている。キリスト教が島に入って以来、それらの禁忌は必ずしも厳密に守られているわけではないと島の人は説明する。たとえば、クリスチャンの信仰心や神への祈りがあれば昔と違い、禁忌を破っても精霊は神を恐れるため悪さをしないといわれる。しかし、事例のとおり実践されている禁忌は多く見られる。身体の不調や病気のときには、まず精霊の悪さが疑われることから、島の人にとって精霊とキリスト教の神の力は緊張関係にある。

B1 は村の女性の頭数でマグロの肉を分配している。石焼き調理を終え、分配しやすいようにマグロの肉は一塊ずつ葉に包まれた。分配の山が均等になるように、B1 は 20 分程の時間をかけてていねいに並べた。ようやく B1 が納得する均等な山が 6 つできあがったところに、隣村の Pb が通りかかった。Pb が分配現場を見てしまったために、B1 は、ていねいに分けた山を崩し、7 つに分けて山をつくり直し始めた。B1 が山をつくり直したのは、Pb に「見られた」からである。Pb の方も、自分が見てしまったために B1 が分配しなおすことをすぐに察知して、急いで去ろうとしていた。そのことに B1 も気づいて押しとどめた。B1 は彼女の祖母 Pa の分として、山をひとつ足して分配しなおした。B1 は禁忌による分配のやりかた（村の女性の数で分ける）に従いながらも、状況に合わせて変更して対応している。見た人に分けないということは、よくないという判断である。

B1 は石焼き調理中や分配中、自分が魚を獲って分配することをできるだけ誇示しないようにふるまっていた。その場にいなかった女性の分は、自分で届けず自分の子どもたちに行かせていた。これは、他の魚を分けるときにも共通する特徴である。

［事例 16］トビウオを吊るしてくれる（2007 年 11 月 3 日）

朝、ナキロア村の Aa の台所の近くのパンダナスの木に、10 匹のトビウオの束と体長約 50 センチメートルのギンガメアジが吊るしてあった［写真 23］。昨夜トビウオ漁に出ていた B1 が多くの魚を獲ったので、朝方に吊るしてくれたのだと Ac から聞いた。トビウオの束は A3 の台所にも同様に届けられていた。

B1 は直接魚をくれる場合もあるが、このように黙って置いていったり、子どもに届けさせたりすることがよくある。直接手渡すときは、受け手が「ありがとう」というと、与え手はたいてい少しきまりが悪そうにする。吊るして置いていったり、子どもに届けさせた

りするのは、直接顔を合わせないためのようである。

魚は大漁のときには、このように隣近所に分配される。ときに通りすがりの人にも分けられる。しかし、魚を獲ってきた男性たちは与えることを誇示しないよう、子どもに届けさせたり、声をかけずに吊るして置いていったりする。また、分配する予定がなかったとしても、人に獲物を持っているところを見られたときは、気前よく与える。見られたのに与えないということは、島の生活においてほとんどない。これは、男性に限らず、女性も同じことをおこなっている。他者に見せているものは与えることを前提としている。与える予定でないものは、他者の目からは隠しておく。

［事例 17］ナッツを隠す（2007 年 9 月 27 日）

ナキロア村にて、Ac に誘われてガイ（*gai*）と呼ばれるネイティブアーモンド［表 2］をとりに行くことにした。Ac は「そろそろ、今季節の最後の実りのガイになる」という。Ac の姪 Ah も一緒に行く。8 時 45 分に出発し、9 時 20 分に目的のガイの木の下に着いた。Ac が木に登って実を下に落とすので、筆者と Ah に拾うようにいう。9 時 50 分、Ac が木から降りてくる。落とした実はほとんど拾った。Ah が拳大の石を拾ってきてガイの実を叩き、固い殻の中にはいっている種子の部分を取り出して食べ始める。好きなだけ食べてから出発すると Ac がいう。ガイの種子は油脂分に富んでいて、10 個も食べると満腹になってくる。Ah はスカートのポケットに数個ずつ実を入れた。

10 時にガイを詰めた袋を持って移動を始める。袋の 3 分の 1 程度ガイが入っている。途中、Ac の畑に寄ってキャッサバを 5 本ほど掘り、ガイが入っている袋に入れた。

帰り道、畑仕事に来ている 3 組ほどの人たちに順次出くわしたが、「どこの畑に行ったの？」とたずねられて、Ac は「キャッサバ」とだけ答える。彼らと別れたあと、「ガイをとったなんていったら、ちょうだいっていわれるから」と筆者に Ac は笑っていう。後から袋に入れたキャッサバはカモフラージュらしい。Ac はガイを村に持って帰ってから、台所の外に無造作に置いていた。そのあと、Ac の妹たち、日頃遊びに来る女性や子どもたちが袋に入っているガイを適当に食べていく。Ac は道でガイを隠していたが、別にひとりで食べたいわけではないのだ。

自分の家に食物を持って帰りたいが、それまでの間に他の人に見られた場合、その人に気前よく与えなければならない、というのが、持っている人の葛藤である。筆者も島にい

る間、よくこれと似た経験をした。たとえば、隣の村に用事で行ったとき、マンゴーの実を 5 個ほどもらった。その年はマンゴーが不作で、とくに海に近いナキロア村にはほとんどマンゴーが実らなかった。筆者はできれば全部ナキロア村の家に持って帰り、家の人を喜ばせたかったので、持っていたバスケットとポケットになんとか入れて外からは見えないようにした。おそらく道で会う人は、筆者が手にマンゴーを持っていても「ちょうだい」とはいわないだろうが、「与えられないものを見せびらかすのはよくない」という気持ちが、Ac たちと生活しているうちに身についていた。自分の村の家族のために食物を持って帰りたいという気持ちは正しい理由であるし、フツナ島の人もそう思うことに共感する。しかしながら、見られた人（見せてしまった相手）にあげなければならない、というのは、そのような理由とは関係ない。会ってしまった「いまここ」では、「そうしないと落ち着かない」というものである。Ac はそのことを指して「見られることは、フォース（*fos（Bis.)*）である」と説明していた。フォースは相手にはたらく強制力を指す言葉である。だからこそ人びとは見られた限りは、惜しむ姿を見せることはなく、気前よく差し出している。

［事例 18］救援物資の残りを分ける（2008 年 3 月 14 日）

フツナ島は 2008 年 1 月、10 年に 1 度といわれる規模の大型サイクロン[21]に襲われ、島の斜面のほとんどの作物が塩害にあった。そこで政府が食糧をはじめとする救援物資を積んだ貨物船を出した。それは 3 月 4 日にフツナ島に着き、米やバナナ、イモ類を届けた。3 月 7 日にはそれらの救援物資を浜で分配した。30 キログラム入りの米袋は全部で 3000 袋あったという。分配は島にいるすべての大人に対しておこなわれた。ファミリー（子どもがいる）には 15 袋、ウィト（配偶者と死別した人）は 7 袋、ユース（未婚のもの）は 3 袋であった。筆者も 3 袋の分配を受けた。分配後、浜からすべての米袋を集落の位置まで運ぶのは大変なので、みな米袋に油性マジックで名前を記し、そのまま浜に置いていた。3 月 14 日の朝、イアソア村の大人たちは米の袋を肩に担いで村に運んだ。米の運搬はみなで協力しておこなわれた。

夕方、全ての米袋が浜からなくなったあと、Ac、イアソア村の女性 Na（40 代）、男性 S2（20 代）が浜を散策した。浜には、腐ったバナナの酸っぱい臭いが満ちており、足元には黒くなったバナナが落ちている。米とともに送られたバナナやタロイモは、島に着

[21] 2008 年 1 月にフツナ島を襲ったサイクロンは気象台により Gene という名前が付けられた。Gene による家屋倒壊や農作物被害が首都にも伝わり、首都のフツナ島出身者でつくるコミュニティはチャリティを主催し寄付金を集めるなどした。3 月には政府による救援物資を積んだ船がフツナ島に向かった。

いてすぐに分配されたり調理されたりしたものの、運ぶときにこぼれ落ちた分がそのまま残っていたからだった。Ac たちの目当ては、その腐ったバナナの中から、フツナ語ではナレアシ（*nareaji*）と呼ばれる食用のクワズイモと、イフィ（*ifi*）と呼ばれるタイヘイヨウクルミを探して拾うことだった［表 3］。バナナは日持ちがしないため腐っていたが、ナレアシやイフィは食べられる。タロイモは到着したときにすべて回収されているが、大人の拳ほどの大きさのナレアシやイフィはところどころ落ちたままになっていた。

30 分ほど浜を探し歩いて、Ac と Na はナレアシを、S2 は 1 人でイフィを集めた。Ac と Na はそのナレアシを半分ずつに分けた。そこで、Na が S2 に「（筆者に）イフィを分けてあげたら」といった。S2 の手元にイフィは 5 個しかなく、筆者はもらうのを気の毒に思ったが、それを察してか Na は「（筆者に）イフィを茹でてもらって、それを半分もらえばいいんじゃない」と提案した。イフィは茹でるのに 1 時間以上の時間がかかるので、その労力と食材の提供で対等ではないかという Na の提案だった。S2 はわかったといって、筆者に全てのイフィを持たせた。そのあと、ナキロア村に戻って筆者は Ac と共にイフィを茹でて、2 人でひとつずつ食べ、残りをとっておいたが、しばらくして「たぶん S2 は取りには来ないから全部食べていいのよ」と Ac はいった。残りのイフィは翌朝 Ac の妹 Ag と分けて食べた。

Na は、S2 がイフィを筆者に与える理由として「これは交換になる」と述べた。実際には S2 は惜しむ様子を見せず、またあとで約束の半分を取りに来ることもなく、筆者に自分が持っていたイフィを全部与えることになった。

見られることが与えるフォース（強制力）になる、と筆者に教えてくれた Ac は、島では食事時にどうふるまうべきかをについて、筆者が島に来て間もないころは、「他の家で出された食事は、積極的に食べるように。断るのはとても失礼だから」と教えたが、半年以上たってきたあるとき、「他の家の台所をむやみに見ないように、とくに食事どきにはうろうろしないように」といった。他の家で出されるものを当然のように食べることはよくないと教えるのである。筆者の島での生活が長くなると、社会関係の変化にともなって、Ac が語る規範も変わってきた。最初は、島の人たちにとって筆者はよそものであったからこそ、共食の誘いを積極的に受けて答えることが良好な関係をつくりたいという意味をあらわすものであった。しかし、次第に滞在が長くなり慣れてくると、ナキロア村の Ac の家族の一員として扱われるようになり、一人前の大人としては「見られることのフォース」を理解

してふるまうべきであると教えられたのである。

以上のように、人びとは生活のなかで、食物を隠したり隠れて食べたりすることがあるものの、他者に食物を見られた場合は惜しむ様子を見せずに、気前よく差し出していた。

次に、人びとが食物を与えるとき「気前よく」とはいかず、すこし腹を立てるという場面を紹介する。人は食物を贈与するときに惜しむ姿は見せないが、食物に関して我欲がないわけではない。我欲があるからこそ、気前よく与えることに意味がある。互いに我欲があることを了解しているからこそ、積極的に与えることができる。

［事例 19］隣の奥さんからなにを食べているかたずねられる（2008 年 7 月 13 日）

筆者はイパウ村の G I 家に滞在していた。近所に住んでいる女性 Ua（40 代）に道で会った。Ua から「Ga はなにを料理してくれている？」「毎日、魚は食べている？」「G3 は昨日魚を獲ってきた？」と聞かれた。筆者は、Ga の料理はおいしい、G3 や G2 は魚をよく獲ってくる、昨日はそんなに獲れなかったらしい、と世間話をして別れた。家に帰り Ga に Ua の話をした。すると、Ga は「エーイ、Ua ったらそんなこと聞いたの。ファッション（*fason（Bis.)*、英語の fassion から取られたビスラマ語で、意味は行儀、性格をあらわす行動を指す）がよくないわね。そうやってきくのはよくないことよ」という。このように Ga は筆者に語りながら、台所に行って吊るしてあったココヤシの葉のバスケットの中から、その日の朝、炭火で焼いて葉で包み夕食用にとっておいた魚を 2 匹取り出してスープをつくり始めた。できあがったスープを Ga は鍋ごと Ua の家に持って行った。家に帰ってきた Ga は、Ua がくれたカモニという豆が入ったキャッサバ料理プリを持っていた。

Ga の息子たちは釣り漁が得意である。Ua は、昨夜に Ga の息子たちが海に行って魚を獲ったらしいという話をだれかから聞き、筆者に魚を食べたかどうか確認したのかもしれない。Ga にしてみると昨夜の息子たちの釣果はよくなく、人に分け与えるほどではないと判断していた。しかし筆者を介して、「魚があるのだったら欲しい」という Ua の要求が伝わったので、Ga は惜しんで魚をあげていないわけではないのに、と憤慨しつつ、なけなしの魚を料理して持って行ったのだった。

Ga は島の中でも気前が良いといわれる方である。彼女の台所は、イパウ村の入り口に位置するマラエに面しているので、村を出入りする多くの通行人に見られる。Ga はいつも家

族の必要分より多目の量を調理して、通る人に気軽に寄ってもらっている。イパウ村には空港があり、週に 1～2 回飛行機が発着するときには、他の村から人が集まってくる。飛行機が来るのを待っているため、昼食どきに自分の村に帰れない人に、Ga は食事をふるまうことが多い。

Ga の魚スープのお返しとして、Ua は手の込んだ料理である豆入りのキャッサバ料理プリを与えた。Ua はこのプリをつくったので、「魚が欲しい」という要求を、筆者を介して Ga に伝え、もし魚をもらえたらお返しにプリをあげようと考えたのかもしれない。

このように、直接魚を見ていなくとも、「私はあなたが魚を持っているということを知っているのよ」と相手に伝えることにより、魚を見たときと同じプレッシャーをかけることができる。しかし、Ga が少し憤慨しているように、魚があるという情報が間違っていた場合、「黙っていても魚をくれたかもしれないのに相手を信用していない」ということを Ua は示すことになってしまう。

次の事例は、「見られたら気前よく与える」ことと「見ていないところで勝手に持って行かれる」ことには大きな違いがあることを示す。

［事例 20］吊るしていた魚がなくなる（2007 年 12 月 10 日）

筆者がイパウ村の Ga の台所にいた時に、G3 が V1（10 代）に誘われて、モリを持って海に行くといったので、筆者もダイビング釣りをしようと思い同行した。V1 はクリスマス休暇でタナ島の中学校からフツナ島に帰省していた。夕方、カワハギや数種類のリーフフィッシュをおみやげに 3 人で台所に帰ってきた。G3 はそのなかから 2 匹のタカサゴを選んで台所の軒に吊るし、残りの魚は V1 が炭火で調理し始めた。G3 の兄 G2（30 代）の娘 Gc（3 歳）と Gd（1 歳）が作業をする V1 を見つけて家から出て近寄ってきたが、Ga は台所にいないようであった。筆者は濡れた服を着替えるためにその場を離れていた。

20 分程して再び台所に戻ると、G3 が怒って「魚を持っていたのはだれだ」と子どもたちに尋ねている。子どもたちは「なんか男の人（*tagata mo*）」と答える。「だれ？（*akai*）」と G3 が再び尋ねると、Gc が「……W1」と答えた。G3 が吊るしておいた魚を W1 が勝手に持って行ったようである。名前がわかった G3 はそれ以上子どもたちを問い詰めず、台所を出て行った。W1 は、イパウ村に住む 50 代の男性で、陽気なおしゃべり好きである。G 家の親戚ではないが、ぶらりと台所に寄って Ga とおしゃべりをしていくことがあ

る。しかし、Ga がいない間に魚を持って行ったことが G3 を怒らせたようであった。

Ga の台所は［事例 19］でも触れたとおり、日頃から来客が多い。W1 もいつものように遊びに寄っただけであったと思われるが、たまたま Ga が留守で子どもたちしかいなかった。吊るしていた魚は 2 匹だけで、特に大きなものではなかったので、もらってもかまわないと W1 は思ったのかもしれない。もし G3 が台所にいて W1 と遭遇していたら、G3 は惜しむ様子を見せず魚を渡したであろう。しかし、留守中に勝手に持って行かれるのは、とても腹が立つようであった。「見られたら与えなければならない」ことについては、他者への怒りはないが、「勝手に持って行った」ことは、怒りの対象になるのである。我欲を見せずあなたにあげるということと、私のものを無断で持って行ったことには大きな違いがある。

［事例 15］、［事例 16］からは生業で得た食物を持っている人はそれを他者に与えるときに誇示しないように気を配っていることがわかる。一方、与えられる人は、本人の意図に関わらず、相手が食物を所持しているところを見ることにより、相手に対し、与えなければならないという気持ちにさせる。［事例 15］では、通りすがりの少女が分配の場を見たために、分配を受けることになった。少女は魚をもらうことを意図しておらず、分配を受けることについて、バツが悪そうであった。［事例 17］では、収穫物を通りすがりの人に見られないように隠して畑から持って帰る事例を紹介した。見せるということは、相手に「欲しいという気持ち」をかきたてさせる。一方で見ることは、相手に対し「持っているものを与えなければならない」という強制力をはたらかせる。島の人たちは、むやみに見せないことによって相手を嫉妬させず、また見せた場合は、かきたててしまった欲しい気持ちが解消されるように、持っているものを与える。

［事例 18］では、ナレアシを Ac と分け合った Na が、同行していた筆者を気にして、S2 に筆者とイフィを分け合えばいいと提案した。Na は、筆者と Ac が同じ台所で食事をすることを知っていながらも、一緒に散策した筆者も収穫物を分け合うべきだと考え S2 に提案したようだ。［事例 19］では、Ua が Ga の家に魚があるかを筆者を介して確認し、それを知った Ga が Ua に魚を届けた。Ga はそもそも魚が少なかったから Ua の家に分けなかったのだが、Ua が魚が本当にないかを気にしていることを知り、気分を害しながらも Ua に魚を届けにいった。Ua は Ga のところに魚があるのを見たわけではないが、筆者を介して質問することにより、魚があるのならば欲しいという意図を Ga に伝えた。この事例でのプレッシャーは見ることによって生じる強制力と同様のはたらきがある。実際に Ga は家族

の食事として十分な量の魚を持っていなかったが、それをすべて Ua に与えた。所持している食物を、見られたり乞われたりすると、人びとは断れないことがうかがえる。

このように所持している方は、与えることを誇示しないように、相手に気をつかってふるまっているが、所持していない方は、相手に与えさせるという強制力を持っていることがわかる。しかし、［事例 20］のように所持しているものを無断で持って行かれることは、怒りの対象になる。

３－３－２．魚を売ること

［事例 15］では、B1 が獲ってきた魚を分配する場面を紹介した。B1 は伝統的な方法にしたがって魚を村の女性たちの数で分配していたが、途中で隣村の少女が通ったため、彼女の家の分も加えて分配しなおした。このように、島では語られる禁忌や規範はあるが、状況に合わせて変更されることがある。禁忌や規範を厳守するより、それを状況に合わせて然るべく変更していくことの方が、食物分配が表現する資源や時間の共有を実践する上で重要とされている。次に、獲った魚を個人的に売買するという禁忌をめぐる事例を紹介する。

島では男性が漁撈で得た魚に関しては分配するべきものであって、個人的に魚を売買して利益を得ることはよくないとされている。2007 年筆者の滞在中、トローリング漁で獲ったマグロやサワラなどの大型回遊魚を、隣のタナ島に販売目的で輸送している男性 X1（30 代）がいた。週 1～2 便フツナ島に訪れる飛行機は運航が安定しておらず、計画的に商品として鮮魚を他島に輸送するのは難しいが、X1 は利益を得ているようだた。当時島には 3 艇の船外機付きボートがあった。FFCA（フィッシャリー）のボート、FFCC（チーフ委員会）のボートの 2 艇は、島の人たちで共有するものであったが、残りの 1 艇は X1 個人が所有するものだった。X1 の親戚には首都で仕事を持つ者が多く、そこから得られる資金援助によって X1 は個人的にボートを所有していた。X1 からすれば、船外機付きボートを漁につかうには燃料代がかかるためタナ島への鮮魚販売はリスクも含めて引き受けているおり、安易に金儲けをしているつもりではないだろう。実際に X1 は親切でもの静かな人物である。しかしながら、鮮魚を島外に販売することについて、島の人からの評判がよくないことを本人ももわかっており、頼まれれば村の人はやチーフ委員会のために所有しているボートをつかうこともあった。

筆者は 2007 年から 2010 年にかけて、JICA 草の根協力支援の村落開発事業の現地調整

員として島に滞在していた。事業の内容は魚を伝統的な手法によって保存加工し、それを真空パックして首都で販売するというものであった。フツナ島のチーフ委員会の賛同を得てスタートした事業ではあったが、2007 年から島に滞在するうちに、島には「魚とは売るものではなく分け合うものだ」という規範を強く感じた。そのため事業によって魚を商品とすることは、島の人の規範からは逸脱することかもしれず、島の生活における相互扶助の象徴でもある伝統的な魚の分配システムを破壊してしまうかもしれないと危惧した。

しかし、年長者のチーフと話したり、島の人たちと意見を交換したりするなかで、必ずしも既存の規範を守ることが一番重要ではないことがわかってきた。つまり、状況によって規範が変更されることこそが、島の人たちが対等な状態をつくり、分配をおこなうということではないかと考えた。

事業のマネージメントについては、チーフ委員会の秘書を務めていた A3 と話し合って決めていた。A3 はこの事業が始まる以前、島を一周する歩道をつくる事業のマネージメントを務めており、その公平なマネージメントに対する島の人からの評価は高かった。A3 の意見は島の人たちの考え方を知る上で重要であった。A3 によると、X1 やフィッシャリーの鮮魚販売が島の人に批判されるのは、特定の人にしか利益を得る機会がないからであるという。船外機付きボートを使用し漁撈活動をおこなうには人手がいる。その仲間に入っているものは現金で利益を分けてもらえるが、入れてもらえないものには利益がない。機会（チャンス *chanis(Bis.)*）が均等ではない、ということが人びとの不評を買うのだと A3 は説明した。作業量はともかく、関わりたいという人が自由にアクセスできる状態が事業にとって重要なのだという。

事業ではまず男性から鮮魚を買い取る。そのあと、魚を解体、石焼き調理、葉で包みなおして何度か焼きしめ、真空パック機で包装する。包装後ラベルを貼り、飛行機で首都に出荷する。魚の解体から出荷までの作業は女性がおこなう。女性は村ごとに 1 グループとし、持ち回りで作業をおこなうことになった。どの人がどのくらい参加するかは、グループ内で調整してもらうことにした。A3 が管理、調節するのは、各村のグループが参加する割合を均等にすることであった。

女性グループの作業は均等に分けやすいが、問題なのは魚を獲る男性の方であった。通常ほとんどの男性たちはアウトリガーカヌーで漁をおこなっているが、大型回遊魚をねらう漁では、船外機付きボートでトローリング漁をする方が効率よく魚を獲ることができる。主に加工する対象は大型回遊魚であるため、大型回遊魚の買い取りを開始すると、ボート

を所持しているX1とフィッシャリーから買う量が多くなり、アウトリガーカヌーのみで漁をする多くの男性と差が生まれてしまう。そこで、A3は事業が扱う鮮魚の買い取りにリーフフィッシュを含めることを提案した。リーフフィッシュはアウトリガーカヌーでおこなう釣り漁で獲れる。事業の主な商品にするのは大型回遊魚だが、島内における買いとりにリーフフィッシュを含めることにより、多くの男性が事業に参加できるようにした。

事業では島内の 3 か所（イパウ村、イシア村、ナキロア村）に、ソーラーパネルの電力で稼働する冷凍庫を設置した（2010年7月24日設置完了）。そこが鮮魚保管の拠点となった。各保管場所にはその村から選出したマネージャーを置いて、魚を持ってきた村の男性たちから魚を買い取り、価格をつけて島内で販売した。

A3 の判断を信頼しているものの、「魚とは売るものではなくて、分け合うものだ」という規範を逸脱することは、従来分け合うものであった魚が現金と交換されるようになり、今までにはなかった不平等が生じてしまうのではないかと筆者は心配した。しかし、もともとフツナ島では学校の教員、空港・郵便の管理者、看護士（ディスペンサリー管理）などごく一部の有給者に入ってくる現金は、島外から来る輸入食品（米や缶詰類）や雑貨類の購入につかわれ、再び島外に出て行くだけであったが、魚の売買を介することによって島の他の人たちの間をフローするなら、その方がよいと人びとは納得したのである。「魚は売るものではなく、分け合うものだ」という規範は、そもそも「富は分け合うものである」ということを意味していた。わずかとはいえ、現在島の生活では現金がつかわれている。大きなものでは教育費や病気のときに島外に出る飛行機の運賃、小さなものでは生活雑貨などである。現金は島の人の間と、島と首都の間をフローしている。現金という富を結果的に分け合うことになるならば、魚は売ってもよいのである。分け合うためのシステム（規範）を状況に合わせて更新していくことが、島の文化（知恵）である。

平等主義や分かち合いの側面を強調すると、結局エンゲルスやブロックが指摘した「原始共産制」（エンゲルス）や「私的所有権が存在しない未開人」（ブロック）という、近代化以前の人たちという未開人像を描くことに加担しているように思われるかもしれない。しかし、筆者が本論文において考えたいことは、フツナ島の人たちが私たちと同じ身体的に限定された能力をつかいながらどのように多様なシステムを構築し、平等を志向する社会をつくっているかということである。

３－３－３．子ども―若者の分配

最後に、子どもと若者の分配に関する事例を紹介し、島の人が成長過程において日常生活からどのように食物分配と人間関係の構築を獲得するかを分析する。

島の子どもたちは、4～10 歳には異年齢集団をつくり集落とその周辺を遊んで回る。10 歳以上になると、男女共に大人の生業活動の手伝いが可能になる。そのころには子どもたちだけで山や畑に果物を探しに出かけたり、浜に釣りに出かけたりするようになる。とくに男の子は、手製のパチンコをいつも首に下げ、モリや釣り道具をつくることに余念がない。そして道具を持ち寄り仲間とともに山や海に出かけている。子どもたちは、このように自分たちで狩猟採集することを遊びとしており、それによって得られる食物を間食することで楽しんでいる。学校帰りの子どもたちはお腹がすいており、途中木に登ったり寄り道をしたりして間食になるものを手に入れ、それを齧りながら帰ってくる。子どもにとって間食は腹を満たすという目的で手に入れているようだが、筆者に遭遇すると持っているものを気前よくくれた。島で初めて食べる果物は、たいてい子どもたちがくれたものである。観察していると、他の大人たちも子どもたちから食物を分けてもらう機会は思っていたより多く、道でばったり会った子どもたちに大人が「ちょうだい」といって食物を要求することもある。

［事例 21］見せている果物はあげる（2010 年 7 月 13 日）

Ac と筆者はナキロア村を出てイパウ村を目指して歩いていた。イシア村を通るとき、Ya（16 歳）がやってきて一緒にイパウ村まで行くという。しばらく行くと、Ya は街道からそれたブッシュに入って行き、木に登り、タヴェラオ（*taverao*）という果物をとり始めた［表 2］。Ya はあっという間に 7 メートル程木を登った。タヴェラオの実は直径 3 センチメートルほどの球状で黄緑色をしており、小さなミカンのように見える。キンカンと同様に中は種があり、実を食べるというよりも、外皮を齧って食べる。皮の色が黄色になると熟して甘いとされるが、島の人はよく実が熟す前に食べる。甘くない果物の皮を食べるという点で、筆者はタヴェラオの魅力がわからないが、島の人はサトウキビや外皮の繊維に甘い果汁がある品種のココヤシなどの口に入れて噛み続ける食物が好きで、それらと同様に噛んで楽しむタヴェラオも、子ども大人を問わず好まれる。

Ya は 10 分程かけて木の上から実のついた枝を切って下に落とした。Ya は木から降りてきて、Ac、筆者と共に実を拾った。Ya は筆者たちにも実をたくさんとって食べるようにいい、持っていた透明のビニル袋に残りの実を全て入れた。

街道に戻って 3 人で実を食べながら再び歩き始めた。イパウ村に近づいてきたとき、道の前方から女性たちの話し声が聞こえてきた。遠くに街道の草取り作業をしているイパウ村の女性たちが 4〜5 人いるのがわかった。Ya は、慌てて持っていたビニル袋の中身を Ac や筆者が背負っていたバッグに入れた。それから残りの半分を自分が肩から下げていたパンダナス製のバスケット（伝統的な形のフツナ島のバスケットで、蓋はない）に詰めた。やがて、女性たちに出会い、そのうちの一人がタヴェラオを持っている Ya を見て、「木に登ったの？」「まだ持ってる？」と聞く。Ya がバスケットに手をつっこんで、女性たちにひとつかみずつの実を渡した。「じゃあね」と Ya が女性たちにいって、その場を離れた。しばらくしてから、Ya は Ac と筆者のバッグに入れた実を半分ずつバスケットに戻した。Ya は全てを戻さず「あとは食べて」という。「おばさんたちが、「もっとちょうだい！」っていったけど、「もうない！」っていったわ」と Ya は笑いながら話した。

Ya は、街道の向こうから人の声を聞き、慌ててタヴェラオの実を見えないように隠した。Ya の想像通り、街道で会った女性たちは、外側から見える Ya のタヴェラオを「ちょうだい」といって、ほとんどをもらっていった。Ya は女性たちの手を逃れたタヴェラオを Ac と筆者に分けた。Ya は女性たちの追及を筆者らと共にやり過ごしたことが楽しそうであった。しかし Ya は全部とられないように実を隠したものの、持っていた半分以上の実を結果的に女性たちに与えている。

筆者はこのときは「与える側」の Ya と一緒にいたが、Ac に同行した際に、Ac が道で遭遇した子どもからタヴェラオや熟れたバナナの実などを「ちょうだい」といってもらうのを見た。Ya と同様、与える側の子どもは、その場で嫌がったり惜しんだりしなかった。むしろ「ちょうだい」と大人がいってくるのを楽しんでいるようであった。

［事例 22］マンダリンオレンジ（2008 年 7 月 12 日）

イパウ村にいたとき、近所に住む少年 V2（10 歳）がやって来た。なにかを差し出すので手を出すとマンダリンオレンジをひとつくれた。フツナ島はこの年は大型サイクロンが来たため、例年であれば 5 月以降に収穫できるマンダリンオレンジが全滅していた。しかし子どもたちは、山の上の方を探して何個か見つけたようだ。V2 がくれたこのマンダリンオレンジは、筆者にとって島では初めて見るものであった。筆者が V2 に「ありが

とう」とお礼をいうと、さりげない様子でV2は去ろうとした。すると、そこにGaがやってきて「フンフン、マンダリンオレンジの匂いがする」とおもしろそうにいう。V2は笑いながら、ポケットにつっこんでいたマンダリンオレンジをGaに差し出した。Gaは「ありがとう！」とV2にお礼をいう。V2は走って仲間のところに戻って行った。

少年V2は、大人に大事なマンダリオレンジを奪われてくやしがる、というよりは、「ちょうだい」といわれたのが楽しそうであった。このやりとりからは、子どもたちは分配のやりとりは規範として教わるものではなく、相手とのコミュニケーションのひとつとして身に着けていくものだと推測できる。筆者は、V2からマンダリンオレンジをもらったように、小学生くらいの子どもたちから、間食としていろいろな食物をもらった。イシア村にある学校に通う子どもたちは、その道中に寄り道をして果物やナッツ類などを拾って食べながら帰ってくる。たくさんはとれないけどある時期にはそれなりに実るというような果物類、たとえばカフィカと呼ばれるマレーアップルや、マランブニと呼ばれるカスタードアップル、マスクルという人の頭ぐらいあるパッションフルーツなど、少し変わった果物を筆者は子どもたちからもらって食べた。子どもたちは大人よりも真剣に“甘味”を探してどこからかとってくる。

子どもしか獲らない食物もある。ポポトゥ（*popotu*）と呼ばれるスナホリガニで、これは、波打ち際の砂浜に潜っている体長 1 センチメートル程の小さな生きものである。子どもたちは、漁から帰ってきた大人から魚の内臓などをもらって、ポポトゥ獲りを楽しむ。内臓を砂浜に投げて置き、しばらく静かに待つとポポトゥがそれを食べようと砂から出て来る。わずか数ミリセンチメートルの頭が見えたら、すばやく手でそれを掴む。ポポトゥ獲りには「もぐら叩き」のような要領が必要なのである。子どもたちは獲ったポポトゥを空きビンなどに詰めて貯める。ある程度集まったら、ココヤシの葉の芯にひとつずつ刺して串をつくり、それを焚火で焼いて食べる。ポポトゥには肉がほとんどなく、子エビのような味である。島でポポトゥを獲っている大人は見たことがない。手間がかかる上に、食物としてはほとんど量がないからである。しかし、子どもたちにとってはポポトゥ獲りは遊びと間食を兼ねた楽しみである。筆者は間食として串に刺して焼いたポポトゥを子どもからもらった。いろいろな食物を見せにきてくれる子どもたちからは、自分たちが遊びで得たさまざまな食物を、大人も欲しがってくれれば、よりおもしろみを感じるという様子がうかがえた。子どもたちにとっても、食物はすでに社会性を帯びていることがわかる。

子どもたちは、分配に付随するコミュニケーション、つまり他者の欲求を推測し、それに応えることを遊びのように身につけている。

ところが、思春期の若者になると、他者の欲求にあえて応えない態度がとられる。子どもたちが大人の誘いにおもしろがって積極的にのるのとは反対に、大人の誘いにはのらないという態度をあからさまに示している。

［事例 23］モウガ村の若者たちのうわさ

モウガ村の R4、ナキロア村の C2、イアソア村の B3 はよく一緒に行動している。3 人は 20 歳前後の若者たちである。R4 は結婚こそしていないが、2 児の父である。3 人はモリ突き漁に出かけて魚を獲っているらしいが、いつも浜で自分たちだけ食べているとナキロア村やイアソア村の女性たちがうわさをしていた。ある日、ナキロア村を通った R4 と C2 に、女性たちが「煙の匂いがするよ！」と話しかける。2 人は笑って通り過ぎて行った。煙の匂いとは、魚を焼く匂いという意味で、彼らがこっそり魚を食べていることを揶揄するものである。

子どもや若者たちが海に遊びに行き、魚を獲って浜で焼いて食べることはよくある。女性たちもピクニックと称して連れ立って釣りに行き、魚を浜で焼いて食べる。しかし、ここで女性たちが問題にしているのは、彼らが「一人前の大人のふるまいをするかどうか」の境にいるということである。島では、成人男性が数人で連れ立ってモリ突き漁に行くと、女性が釣りに行くときと比べ獲れる魚の量があきらかに違う。筆者は R4 らとモリ突き漁に行ったことはないが、2007 年 9 月 18 日にイパウ村の若者 K2 と K3 のモリ突き漁を見に行ったときには、2〜3 時間で体長 40 センチメートル以上あるハギ類 8 匹、その他数種の魚を獲った。女性たちの場合よく獲れるのは 10 センチメートルほどの小魚で、たまに 20 センチメートルを超えるベラ科の魚があるくらいである。R4 たちのうわさをしていた女性たちは、もう大人として魚を獲るのだから、獲ったものを村に持ち帰って人にもあげるべきだといっていたのだ。彼らも集落まで魚を持ち帰れば、人目に触れることになるので、与えざるを得なくなる。女性たちは「隠れて食べるのはかっこ悪い」と話していた。

子どもたちが積極的に持っているものを与えることと、若者が与えたがらないことは対照的である。子どもたちは仲間で行くピクニックにおいても、大人の模倣をして分配をおこなう。その場に参加している人の頭数で分配をおこなう様子は大人とまったく同じであ

る。子どもは不公平を嫌うという点と、他者にものを与えるのは楽しいという点から行動しているように見える。一方、若者は相手（大人）の誘いを受けずにそれに反抗する、裏切る態度を示すことによって、同年代の仲間たちとの結束を深めているように見える。また、この時期の若者にとって、大人の誘いかけは「ほめてあげる」というインセンティブを示されているのと同じ意味を持ち、強く反抗の態度をとってしまうのかもしれない。他者に操作されたくないという感情が、子どものころよりも強いためと考えられる。村の年長の女性たちは、「いい年なのだから、いいかげん不良仲間でつるむのはやめなさい」と諭しているのだが、他者との間に信頼関係を見い出すには、子どものときにすでに持っていた他者の誘いにのる特性に加えて、若者のときに他者を裏切ることを知る成長が不可欠であると考えられる。

子どもたちは大人の行動を模倣して生業活動を身につけていき、それによって得る食物についても大人との関わりのなかで分け合うことを身につけていく。島の子どもたちは狩猟採集という遊びによって、自分の力だけで大人が本当に欲しがる食物を手に入れることができる。それにより子どもにとって、相手（大人）の誘いにのることで得られる楽しさは大きいと考えられる。

３－３－４．生業における分配の小括

以上、生業における分配の事例をみてきた。始めに、漁撈の得意な B1 が魚を分配する事例から、与え手ができるかぎり、与えることを誇示しないようにふるまっていることがわかった。獲った本人は直接魚を相手に渡さず、子どもに届けに行かせたり、だまって台所の近くに吊るしたりしていた。持っているものを誇示することは、他者の嫉妬をかきたてることになる。嫉妬はする方よりもさせる方が悪いとされる。与え手は誇示しないことによって、他者からの嫉妬を回避していた。

また、［事例 15］で B1 が、通りすがりの Pb に魚を分けたように、Pb が意図せずとも、分配の場面を見てしまったために与えられるということがあった。B1 は「見た人には与えるべき」と語っていた。他者に見られたら、所持しているものを与えなければならないということを、Ac は「見ることはフォース（強制力）である」と語っていた。共同作業の分配においても、生業活動の分配においても、食物の贈り手が相手に対して強制力や権威を持たないように工夫をしていたのに対し、もらい手である食物を持たない側には、「見る」ことによって相手に対して強制力があると、B1 や Ac らが表現しているのは興味深い。見

られたら与えなければならない、というのは規範というより、そうしなければ落ち着かないという状態である。意図せずとも、自分が食物を見せびらかしてしまった相手をそのままにはしておけないのである。

［事例 19］の Ua のように、隣の家の台所事情を詮索することは、咎められはしない。このように乞う側には強制力がありそれをつかって交渉することもあるが、反対に与える側は相手に対して強制力や権威を持たないように慎重にふるまっている。持っているものを見られたときには、惜しむ様子を見せずに気前よく与える。しかし、［事例 20］の W1 が G 家の台所から吊るしておいた魚をだまって持って行ったことに G3 が腹を立てたように、直接相手から見られたり乞われたりして与えることと、勝手に持って行かれることは、結果的にどちらも与えているとはいえ、与え手にとって大きく異なる出来事である。

次に、分配に関する規範として、「魚は個人的に売買するものではない」ことをとり上げた。2007 年以前から船外機付きボートを島で唯一個人所有する X1 は、獲った魚をタナ島に輸送し販売していた。また、フィッシャリーのメンバーも X1 と同様に魚を販売していた。これらの行為は、島の人たちによくないこととして批判されていた。当初、筆者は「魚は分かち合うものである」という規範があるからだと考えていた。しかし、魚の伝統的な加工品を商品とし販売する事業にあたって、大型回遊魚のみを買い取りの対象にすると船外機付きボートを使用する男性を優遇することになるため、リーフフィッシュを含めて買い取りの対象とすることが決められた。これにより魚を獲った男性はそれを現金に換えることができるようになった。魚が現金化されることによって、日常的におこなわれていた魚の分配にどのような影響があるか心配されたが、A3 をはじめ島の人たちは、機会（チャンス）が均等になったことはよいことだと語っていた。かつては、魚は分け合うべき富であったが、現在は現金も富として島の人に認識されている。しかし、現金については島内では一部の限られた人しか手にする機会がない。現金は、限られた島内の一点と島外を、直線で結ぶように出入りしている。現金と魚と組み合わせることによって、現金も魚のように循環する富のひとつにしようと試みる A3 の考えは人びとの賛同を得た。禁忌や規範は、参加の機会を均等にもち、すべての人が対等な状態で参加できることを条件として、変更がおこなわれていることがわかる。

生業をめぐる分配のひとつに、子どもと若者の分配の事例をみた。子どもたちは狩猟採集を遊びとしておこない、生業活動に必要な技術や知識を身につけていく。それと同時に、自らの獲物や収穫物を、仲間をはじめ通りがかりの大人にまで気前よく与えることがよく

みられた。これは私たちにも覚えがあることだが、自分が獲ったものを与えて、相手がよろこんでくれるのはとてもうれしい。大人たちもおこなっていることだが、子どもたちも同じようにしていることがわかった。生業に必要な技術や知識が言葉によって教わるのではなく、模倣によって身につけるように、食物の贈与も、大人の積極的な遊びのような誘いによって子どもたちはおもしろがって身につけていっているように思われる。

子どもたちが相手の意図や思惑に「乗る」ことを楽しむ一方、若者たちは「断る」ことを楽しんでいた。村の女性たちからはそのような行動は揶揄されていた。そのような行動をとるのは、10 代後半から 20 代前半までの短い期間であるが、相手の思惑を裏切ることによって、他方（仲間）との結束を強めていた。相手の思惑にのるばかりでは、個別的な信頼関係を結ぶのは難しい。また、大人の誘いかけをインセンティブととらえ、操作されるのを嫌うことも推測される。子どもと若者の分配の事例は、食物分配とソーシャルスキルの成長、獲得が関連することを示唆している。

第４章　メリック島の分配―離島 15 人の共同体

前章ではバヌアツ共和国の南部に位置するフツナ島での分配の事例をみてきた。本章ではフツナ島から北西に約 680 キロメートル、バヌアツ共和国の北部に位置するメリック島における食物のやりとりに関する事例を紹介し、フツナ島との比較を試みる。

メリック島の人口は 15 人 4 世帯と少なく、島の人たちは互いに協力しながら自給自足の生活を営んでいる。畑に火を入れ、作物を植え付ける作業はすべて島の全員でおこない、その収穫も共におこなうことが多い。そのため、結果的には共同で畑をつくりそれを共同で消費していることになるが、島の人はあくまでも、「自分の畑」をつくっているのであり、「自分のイモ」を他者と分け合って食べているという。同じ作物をつくっていても、それをわざわざ分け合い交換していることが指摘できる。このように持っているものが同じような食物であっても、人がそれをわざわざ面倒なことをして分配し合うのは、単なる物質のやりとり以上の意味をもつためである。メリック島の人たちもまた、島の限られた資源を分かち合うためという機能的な意味を越えて、共に暮らしている「おもしろみ」を演出するように分配をおこなっている。これは前章で分析したフツナ島の分配の特徴と共通する。

次節ではメリック島での概要と事例を紹介する。

４－１．所有する―名前と来歴

４－１－１．土地と木の所有

メリック島は周囲が 2.2 キロメートルの小さな島である。フツナ島と同様、焼畑耕作を主食のヤムイモ、キャッサバ、バナナ、サツマイモをつくっている。以前はタロイモもつくっていたというが、島内の人口が減少し陸性のカニ類が増え過ぎた結果、カニによる食害でタロイモの生産は少ない。筆者の滞在中にタロイモが食卓にあがったのは 1 度だけであった。その他、食用のハイビスカスの葉、スイカ、パパイヤ、ピーナッツ、サトウキビなどを畑でつくっている。島内に点在するパンノキ、ココヤシ、ナッツ類などの実が重要な樹木は、樹木ごとに持ち主が決まっている。

ひとつの畑は、だいたい縦横の長さがが 10～20 メートルほどの面積で、島内に点在している。焼畑のサイクルは、3 年利用した後に数年放置し、ジャングルに戻ったところで木を切り倒し、火を入れて焼き払い、再び耕作するというものである。図 1 は A1m が描いた島内に点在するヤムイモ、キャッサバ、バナナ、サツマイモの畑と利用できる樹木の場所を

示したものである［図 1］。図 1 からは、土地は「面」ではなく「石」などランドマークをとした点でイメージされていることがわかる[22]。

表 8 は各人の畑の所有数である［表 8］。「何歳から自分の畑を持つことができるのか」という筆者の問いに対して、「子どもが畑の作業をできるようになったら持つものだ」と A1m は答えた。しかし A1m の孫娘の a3m は 4 歳と幼いが、彼女の名前でヤムイモ畑がひとつつくられている。実際には a3m の祖母となる a2m が主に手入れをしていた。子どもが 7 人もいる d2m は、長女 d3m（15 歳）と長男の D4m（9 歳）のみが自分の畑を持っていた。bm の 16 歳になる孫娘は昨年進学のためにガウア島に行き不在であったが、bm は彼女の名前で畑をひとつつくっていた。

土地は、男子であれば父方から、女子であれば母方から相続される。ヤムイモは年に 1 回収穫され、島では最も重要視される主食である。収穫した後は、畑の端にしつらえたヤムイモを保存するための棚に積み、必要な分をそこから家に持ち帰り食べる。

島内に生えている木で所有が認められるものを［表 9］にまとめた。所有されるのは家やカヌーなどをつくるための建材としての木や食用の実がなる木である。これらの木は所有者が決まっており、所有者に断らずに木を切ったり、実を落として採ったりすることはよくないとされている。島の人は自分が持っている木だけではなく、それぞれだれが所有するものかわかっている。筆者は畑に行く A1m や a2m に同行して、道の途中で「これはだれそれの木である」という説明を聞いた。そのなかには島を出て 5 年以上経つような人の木も多くあった。土地や木の所有者は、来歴も含めて覚えられていた。

［事例 24］自分の木

現場に行かなくとも、自分の木がどこにあるか、みなそらんじることができる。以下の表の名前の下は、メリック島内の地名である。聞き取りはそれぞれの家でおこなった。

[22] メラネシア的な環境認知、世界観は、面ではなく点でイメージされているということを竹川はソロモンの海洋民の事例から指摘している［竹川　2002］。土地の所有を細かく認め合うメリック島の人たちも、土地のイメージ自体は極めて点的であり相対的な位置関係を語る（ネットワーク的である）ところに共通点が見られる。島内のランドマークは大きさや形に特徴がある名前がつけられた石であることが多い。

［表 10］所有する木の場所

木の種類	A1m	a2m	C2m	d2m	bm
Lamor（タケ）	Tesmeryu	-	Tesmeryu	Vari	Ma’tenok,Vari
Takor（サゴヤシ）	Lantoton,Le’paru	Baba’tlav	Legonmyak	Vari	Bengakor
Nage（ネイティブアーモンド）	Le’paru,Ma’tenoo,Lantoton	Baba’tlav,Metvot,Legonmyak,Ronvap	Vari	Vari	Branmar
Mato（ココヤシ）	Lrgiar	Su’konbea,Varakrak,Lugovatvat,Ronvap,Lantoton,Tikor	Letop	Leme’tua,Lekor	Branmar,Tavarvar
Nawes（ナウェス）	Vari	Lontoton,Varakrak	Vari	Tavel	Tesmeryu

bm は、タケ *(lamor)* について、自分の父と夫のものが、それぞれマッテノク（Ma’tenok）とバリ（Vari）にあるといっていた。bm の父と夫はすでに亡くなっているので、そのタケは bm が自分のものであるといってもよさそうだが、bm は来歴を含めて父と夫のものであると表現していた。同様に d2m はバリにあるタケは祖父のものであるといい、C2m はテスメリュー（Tesmeryu）にあるタケは母のものであるといっていた。

畑も家族単位ではなく、個人が所有している。たとえば、A1m の家であれば、A1m、妻 a2m、孫 a3m は各自自分の名前で畑を持っている。焼畑耕作の作業は家族でおこなうが、畑は個人名で所有している。畑の所有と同じように、木も個人名で所有されているのである。

もうひとつ指摘できる特徴は、ものがだれの手をどう渡ってきて自分が所有するにいたったのかという来歴も覚えられている点である。亡くなっている人や島を出て久しい人の所有とされるものについても来歴は詳しく覚えられていた。これは、人びとが互いに所有を認め確認し合いながらも、確認し合う過程には交渉できる余地を残しているからだと考えられる。自分のものと紹介せずに、それは亡くなった夫や祖父の木であったと木の来歴を

紹介する bm、同じく祖父や母のものであるという d2m や C2m からは、一元的な体系や規則に従って所有を決定しているわけではないことがうかがえる。所有者を決めるには複数の正統性を参照する過程が必要である。松田は、アフリカのマサイ人の土地返還要求の事例から、彼らが土地の正しい所有者を主張するときに根拠とする水準は、what ではじまる問いかけではなく、why に対する問いかけであり、前者の問いに対する答えが正当性であり、後者への答えが正統性であるという［松田　2009］。正統性をあらわすのは、その土地をだれがどのように所有、利用してきたのかという過程、来歴である。島のチーフの役割には、この正統性を根拠に所有をめぐって二者間で交渉が始まったときに諍いに発展した場合の調停役がある。決してチーフに一元的な決定権があるわけではなく、来歴を参照する過程を当事者とともに確認していくためにチーフは存在しているのである。

［事例 25］母の木を切る息子

9 月 23 日の午前、世帯 I の台所にて、C1m が母 a2m に 100 バツコインを 1 枚手渡していた。筆者が C1m に理由をたずねると、「カヌーをつくるために a2m のナウェスの木を切るから」という。この日から、C1m と C2m は切り倒した木をブッシュの中で加工してカヌーをつくり始めた［写真 24］。1 艘のカヌーが 10 月 3 日に完成した。

100 バツというのは金額としては小銭である。2004 年、首都で乗合バスに乗るのも 1 回 100 バツであった。この 100 バツについて、C1m は木を切るために、木の代金を支払ったというよりは、「切らせてください」と伝えるために、母 a2m に渡したのではないかと思われた。金額の小ささから木と等価の代金を支払ったとは考えられない。それよりも、身内（母と息子の関係）でありながらも木の所有者である a2m に尋ねてから了承をもらうという過程が大事にされたという印象を受けた。ナウェスは植えてから成長して木材として使用できるようになるには、最低 20 年は必要であるという。

家族間であっても所有者に対して了承を取らずに処分することはよくないこととされるのである。

４－１－２．家畜の所有

メリック島では、ブタ、ニワトリ、イヌといった家畜が飼われている。ブタは石垣でつくった囲いの中で飼っているが、ニワトリは集落周辺に放し飼いにしている。大人ひとりあ

たり、30～40 羽飼っており、食べる頻度は 1 か月に 1～2 回程度である。

夕方近くになると「トケトケトケトケ」という呼び声で自分が飼っているニワトリ（とくに幼鳥やヒヨコ）を集め、餌（ココヤシの果肉を細かく削ったもの、残飯、シロアリなど）を与える。島の人は一瞥しただけで自分のニワトリや他の人のニワトリを識別できるが、一応目印もつけている。ニワトリの 3 本あるツメのうち、真ん中の 1 本を切り落としたものが bm、2 本落としたものが A1m と a2m、右端を落としたのが C2m、なにもしていないのが d2m である。だれが所有するニワトリか迷ったときは、ツメを見れば確認できるようになっている。ニワトリを夕飯用につぶしたときなどは、たいてい他の家にも 1 皿ずつ分ける。しかし、ニワトリの所有者は明確であり、ヤムイモと同様に「自分のニワトリ」を各自が大事に育てていることがわかる。

以下の事例は、この放し飼いのニワトリに関する所有をめぐるやりとりである。

［事例 26］隣家のヒヨコ

9 月 28 日午前中、A1m がつかっていない半壊の家屋の修繕をするという。その家屋に入ると、ちょうど奥の方で卵を抱いていたニワトリがヒヨコを 2 羽孵したところだった。放し飼いのニワトリはどこに卵を産んでいるかわからないことがよくあり、島の子どもたちは卵を探しているのが常である。このときも、A1m はニワトリがここで卵を抱いているということを偶然知ったのだった。

卵を抱いていたニワトリは bm のものだった。しかし、A1m は、ここで卵を抱いていることは bm も知らないだろうと思い、先に孵った 2 羽のヒヨコを自分の台所に持ってきて、ココヤシの殻（ヒヨコ用の家）に入れようとした。それを見た妻の a2m があやしんで「ヒヨコはどこから持ってきたの？」と尋ねた。A1m は自分の目印としてヒヨコのツメをナイフで落とすところだった。A1m が一通りヒヨコを手に入れた経緯を説明すると a2m は元に戻すべきだと A1m にいった。2 人は終始小声で話していた。結局、A1m はヒヨコを元の場所に戻し、bm には「お宅のニワトリがうちの家で卵を産んでいたよ」と教えてあげた。

人びとは調理したニワトリの肉を分け合うことには積極的だが、このように「人のもの」と決まっているものをわかっていてごまかして手に入れることはよくないこととしていた。他の人のものを盗むのはよくないことである。a2m は bm のニワトリが孵したヒヨコを、

横領しようとするA1mを非難した。所有をごまかしてもらうことと、気前よく与えてもらうことは大きく異なるのである。

［事例27］ブッシュニワトリ

島内のブッシュ（畑が点在する雑木林）にはブッシュニワトリがいる。集落周辺で放し飼いにしていたものが野生化し、家屋の周囲に住まなくなったニワトリである。ブッシュニワトリは畑の作物を食い荒すので、人は見つけ次第パチンコを持っていたら撃つようにしている。ブッシュニワトリは所有者が決められていないので、見つけた人が獲ってもよい。ヒヨコを連れている場合は、ヒヨコを捕獲してココヤシの殻に入れ連れて帰る［写真25］。人びとは「ブッシュには野生化したネコもいるのでヒヨコは早く保護したほうがいい」という。

だれの所有でもないブッシュニワトリは、だれもが獲ってもよいことになっている。しかし、集落に近い場所では人の飼っているニワトリと間違えるかもしれないので、むやみには撃たないように気をつけている。持って帰ったヒヨコには、シロアリの巣などを採ってきてこまめに与え、ココヤシの殻に入れて育てる。ブッシュニワトリはだれのものでなくても、人の手で育てられたヒヨコは所有されるものとなるのだ。

以上みてきたように、ヤムイモや有用植物である木、家畜など、島の人たちは互いに「だれのものか」を確認し合い、「私のヤムイモ」や「私のニワトリ」を育てている。ときには「私の木」を他の人とやりとりしたりしながらお互いの所有を確認し合っている。以下に特徴をまとめる。

1．個人ごとに所有を認める

2．所有するにいたった来歴も含め記憶している

3．所有を一方的にごまかす〈盗む〉のはよくない

では次節は、このように所有するものを他の人とやりとりする場面、分配の事例をみる。ここまでは人びとが厳密に所有を確認し合っている事例を紹介したが、一旦所有が決まったものに関しては、気前よく他の人に与えているように見えるのが、分配の場面である。

４－２．共同作業について

8月後半から9月の前半にかけては、年に1度のヤムイモの植え付け作業が始まる時期で

あった。畑作りは生い茂った雑木を打ち払い、畑に火を入れるところから始まる。数年間休耕していた畑には、熱帯性の植物が勢いよくのびており、足を踏み入れられない藪となっている。これを刃渡り 50 センチメートルくらいの山刀で切り倒していく。その後、雨が降らない日を選び、よく燃えるココヤシの乾いた葉と共に火を入れて、切り倒した木を焼く[23]。天候が良ければ 4〜5 日でこの作業は終わる。次に、種芋を植えるための穴を畑全体に等間隔に掘る。イモが大きくなりやすいよう、イモ堀り用の棒で約 1 メートルの深さまで土を突いて柔らかくし、穴のまわりに土を盛っておく。これは大変な力仕事で男性がひとりで作業をして 1〜2 日かかる。土を掘り終わるとあとは種芋を植えるだけであり、半日〜1 日程度で終わる。

メリック島では種芋を植えるときに、専用につくった木製のヘラのような道具で種芋の中身を掻き出してくりぬく。掻き出した中身はバナナの葉で包み、そのまま熾火で焼いたり鍋でゆでたりして畑作業の合間に食べることがある[24]。

焼畑の火入れから穴を掘るところまで、人びとは家族単位で作業をおこなう。しかし、雑木が生い茂って藪になったところを切り拓いたり、穴を掘ったりするのは、力がいる大変な作業なので、1〜2 日は他の人を誘い、一緒に作業をおこなう。例えば、8 月 23 日午前中は島の人全員で C2m の畑の作業をし、8 月 28 日の午前中も島の人全員でふたたび C2m の畑で作業をした。8 月 30 日の午前中は C2m、d2m の畑で、午後は C1m、bm の畑にて作業をした。8 月 31 日午前に d2m、C2m の畑を、午後は A1m、a2m、C1m、bm の畑をというように、ひとつの畑にみなが集まって同じ作業に取り組むのである［表 5］。とくに C1m と C2m は体力がある男性なので、他の人の畑の加勢によく呼ばれている。種芋を植えるまでの畑の準備が整ったら、島の人を全員誘って植え付け作業がおこなわれる。

［事例 28］種芋の植え付け作業において C2m がゲームを用意する

9 月 2 日午前中 8 時 45 分、島の人全員が C2m のヤムイモ畑に集まった。畑には種芋が用意されており、みな種芋のくりぬき作業を始めた。通常の畑仕事とは異なり、ひとびとはパンダナスのマットを敷いた上にくつろいで座って、談笑しながら手を動かす［写真

---

23 ココヤシの葉、花、ガク、殻などは、いずれもよく燃えるため、調理の際などにもよく利用される。とくに葉は、切り落として乾燥させたものが、焼畑の火入れに使用するのに最も適している。雑木を切り払った後の地面一面にココヤシの葉を敷きつめ、それに火をつけ畑を焼く。

24 フツナ島に滞在していたときには、ヤムイモの種芋植え付けでこのメリックのようなやりかたをするかと尋ねたところ、そんなことをしたらイモが枯れてしまうと驚かれたことがある。フツナ島では種芋はそのまま植えられていた。バンクス諸島に特徴的に見られるやりかたのようだ。

26]。

畑の持ち主でありこの日の主催である C2m は「ワラグ（*walag*）」というゲームを用意していた。ワラグは参加者が歌を歌いながら、あらかじめ C2m が畑の中にある木の幹にはさんでおいたアメを探して追いかけっこをするという遊びである。ワラグという名前はメリックの言葉でゲームの名前でもあり、そのときに歌う歌の名前でもあるという。

他の島と行き来がないこの島において、アメはめずらしいものである。島の人は C2m の用意したゲームに興奮して参加していた。子どもが主に走り回っていたが、大人も一緒に走ってアメを探した。大人が走り回るのを見て、それを見ている人が大笑いをする。C2m は全員にいき渡るように十分な量のアメを畑に隠していた。アメを食べながら種芋をくりぬく作業をおこなった。

種芋の植え付けは 2 時間で終わり、くりぬいたイモの中身を葉に包んだものを参加者は持って帰り、それぞれの台所で焼いたり茹でたりして昼食にした。その日の午後は釣りに行くなどのんびり過ごしていた。後で聞いたが、メリック島の昔の慣習では、ヤムイモを植えた後はみな海に行って飛び込んだらしい。そうすると植えたヤムイモが大きくなるといわれていた。A1m の祖父の代までは、儀礼としてこの慣習はおこなわれていたが、現在はやらなくなったという。

ヤムイモを植える作業は手間がかかるため、この時期に人びとは相互に畑の作業を手伝っている。人口が少ないため、実際には島の人全員がそれぞれ他の人が持つ畑を手伝っている。これは結果だけみると全員参加の共同作業によってヤムイモをつくっているといえるが、畑そのものは共同のものではなく、それぞれが自分の畑でヤムイモをつくっている。それぞれが畑を持つことによって、他の人の畑を手伝い自分も手伝ってもらうという互酬性の基本になっているようだ。しかし、年齢、性別によって働き手に個人差がある。例えば C2m や C1m は他の人より多く手伝いに参加している。

C2m が用意したゲームは、連日植え付け時期のためヤムイモ畑に通って作業をしていたところに演出されたおもしろみであり、祭りのような日であった。C2m は畑の持ち主であり、島のチーフでもある。この日は客として集まったみなをもてなした。もののやりとりに「所有者」と「もらうひと」があらわれるのと同様、共同作業や共食の場においても、それと対応するように「主催者」と「客」という立場があらわれる。

４－３．分配する

４－３－１．ヤムイモの分配

ヤムイモは島の人にとって最も重要な作物である。収穫後、畑にしつらえた保管棚に置いて１年間保存することを聞いた。

筆者が滞在中には、ヤムイモのほかに、調理された食物が各家のあいだでさかんにやりとりされていた。しかしヤムイモはいろいろな作物のなかでも特別なものであるという話があった。

［事例 29］ヤムイモの渡し方

昔からメリック島には、「だれかがだれかにヤムイモを欲しいと頼んだら、頼まれた方は直接渡さずに、本人が見ていないところでそっと地面に置いておかなければならない。夜のうちにこっそり置いておくように」という慣習があると Alm が教えてくれた。これはヤムイモに関わる決まりであるという。直接「見えるところ」で「見えるように」渡すことは非常によくないということであった。

この話を聞いたのは筆者が島を発つための荷造りをしているとき（10 月 6 日）である。「紫色のヤムイモは珍しいから持って帰りたい」と日頃から筆者は a2mに話していた、この日の朝、5 種類のヤムイモ（*tavap, tanvel, wa’sar, laotul, lesluben, nabunmya’k*）がビニルに入れられて台所に置いてあった。最初何の袋か確信はもてなかったが、ビニルの中身がヤムイモであることを確認したため、自分にくれたのかなと思った。その後、A1m はこれこそがまさにヤムイモを人に渡すことであると教えてくれた。それは a2m が用意してくれたものだったが、a2m は直接筆者になにもいうことはなく、A1m の説明によって、a2m がヤムイモを筆者にくれたことがわかった。

筆者は毎日 A1m の家で食事をしていたので、調理していないヤムイモに関してわざわざこのように a2m が渡してくれるとは思っていなかった。ヤムイモは特別であるということは、生活において重要な主食であるということとともに、「昔からメリック島ではヤムイモは人に乞われたらあげなければならない」という A1m の説明からもうかがえる。また、あげるときに「相手に見えるようにあげてはならない」という説明から、与える側と受ける側の 2 者間に発生する緊張を回避しているように見える。このやりかたは分配を誇示することを恐れているかのようである。次節で紹介する獲物の分配のやりかたに関しても、同

様の配慮があることが指摘できる。

４－３－２．獲物の分配

［事例 30］魚を吊るして驚かす

C1m と C2m は夜間のダイビングによるモリ突き漁や釣り漁、コウモリ猟に行き、獲れた獲物は他の人に分けている。これもヤムイモのときになされた説明と同様、夜中に獲ってきた場合、台所になにもいわず吊るしておくことが多かった。

当初、筆者がよくいたのは a2m の台所なので、C1m にとっては母親の台所だからなにもいわず魚を置いているのかと思っていた。ある日、bm と一緒に畑に出かけたときに、 bm の畑の前に魚が吊るしてあったのに驚いた。先回りして bm のために C1m と C2m が魚を置いていたようだ。家に帰ってきてから、2 人に会った bm は「ター（ありがとう）」と感謝を伝えた。その日の夕飯を食べ終わった後、bm が a2m の台所に遊びに来て、bm は a2m や A1m に対して、畑に行ったら大きな魚が吊るしてあって驚いたことを顔と身振りで演じるようにおもしろく語って聞かせた。

魚やコウモリを獲った場合、獲った人がその獲物の所有者として他の人に分配をおこなうが、面と向かって渡すのではなく、こっそりと会わないように渡している。これもヤムイモと同様、与えるものがその行為を誇示しないように振る舞っているといえる。しかし、だからといって分配行為が与える者―もらう者の二者間だけで完結するわけではなく、そのこと自体は出来事としてほかの人にも伝わる。bm は、分配してくれた C1m や C2m に礼をいうだけでなく、他の a2m や A1m にうれしかった出来事として魚が吊るしてあったことを話した。

このように、獲物を獲ったハンター自身が分配の場で誇示しない、威信を持たないようにふるまうというのは、アフリカの狩猟採集民の事例でも報告されている［市川　1991］。メリック島では、分配の場で誇示しないどころか、分配相手の家や畑に「こっそり吊るしておく」ことによって、分配の場からハンターは完全に姿を消しているのである。

また、黒田が、人が喜ぶ食物を分配することには格別のよろこびがともなうと指摘しているように、メリック島でも大きな魚など格別なよろこびがともなうものについて、より積極的に人に分けているといえる［黒田　1999］。筆者も経験として自然薯掘りや貝採りに行ったとき、自分が採集した中で一番よいものを人に分配することがあるのでその気持ちは

よくわかる。さらにその出来事が、与える者―もらう者の二者間を超えて流通することはそのよろこびを持続させることになる。魚やコウモリなどの獲物の分配行為は、他の人に比べて C1m と C2m からおこなわれることが多いが、彼らが獲物を分配した相手からの見返りを期待しているようには見えない。しかし、分配したという出来事が「おしゃべり」によって他の人に知れ渡ることは、彼らに分配したときにつづくよろこびを感じさせるものではないかと考える。

４－３－３．共食に見られる分かち合い―饗宴の開催

15 人の島の暮らしは、顔を合わせる人がいつも同じで単調になりやすいといえる。そのような日常の中に「ハレの日」を設け、教会に集まる日曜日や聖人の日、筆者の歓送迎会などの折に、食材を持ち寄って通常より大規模な調理をおこない分け合って食べる。共食のための調理方法は一度に大量の食事を用意することができる効率の良い石焼き調理である。本節では、このような共食の場ではなにが起きているかをみる。

［事例 31］bm が饗宴（*big kakae（Bis.)*）を主催する

ビッグカカイとはビスラマ語で直訳すると「大規模な食事」という意味であり、饗宴のことを指す。

10 月 4 日は月曜日で、通常であれば朝の 9 時ごろには、みなそれぞれの活動をするために畑や海に行っている。しかしこの日は、8 時 15 分に bm が a2m の家に来てヤムイモとバナナのプディングづくりを始めた。日曜日であれば仕事をせず教会に行き、午後の食事のためにみんなでプディングをつくることは多いが、平日に突然始まった理由が、そのとき筆者にはわからなかった。

女性たちがプディングのためにイモ類を大きなおろし器ですりおろしていると、C1m が弓でニワトリを 3 羽撃って持ってきた。筆者がそれはだれのニワトリか尋ねると、bm のニワトリが 2 羽、A1m のニワトリが 1 羽であるという。調理の間に昼ごはんは簡単にすませ、出来上がったごちそうであるプディングとニワトリのスープは夕飯に食べた。C1m と bm は a2m、A1m、a3m、筆者と一緒に食べた。ラプラプとニワトリのスープは、d2m の一家と C2m にも分けて届けた。

a2m にこの会の理由を尋ねると、「先週の土曜日、月曜日にプディングを私はつくろうと思う、a2m 一緒につくろう」と bm が a2m にいい、今日の会が決まったという。

教会の集会後の日曜日は殺生できないので、翌日の今日にしたらしい。a2m によると bm が会を開いたのは筆者のためであるという。しかし筆者の送迎会はすでに 9 月 29 日水曜日に開かれていた。その日は島の人全員が集まってやはりプディングをつくり、午後は踊りや歌を歌うなどして過ごした。

bm はなぜ再び会を主催したのか、後で考えてみると、それは筆者を迎えに来るはずのボートが来ていないことに理由があった。予定では 10 月 1 日にガウア島からボートが迎えに来るはずであったが、来ないまま 4 日になっていた。筆者はボートの持ち主が忘れているのではないかと思いやきもきするが、メリック島には電話など他島への連絡方法がないので、とにかく来るのを待つしかない。A1m が「のろし（草木を燃やして白煙を出す）」をあげてサインを送るという方法を提案し、一緒にやってみたが効果はなかった。メリック島から見ても大きいガウア島は海の彼方にかすんで見えるので、ガウア島からメリック島はさらに小さくぼんやりとしか見えないだろう。

ガウア島にいるボートの持ち主は bm の孫にあたる男である。ボートが来るのにあわせて bm はこの会を開くことを決めたようだ。しかし、ボートは来なかった。来たのは 10 月 9 日であった[25]。

結局待っているだけではボートは来ないかもしれないという結論を出した A1m が、8 日、C1m、C2m と共にカヌー2 艘に乗ってガウア島まで 7 時間かけて手漕ぎで行き、迎えを呼んできたのである。彼らは後にガウア島の日曜日の教会でみんなの前で称賛された。このような顛末であったため島の人や筆者はボートの持ち主がメリック島に上陸したときに非難の態度をとったが、bm は「私の孫（*bubu blong mi*）だから、許してやってくれ」とみんなにいった。

ヤムイモや魚の分配が起こる前提として所有者が決まっているように、共食の場である「饗宴」にも、主催者と客の 2 つの立場がある。共食の場でおこなわれることは、結果として「集まった人がみなで調理し同じものを食べる」という行為であり、その場においては主催者も客も同じように振る舞う。主催者がおこなうことは「会を呼びかける」「主な食材を提供する」ということである。

[25] 10 月 9 日にガウア島からようやく迎えのボートが到着しメリック島を出た筆者は、11 日にガウア島から首都ポートビラ行きの飛行機の便に乗ることができ、14 日にバヌアツを出国する便に間に合うことができた。ガウア島とエスピリットサント島、ポートビラを結ぶ飛行機は週に 1～2 便しかないため、11 日の便に間に合わなかった場合、バヌアツを出国する便にも乗れないところであった。

２－２－１の事例１では、ヤムイモの植え付け作業をみなでおこなう日に C2m がワラグというゲームを用意したことを述べた。C2m は自分の畑を手伝うために集まる参加者のために共食の場を用意した。この場合も共食の場は、主催者と客から成立している。

客の正しい態度として、a2m によると「共同作業に参加する人は、手ぶら（正確には作業用ナイフのみを携帯する）で行くことが当然で、食物のことを心配する（自分の食物を持っていく）のはマナーに反する」という。しかし客といっても、共同作業の場では主催者と客は区別なく作業をおこない、共食の場での調理も同様である。実際に調理した食物を分配する場面では、「その場に参加する人がみな同じであること」が目的とされるため、主催者も客も均等な量を分配される。

bm の事例 6 では、饗宴は bm の孫のうわさ話を止めることになった。ボートの迎えが来ず、日が過ぎていくなか、ボートの持ち主である男の話を人びとは筆者に語っていた。内容は悪い評判にまつわるものばかりであった。なぜならば、その会話はボートが来ない理由を説明しなければならないからだった。「なぜあの男は約束を守らないのか、そもそもいい加減な男である、いろいろなところで不当に金儲けをし過ぎるのだ」といったものである。男が自分の孫である bm にとっては心中穏やかではなかったと思われる。bm が主催した饗宴は、これ以上孫の噂をしないで欲しいという、bm の要求を伝えるものであった。翌日から、島の人たちは集まってその人の噂をすることはなくなった。悪口をいってボートを待つよりも、自分たちがカヌーに乗ってガウア島に行く具体的な算段を始めたのである[26]。

共食の場は主催者の呼びかけから始まる。それは主催者の要求を開催の理由にしている。客としてそれに呼応し参加することは、主催者の要求や意図を確認し合うことになる。

４－４．フツナ島と共通すること

メリック島における生活で見られた資源の所有の特徴をまとめる。４－２では、ヤムイモ畑をめぐる事例を見た。畑は個人が所有していることが確認された。島内では、焼畑耕作にあたって、大変な作業のときは他の人を誘い合って協力しておこなっていた。畑を所有しているもので、自分の畑の手入れだけをおこなうものはいなかった。特に、ヤムイモの植え付けは全員で集まっておこなっていた。結果だけをみると、島の人全員（共同体の全

[26] 島には古いカヌーと C1m と C2m がつくったばかりの新しいカヌー（事例 3 のカヌー）の 2 艘があった。筆者と筆者の荷物を積んでカヌーでガウア島まで行くという方針を A1m が立て、筆者の荷物を試験的にカヌーに載せてみたが、新しいカヌーのできがよくなかったのでバランスが悪く水が入ってきた。A1m は、これは外洋に出るには危険であるとして、カヌーを少し手直ししてから、自分と C1m、C2m の 3 人でガウア島にボートを呼びに行くことに計画を変更した。

員）で協力してヤムイモをつくり、また消費する場面では全員で分配し合っているため、ヤムイモは最初から最後まで、つまり生産から消費まで共有されているように見える。実際には「自分の畑」をそれぞれが持つことによって「手伝ったり」「手伝ってもらったり」しており、あいだで面倒くさいことをわざわざおこなっているといえる。共同作業の場において、「自分の畑」を各人が所有することによって、「手伝う人（与える側）」と「手伝ってもらう人（受ける側）」という 2 つの立場が明らかになる。分配が相互行為として繰り返されるために、この 2 つの立場が明らかになることが必要である。

メリック島では、畑の他、有用植物（木）、家畜の個人所有が認められた。いずれも、「家族で所有する」という形態は見られず、個人が所有していた。２－２－２では、母と息子のあいだにおいても、息子は母の了承を得て、はじめて木を切ることができた。儀礼的ともいえる現金の小銭 100 バツを息子は母に手渡していた。その結果、母は気前良く木を切ってもよいと息子に告げたが、このような了承を得る手続きが省略されることはなかった。

２－２－３では、ヒヨコの所有をめぐって、一度所有が明確に決まっているものを交渉なしに否定する（ごまかす）ことはよくないことが示された。これは「盗み」と同様である。家畜であるニワトリに関しても、結果的には調理して食べる場面では共食されるため、共有している状態と変わらないように見えるが、人びとが重要視するのは、「所有者が決っているものモノ」をやりとりすることであり、そこに惜しみの感情を見せないだけなのである。

では、惜しみの感情を見せず気前よく振る舞う分配の場面の事例から、「そうするべきである」と人びとに語られる規範をまとめる。４－３－１では、ヤムイモの分配に関する言説を紹介した。ヤムイモは人に乞われたら必ずあげなければならず、かつあげるときには相手に見られたり、気づかれたりしないように地面に置いていかなければならない。持たざるものの要求を受け入れ、人はヤムイモを分配しなければならないが、「見られてはならない」というように、分配者はあげることを誇示してはならないのである。４－３－２の獲物を分配する事例も同様で、分配する魚は直接手渡さず、こっそりと吊るしておくことがよしとされていた。所有の事例で見たように、所有者の個人を認めることは重要としているが、分配の場においてはその所有者があからさまに誇示されることは避けていることがわかった。また魚を吊るしておく事例など、受け手を驚かせたりおもしろがらせたりすることがおこなわれていた。

４－３－３では、共食を目的とした饗宴について、［事例 31］をもとにその場でなにがお

こなわれているのかを詳しく見た。饗宴の場は、分配の場と同様に、主催者と客の 2 つの立場から形成されていた。事例 6 では、「孫の悪口をこれ以上しないで欲しい」という主催者 bm の人びとに対する要求がみられた。しかし、分配の場で所有者が力を誇示しないように、この饗宴の場においては主催者が趣旨をはっきりと表明する演説のようなものはおこなわれなかった。分配の場で直接要求はされないが、みなは bm の饗宴の意図は理解していた。

たとえみなが集まる饗宴の場で演説をおこなっても、「本当の要求＝饗宴の意図」は演説で直接表現されることはないが、参加者がその本当の要求を理解している事例は、同じメラネシア地域のソロモン諸島における竹川の報告においても指摘されている［竹川　2007］[27]。人は他者の心を推測し知りえるからこそ、相互に了解したことを確認するためには、直接的な表現（見かけ）のやりとりでは納得しない。饗宴における分配は、bm という主催者が自分の多量の食物（この場合ニワトリやキャッサバやバナナ）を用意しそれを分配することで、それを受ける側は bm の欲求を知り、bm の孫の悪口をこれ以上噂することをやめた。

15 人 4 世帯が暮らすメリック島では、一見すると資源を共有し、共同作業によって食物を得て平等に分配しているように見える。結果として現実におこっていることはそれに等しい。しかし、島の資源を平等に分配するには、モノを共有するという方法ではなく、モノを個人が所有するという方法が実践されていた。人びとは所有者が決まっているものについては、積極的に分配行為に乗り出すことができるのである。所有者が決まっているモノには、来歴があり出来事が付随している。来歴と出来事は分配を経る度に加算され流通し、共同体全体に共有される。それが分配によってモノが平等に共同体全体に行き渡ることと同時に起こっていることであった。

メリック島では 15 人という極めて小さな共同体の暮らしにおいて、個人がものを所有することを起点として、積極的な分配行為がおこなわれていた。人の共同体において個人と個人が協力して資源を共有し生活を可能にすることにとって、個人の所有を認めることが重要と考える。人は食物を目の前にして「自分のもの」にしてしまいたいという欲望がある。自分の所有しているものを確かめるときにもこの欲望がはたらいている。しかし、そ

---

[27] 竹川は、ソロモン諸島マライタ島における 2 つの氏族を軸に起こった贈与儀礼について報告している［竹川　2007］。ある氏族がもう一方の氏族に対しておこなった盛大な贈与は、表面的には相手氏族の金銭的な援助に対して感謝を述べるという名目であったが、本当の意図は、援助をおこなったことを理由に悪口を言い続けるのを止めさせるものであったという［竹川　2007］。

の我欲を超えて、なぜ自分のものを他者に与えようとするのか。「私」や「あなた」に潜在的に欲望があるとわかっているからこそ、あえて分け合うという行為が、あなたと関係をつくりたいという意味を帯びる。

第５章　考察

ここまでフツナ島とメリック島における分配の事例を、饗宴、共同作業、生業活動という状況の違いから 3 つに分類し、それぞれに見られる平等性など社会関係における働きを分析した。

饗宴における分配は、参加者が同時にひとつの場に集い、衆目のもと時間をかけて食物を等分に分配していた。

共同作業とは主催者が作業協力を呼びかけ、参加者が集まり作業をおこなうことである。主催者は用意した食物を参加者へ等分に分配し、みなで食べる。作業提供と食事提供の交換という互酬性が認められるが、主催者はただ食物を用意するだけではなく、できるだけ参加者を驚かせるような演出をおこなっていた。

日常における分配は、「見る／見られる」ことを契機とする分配である。人は見られた食物に関して、惜しむ様子を見せずに、気前よく分け与えていた。

４章のメリック島は、人口 15 人 4 世帯の小規模な共同体であったが、饗宴、共同作業、生業活動にみられる分配の特徴はフツナ島と共通する点が多く見られた。15 人といってもそのうち大人は 7 人であり、そうした少ない人数で暮らすメリック島の人たちであっても、生業活動によって「自分の食物」を得て、それを他者に分配したり、饗宴や共同作業の機会を設定して共食を楽しんだりしていた。メリック島の人口規模だと、事実上焼畑耕作の作業は、常に島の人全員が集まっておこなうことになる。つまり共同耕地を形成しているともいえる状態だが、それでも人びとは「自分の畑」をつくっており、共同作業で人を誘うときは「手伝ってもらっている」と表現する。そして収穫物はいったん自分のものとして所有したうえで、他者に分配されている。7 人の大人ということは、ひとつの家族の規模とさほど変わらず、わざわざこのように手間のかかる手続きをおこなわなくてもはじめから平等に分配をおこなえそうだが、事例にみられたように、人びとはあくまで「自分のヤムイモ」をつくったうえで、他者と贈与交換をおこなっていた。注目すべき点は、15 人という小規模な共同体であっても、フツナ島の事例と同様に所有と分配の手続きが踏まれているということである。

なぜ、人は分配をおこなうためにそうした煩わしい手順を踏むのだろうか。人はなにに留意しながら分配行為に乗り出しているのだろうか。

饗宴や共同作業において、食物を一度みなの前に集め、等分するという方法は、分配の場にのぞむ前提として、すべての参加者どうしを対等な状態に置くことを意味する。この対

等性、「わたしとあなたは同じである」ということは、等分にする分かち合いが始まってから終わるまでの間、成立する事実である。参加者は分配の結果、自分が受け取った食物の量を他者と比することから対等であることを感じるわけではない。それゆえに、分配があらわす平等性の特徴は、即時的であるといえる。分配によって他者と対等な関係を確認するが、それを維持し続けるのではなく、分配をおこなうごとに、他者と対等な関係と“なる”のである。

分配の「楽しさ」とは、わたしとあなたが対等である状態をふまえて、その相互行為の場に参加しているという事実から生み出されていると考える。その楽しさが、人が分配をおこないたいと思う根源的な動機となっている。

では、生業活動における分配はどうだろうか。人は手に食物を持っていると、なにか特別な理由や意図をもたずとも他者に与えたくなることがある。たとえば、狩猟や採集によって他者が喜びそうなものを手に入れたときは、他者と分かち合いたいと思う。

しかし、相互共生社会をつくる互酬性原理によって、受け手が恐縮し、明示されない「負債の念」を抱えることを、与え手の意図に関わらず、受け手に生じさせてしまうことがある。それを回避するために、事例では、与え手は獲物を分配する際に誇示しない、黙って置いておく、自分が直接会いに行かず子どもに届けさせるということをおこなっていった。

相互共生社会では、分配行為が受け手に負債の念をもたせる可能性があることを知った上で、与え手は受け手が過剰な暗黙のうしろめたさを抱えないように注意し慎重にふるまっている。

それはすなわち、かれらがどのような状況であれ、他者の行動を「与えるモノ」＝「報奨」によって操作してしまう関係となることを、慎重に回避しようとしているということである。

では、饗宴、共同作業、生業活動の分配において、分配における条件としての対等と、与え手のインセンティブの回避とがどのようにあらわれているかを考察し、互酬性や平等性だけでは説明できなかった、分配行為がなにを実現しているかをあきらかにする。

５－１．食物分配と時間の共有

饗宴における分配のひとつの特徴として、始まりから終わりまでに 2～4 時間という長い時間をかけることが見られた。饗宴には目的に合わせて、演説や牧師による祈祷などの儀礼が付随するが、食物の分配にかける時間はそれらよりも長いことの方が多い。こうした

催しはフツナ語で食物そのものを意味するカイ（*kai*）という言葉で呼ぶことからわかるように、まさしく食物を用意することが重要でもある。饗宴には必ず主催者がおり、食物はその主催者が準備する。最も大規模な饗宴は、すべての島の人が客となり集まるもので、村単位で主催する。現在、島で最も大きな饗宴であるクリスマスは、主催する村が当番制で決まっており、毎年順番に担当を回していた。

饗宴を主催する村の人たちは、島の人口約 500 人に分配する食物を準備しなければならない。饗宴のために一度に大量の食物を調理する伝統的な方法として、島では石焼き調理がおこなわれる。薪をはじめ、すべての食材を集め加工するには、村総出で準備する必要がある。材料の調達は 1 週間以上前から始め、前日は一日中調理作業をおこなう。それゆえ、饗宴の当日、ココヤシの葉のマットの上に並べられる食物の数々は、人びとが協力して活動したことをあらわしている。漁撈活動で得る魚、飼育した家畜の肉も多くの人の手で準備される。また、饗宴のために禁漁期間「ラフ」を設けて魚を用意することも、人びとが 1 年以上におよぶ禁漁に協力した事実をあらわすものである。饗宴のときに目の前に並べられる食物を見ることによって、どのくらいの人たちがどのように作業をおこなったかという情報を島の人たちは知ることになる。

分配の与え手は食物を見られること、受け手は食物を見ること、それが分配という贈与交換をおこなう契機である。饗宴ではチーフが管理するマラエと呼ばれる聖域に、人びとが時間を共有して準備した食物が並べられる。共同作業やピクニックの際にも、その場で消費すべき食物が一度すべて参加者の面前に並べられる。こうした手続きによって「わたしたちは分配の受け手である」と参加者すべてが同時に感じることができる。それが見えるように並べられた食物が演出する意味である。

５－２．分配の条件としての対等

次に、饗宴における分配の方法から、分配があらわす平等性について考察する。前述のとおり饗宴や共同作業、ピクニックなどの食物分配において、参加者の面前に食物が集められた。たいていはココヤシの葉を編んだマットが敷かれ、その上に食物が置かれた。並べ終えた後に、その場にいる参加者の人数に合わせて、フツナ語でラウ（*rau*）と呼ばれる山をつくり、食物を山分けする。ラウは、分配の山を指す言葉であると同時に、分配そのものを指す言葉でもある。饗宴の場合は、村の数で最初に山をつくった後、半族ごと、世帯ごとに分ける。共同作業の場合は参加者の数、ラマガ・イカと呼ばれる大型回遊魚を分け

るときは村にいる女性の数となる。

その場にいる全員でひとつのものを均等に分けるというところに、山分けの意味がある。１人当たりの分配される量が同等になるためには、あらかじめ 1 人分の量を決めた上で分配をおこなう方がより正確になる。しかし、人びとが分配に求めるのは、結果として他者と同じ量を受け取ることではなく、その過程で他者と同じ量に分け合うということである。各世帯の構成は当然それぞれ異なっている。たとえば、世帯における子どもの数、男女の比率、体格差、若者と年長者など違いは多岐にわたる。そのように、もともとそろっていない条件を、分配に参加する際に一度同じ条件に仮定する。つまり、参加者は分配に参加する前に、対等な状態となる。

村によって多少の人口差があるが、分配の場では 6 つの村は対等な村として、食物は 6 つのおよそ均等な山に分けられる。世帯も先に述べたように内実はそろっていないが、村の中で半族に分けられた食物は、世帯数で均等に分けられる。饗宴の分配において、等分され刻々と小さくなっていく食物の山は、島の中のひとつの村、村の中のひとつの半族、半族の中のひとつの世帯、世帯の一員としての私に分けられる。それにより、それぞれの山の成員と対等な状態であることを了解できるようになっている。ここで重要なのは、結果的に他者と比して正確に同量を得ることではなく、ひとつの食物の山を均等に分けるという過程そのものである。寺嶋は『平等論』において、平等は、平等であるという静的な状態ではなく、平等にするという動的な視点から捉える必要があるという［寺嶋　2011］。饗宴における分配の事例から、人びとが重要視しているのは、この動的なプロセスであることがわかる。島の分配における動的なプロセスとは、他者との対等な条件を受け入れ、分配に参加し、分配を受けるというものであった。その場では他者と対等であることを引き受けて、分配行為そのものを楽しむ。この分配が成り立つ過程は、遊びの空間が成り立つ過程と類似している。人びとが分配行為に乗り出す動機は、遊びに興じる動機と同様の楽しさのためではないだろうか。寺嶋は、遊びは他者に強制できないという点を挙げ、遊びと平等との関係を示唆している［寺嶋　2011］。次に、この強制を回避するということについて分配の与え手の思惑に注目し、さらに分配の特徴を考察したい。

５－３．分配への動機

島の人たちは、焼畑耕作や漁撈活動、採集活動に互いに誘い合い集まって出向く。メリック島のような小規模な共同体であっても、「自分の畑」を所有することにより、互いに「手

伝いあう」という状態をつくり、「自分のヤムイモ」を収穫し、それを結果的にはみなで分かち合って食べていた。フツナ島の人たちも、共同作業では、手伝ってもらう主催者と誘われて集まる参加者というふたつの立場がある。主催者は、作業を自分のためにおこなってもらう参加者に対してその日の食事を用意する。作業することに対して食物を返礼するという互酬性が成り立っている。また、生業活動による食物の調達と調理作業が一日の大半を占める島の生活にとって、その日の食事が用意されているということは、参加者が日課をこなす必要性から解放されることを意味する。それゆえ、主催者が自分のために人を集めるには、その人のその日の食事を確保しておきさえすれば、参加者としては不満はないのである。

共同作業において主催者が用意する食物は、ちょっとした驚きや楽しみを提供するように工夫されていることが事例から示された。饗宴でも用意される石焼き調理による料理から、インスタントのストロベリージュースまでさまざまである。一晩中ブッシュの中を、松明の灯かりだけをたより歩き回って獲った夜行性のカニや、オオコウモリなど、作業の参加者たちの面前に大量に並べられてみなを笑わせ驚かせた食物は、その後の話題提供にもなっていた。主催者の演出はより参加者個人の好みに合わせることで効果をあげた。

そこからは、島における分配では、労働の対価として現金が支払われるアルバイトのように、作業の対価として食物が支払われるという形態を避けようとしていることがわかる。分配の与え手である主催者は「報奨を与えるという条件」を理由に、参加者を作業に誘いたいわけではないのである。報奨を得られるがゆえに作業に参加した、となると、参加者の参加する動機は「報奨」ということになってしまう。

参加者はそれを望まないであろう、と主催者は考え、参加者のために特別な食物を用意するのである。では、主催者とともに参加者も望む、共同作業に参加する報奨ではない動機とは何であろうか。それは、「あなたと共在したい」という内発的なモチベーションであると考える。分配の与え手と受け手の相互にこの動機があることを同時に共感できるという状態を、「一致の感覚」と呼びたい。食物があらわす楽しさやおもしろさ、驚きをもとに、他者とのあいだにこの即興的な共感、一致の感覚を得ることが、分配行為に人びとが望むことの重要な点のひとつであると考える。

５－４．即興的な共感、一致の感覚

島の人は漁撈活動や焼畑耕作などの生業活動により日々の糧を得ている。島を歩き、自分

の世帯を支える収穫物を家に持ち帰り生活している。漁撈活動で得た魚は分配されることがある。釣り漁やモリ突き漁が得意な人は、他の世帯に魚を分配する頻度が高い。これら与え手のハンターたちは、分配をおこなう際には、できるかぎりそのことを誇示しないように努めていた。渡すときの態度がひかえめであるほか、黙って受け手の台所の近所の木に吊るしておく、自分が直接受け手の家や台所を訪ねず子どもをつかって届けに行かせるなどが見られた。メリック島の事例では、受け手が朝から畑に行くであろうことを予想して、集落の畑の入り口に魚が吊るしてあった。これは受け手を驚かせていた。またヤムイモを分配する方法は、受け手になにも告げずに家屋や台所にそっと置いておくというものだった。

自分が苦労して獲った魚や滅多に獲れない珍しい種類の魚など、獲れたことがうれしくて他者にあげたくなってしまうということがある。大量に収穫物を得て余剰があるからという理由をもつ場合もあるが、分かち合いに乗り出す動機はそればかりではない。しかしながら、相互共生社会をつくる互酬性原理によって、受け手が恐縮し、明示されない「負債の念」を抱えるということを、与え手の意図に関わらず、受け手に生じさせてしまうことがある。与え手は、狩猟や採集活動によって自分が収穫物を得たうれしさを分配する動機としている場合、そのような事態をできるかぎり回避したいと考える。与え手は、「自分はあなたに食物を与えるが、それは報奨＝インセンティブとして与えるわけではない」ということを誇示しない態度をとっている。与え手は「あなたと共在したい」という内発的なモチベーションのもと、受け手に食物を贈る。受け手は与え手のこの動機に共感することができた場合、与え手の思惑どおり、恐縮したり暗黙にうしろめたさを感じたりせずに、分け合った食物をよろこび合うことができるだろう。

一方、日常活動における分配は、与え手の思惑とは関係なく突然始まることがある。道を歩いているとき、集落を通りかかったとき、他者と出会ったそのときに分配がおこなわれる。分配の開始は他者が所持している食物を見る／見られることが契機になっている。３－３の［事例 15］では、B1 は分配の場に偶然通りかかっただけの Pb に対して、分配し終わっていた山を急遽壊してつくりなおし、Pb の分として魚の肉を分けてもたせた。Pb は遠慮の態度を見せていたが、結局 B1 から魚の肉をもらい受けて帰った。このように所持している食物を見られた人は、見た相手の意図に関係なく分配を始める。このことを Ac は「見ることのフォース（強制力）」と呼んでいた。ここでも他者が所持しているということによって、食物は社会性を帯びていることがわかる。見ることにフォースがあるため、過剰に

分配したくない場合は、他者から見られないように隠す。［事例 17］の Ac や［事例 21］の Ya など、道で偶然出会う人に所持している食物を見られて与えなければならないことを予想して、袋の中などに見えないように隠していた。Ya の予想通り、隠していなかった分は、出会った人たちにほとんど与えることになった。食物を所持しているのを見られたのに与えない、という場面に遭遇することはなかった。

所持している食物を見られたら与える。これはなにを動機とするのだろうか。多くの文化研究では、これは嫉妬の回避としている。他者からの嫉妬を回避するために、所持している食物は見せびらかさず、分配を避けたい場合は隠し、見られている分に関しては惜しみの感情を見せず気前よく与える。所持している食物を他者から見えなくする、隠すという行動の選択は、分配という相互行為を開始しないという意思表示である。その反対に、だれかが所持する食物が見える状態にあると、分配の与え手・受け手の相互の意図や思惑に関わらず、分配は自ずと始まってしまうのである。このように受け手が見たことによって突然始まってしまう分配については、与え手は分配対象の食物が報奨となることを心配しなくてもよいため、その態度は謙遜ではなく鷹揚なものとなる。

５－５．人はなぜ分配をするのか

以上フツナ島やメリック島の分配の事例にみられた与え手と受け手のあいだでおこる食物のやりとりは、互酬性や平等性だけでは説明できないものがあった。ここで見られる分配行為はなにを実現しているのだろうか。それは、食物がもつ楽しさやおもしろさ、驚きをもとに、他者との間に即興的な共感を得ることではないかと考える。

島で見られる日常的な事例から、食物を惜しみなく分け合うという行為は「人として当然である」とふるまっているように見える。しかし、同時に分配の受け手はそれを当然のようにやり過ごしてしまってはならないという、応答が期待される行為でもある。この応答とは、嫉妬や負債の念といったネガティブな感情だけを受け手に与えることを回避し、「あなたと共在したい」という内発的なモチベーションを見出すことである。

この相互行為としてのモチベーションをめぐる二重性が、即興性を帯びながら展開していくという分配の特徴の根源にあるのではないだろうか。

５－６．相互行為としての食物分配の獲得

島の子どもたちは約 10 歳以上になると、自分たちで連れ立って出かけ、さまざまな食物

を遊びで手に入れる。それを仲間で分配して食べることもあれば、道端で偶然出会った大人に、所持している食物を見られて「ちょうだい」と声をかけられ、与えることもある。大人のこの分配の誘いかけに対して、嫌がる様子や惜しむ様子を見せる子どもは見なかった。むしろ、自分が持っている食物を大人が本気で欲しがる様子を見せれば見せるほど、子どもたちは楽しそうであった。事例では、分配を誘う大人は 40 代以上の女性がほとんどであった。Ga は、子どもがよろこぶようにしぐさや言葉も巧みであった。一方、10 代後半から 20 代前半の若者たちは、一人前の大人として漁撈活動に赴いているにも関わらず、浜で獲った魚を自分たちだけで食べてきてしまうことを、村の女性らに非難されていた。

思春期前の子どもたちは、相手の誘い、欲しいという働きかけに乗って、食物を他者に与えることを楽しんでいたが、思春期の若者たちは、相手の思惑に乗ることをわざと避け、仲間たちだけで浜で食べることに魅力を感じているようだった。子どもと若者に見られるように、他者の誘いに乗ることと、裏切ることとの両方が、他者との信頼関係を確かめながら分配というソーシャルスキルを獲得するために、必要であると考える。

黒田は、分配をおしゃべりにたとえているが［黒田　1999］、社会環境のなかでおしゃべりをするうちに、子どもたちがその社会の言語を獲得していく。社会環境のなかで分配をおこなううちに、他者との信頼関係を確かめることができるようになるという技術として獲得する。

分配は、規範（ルール）を覚えておこなうことによって、成功したり失敗（逸脱）したりするものではない。間違えると、言葉であれば会話がとぎれるように、ただ分配も停止するというだけである。子どもたちは、狩猟や採集の遊びによって手に入れる食物をつかって、ときに大人の誘いに応じながら分配による他者との関わりの持ち方を身につけると考える。

亀井はカメルーン共和国の狩猟採集民バカ・ピグミーの子どもたちの事例から、「遊びと生業活動の両方にスライドしうる活動領域を豊富にもっていることが、森に暮らす狩猟採集民の子どもたちの特権と言えるのではないだろうか」と述べている［亀井　2010：213］。本稿の島の子どもたちも同様に、遊びと生業活動の両方にスライドしうる活動領域を豊富にもっている。さらに、自分の手で得た食物を間食として食べたり、仲間と分け合ったり、大人に本気で欲しいといわれたりしながら、分配行為を身につける。それらすべてを含めて島の子どもたちの特権であるといえよう。

分配をおこなうということは人の普遍特性であるが、個別文化依存的といえる規範は、分

配をおこなっている相互行為のなかで変化していく側面がある。分配における、与え手、受け手は規範を意識せずとも分配をおこなうことはできる。新しい言語を獲得しようとするとき、その言語の文法を覚えて、話せるようになろうとするのと同じく、規範を覚えてその社会で分配をおこなうことができるようになろうとすることはできる。しかし、そこで成長する子どもたちは、まわりの人たちを模倣するうちに、食物分配を覚えると考えられる。食物分配によって他者とやりとりをし、社会関係を確認したり構築したりすることができる。

島の人たちは、だれもが自分の身体をつかって食物を得ている。そしてその食物をもとに分配行為をおこなっている。相互共生社会をつらぬく互酬性原理によって、分配の受け手が明示されない「負債の念」をもったりそれにより恐縮したりすることを、ときに与え手は回避しつつ、受け手に「あなたと共在したい」という内発的なモチベーションを確認したいと考える。そのために、分配の与え手は、食物が報酬＝インセンティブになることを、さまざまな働きかけにより回避していた。

現在の私たちの社会は、教育を始めとしてあらゆることにインセンティブを設け、それを行動の動機づけにすることが一般化している。たとえば、教育や労働の場は、人の能力を数値化し目標達成にインセンティブを設ける。これらのインセンティブを動機とした他者へのはたらきかけは、規則や制度がある教育や労働の現場にとどまらず、翻って日常的な他者関係にまで及んでいる可能性を指摘したい。インセンティブを他者に使用することを嫌う社会は、根源的に他者を操作することはできないし、また自分も他者から操作されないということをあらわしている。一方で、たとえば学校制度においてインセンティブによる子どもの教育を一般化してきた私たちの社会では、なにがおこっているのだろうか。島の社会に対して、私たちの社会は、根源的に他者を操作することができ、また自分も他者から操作されることを許す社会であるといえる。これが、戦争を止められなかった私たち近代社会の危うさの原因ではないだろうか。他者とのあいだの微細な共感、一致の感覚を手放してしまった社会は、常に自己の行動の決定を外部のなにかに任せていても不安を感じない。不安を感じないため、他者への関心は加速度的に鈍感になり、社会を形成する利己的な感情と社会的な感情のバランスは悪くなっている。つまり前者が肥大しているのである。

では、私たちが他者とのあいだの微細な共感、一致の感覚をたよりにした相互共生的な社会を取り戻すにはどうしたらよいのだろうか。まずは、島の子どもたちを模倣することを

提案する。狩猟や採集や漁撈活動において身体をつかって食物を得てみよう。遊びの感覚の延長線上にある、相互に共在の内在的な動機が一致する楽しさを、食物を手がかりに実感することができるはずである。

第６章　結論

本論文は、南太平洋バヌアツ共和国の２つの島嶼地域を対象に、平等性が高い社会において、分配が実際に生活のなかでどのようにおこなわれているかを記述し分析した。

分配の事例を状況の違いから、饗宴、共同作業、生業活動の 3 つに分類した。衆目の下、食物を並べ等分にするという分配方法は、饗宴、共同作業、生業活動すべてにみられた。食物を所持する与え手が、与えることを誇示しないような分配は、生業活動にみられた。

食物を一度みなの前に集め、等分するという方法は、分配の場にのぞむ前提として、すべての参加者どうしを対等な状態に置くことを意味する。この対等性、「わたしとあなたは同じである」ということは、等分にする分かち合いが始まってから終わるまでの間、成立する事実である。参加者は分配の結果、自分が受け取った食物の量を他者と比することから対等であることを感じるわけではない。それゆえに、分配があらわす平等性の特徴は、即時的である。

この分配方法が実現することは、他者と対等な関係を確認し、それを固定して維持し続けるということではなく、分配をおこなうごとに、他者と対等な関係と“なる”ことである。

分配の「楽しさ」とは、わたしとあなたが対等である状態をふまえて、その相互行為の場に参加しているという事実から生み出されている。その楽しさが、人が分配をおこないたいと思う根源的な動機となっている。

一方、与え手が始める日常的な分配方法では、与え手は受け手が過剰な暗黙のうしろめたさを抱えないように注意し慎重にふるまっていた。分配の与え手はなにに留意しながら分配行為に乗り出しているのか。与え手は、自分が与える食物が、受け手にとって「報奨＝インセンティブ」にならないようにふるまっていた。与え手は、食物がインセンティブとして分配されることによって、受け手に暗黙のうしろめたさを感じさせることを気にしていたのである。

人は手に食物を持っていると、何か特別な理由や意図を持たずとも他者に与えたくなることがある。たとえば狩猟や採集によって他者がよろこびそうなものを手に入れたとき、他者とそのよろこびを分け合いたいと思う。

しかし、相互共生社会をつらぬく互酬性原理によって、受け手が恐縮し、明示されない「負債の念」を抱えることを、与え手の意図に関わらず、受け手に生じさせてしまうことがある。それを与え手は与え方によって回避しようとしていた。インセンティブを他者に使用

することを嫌う社会は、根源的に他者を操作することはできないし、また自分も他者から操作されないということをあらわしている。

ここで見られる分配行為は何を実現しているのだろうか。それは食物があらわす楽しさや面白さ、驚きをもとに、他者との間に即興的な共感を得ることではないかと考える。

食物を惜しみなく分け合うという行為は、島で見られる日常的な事例から「人として当然である」と思われる。しかし、同時にただそれを分配の受け手は当然のようにやり過ごしてしまってはならないという、応答が期待される行為でもある。この応答とは、嫉妬や負債の念といったネガティブな感情だけを受け手に与えることを回避し、「あなたと共在したい」という内発的なモチベーションを見出すことを期待しているのである。

相互行為としての共感をめぐる二重性が、即興性を帯びながら展開していく分配の特徴の根源にあると考える。

謝辞

本論文のフツナ島における調査は、平成 19 年度 JICA 草の根協力支援型「フツナ島村落経済開発」（代表者：竹川大介北九州市立大学文学部教授）事業の国外調整員として現地に滞在し事業に従事したことによる。

長期にわたる現地調査の機会を与えてくださった竹川大介教授に感謝申し上げる。指導教官として、ゼミにおける熱心なコメントをはじめ、示唆に富んだ親身なご指導をいただいた。

副査として、寺嶋秀明教授（神戸学院大学人文学部）、稲月正教授（北九州市立大学基盤教育センター）からも、丁寧なコメントと多くのご教示をいただいた。

図と地図の作成には、今田文さん、大津留香織さんにご協力いただいた。

北九州市立大学人類学ゼミのみなさんからは、本論文について熱心に討議していただいた。みなさんのご助力がなければ、研究をこうした形にまとめることはできなかった。

最後に、メリック島、フツナ島の人たちに心から感謝の意を伝えたい。メリック島の Apsolon、Mary 夫妻は、私の滞在を受け入れていただき、食住の面倒のみていただいたほか、さまざまな形でお世話になった。人口 15 人のメリック島には島外との通信手段が一切なく、私の訪問は突然のものであったが、島の方は大変親切に受け入れてくださった。フツナ島ナキロア村の Jimmy Sausiara、Mariel 夫妻、Nigasau、Kawanta 夫妻にも同様に大変お世話になった。首都ポートビラでは、Johnson Sausiara、Mou 夫妻にお世話になった。夫妻からは、私のバヌアツ滞在の全般にわたり細やかなアドバイス、心遣いをいただいた。フツナ島イパウ村の Moia、Seie 夫妻にも大変お世話になった。とくに Seie からは、とびきりおいしい料理方法とそれらを人とシェアするコツを教えられた。2010 年に Seie の突然の訃報が届き、驚くとともに深い悲しみを感じている。冥福を祈るとともに、本論文を Seie に捧げたい。

以上、記して感謝いたします。

参考文献

Crowley, Terry

2003 A New Bislama Dictionary 2nd edition, University of South Pacific.

Dougherty, Janet W.D

1983 West Futuna-Aniwa:An introduction to a Polynesian Outlier Language, University of California Press.

Foster, George M.

1972 The Anatomy of Envy: A Study in Symbolic Behavior. Current Anthropology 13(2):165-202.

Kwa'ialoa, Michael Burt, Ben

2001 Our Forest of Kawa'ae　Our life in Solomon Island and the things growing in our home, The British Museum Press.

Levi-Strauss,C

1949（1977，1978）Les Structures elémentaires de la parenté.P.U.F

(『親族の基本構造（上）・（下）』馬淵東一・田島節夫監（訳）、番町書房)

MacClancy, J.

2007　*To kill a bird with two stones*　Vanuatu cultural centre.

(マッククランシー　2007『二石一鳥』仲誠一（訳）、バヌアツカルチュラルセンター)

Malinowski, B.

1922（1961）*Argonauts of the Western Pacific.* E.P.Dutton&Co.,INC.（『西太平洋の遠洋航海者』（世界の名著 59）寺田和夫・増田義朗（訳）pp.219-342、中央公論社）

Sahlins, Marshall.

1972（1984）*Stone Age Economics.* Aldine Publishing Company.

（『石器時代の経済学』（叢書・ウニベルシタス 133）、山内昶（訳）、法政大学出版局）

Service, E.
1966（1972）The Hunters. Prentice-Hall.
（『狩猟民』（現代人類学２）、蒲生正男（訳）、鹿島研究所出版会）

Tryon, Darell
1996 “The Peopling of Oceania: the lingustic evidence.”In Bonnemation, Joel et al(eds.), Art of Vanuatu, University of Hawaii Press, pp.54-61.

Vanuatu National Statistics Office
1999　Census Report National Statistics, Office Vanuatu.
2009　Census Report National Statistics, Office Vanuatu.

伊藤　幹治
1995『贈与交換の人類学』、筑摩書房。

市川　光雄
1991「平等主義の進化史的考察」、『ヒトの自然誌』、田中二郎・掛谷誠（編）、平凡社。

今田　文
2005「現金贈与の社会装置―キリバス共和国におけるビンゴゲームの役割」、竹川大介（共著）、『北九州市立大学文学部紀要』12 巻 pp.83-98。

今村　薫
2010『砂漠に生きる女たち―カラハリ狩猟採集民の日常と儀礼』、（名古屋学院大学総合研究所研究叢書 24）、どうぶつ社。

エンゲルス、F.
1965『家族・私有財産・国家の起源』、戸原四郎（訳）、岩波書店。

風間　計博
2003『窮乏の民族誌—中部太平洋・キリバス南部環礁の社会生活』、大学教育出版。

掛谷　誠
1991「平等性と不平等性のはざま—トングウェ社会のムワミ制度」、『ヒトの自然誌』、田中二郎・掛谷誠（編）、平凡社。

亀井　伸孝
2009『遊びの人類学ことはじめ』、亀井伸孝（編）、昭和堂。

2010『アジア・アフリカ言語文化叢書 49　森の小さな〈ハンター〉たち—狩猟採集民の子どもの民族誌』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所。

岸上　伸啓
2003「狩猟採集民社会における食物分配の類型について—「移譲」、「交換」、「再・分配」」、『民族学研究』68(2)：145-164。

北西　功一
2004「狩猟採集社会における食物分配と平等—コンゴ北東部アカ・ピグミーの事例」、寺嶋秀明（編）、『平等と不平等をめぐる人類学的研究』、ナカニシヤ出版。

木下　靖子
2007「旅回りのテクネー—沖縄伊良部島佐良浜、老漁師の語りから」、北九州市立大学大学院修士論文

黒田　末寿
1999『人類進化再考—社会生成の考古学』、以文社。

関本　照夫

2004「不平等社会に見る平等への契機―ジャワ農村の事例」、寺嶋秀明（編）、『平等と不平等をめぐる人類学的研究』、ナカニシヤ出版。

竹川　大介

2002「結節点地図と領域面地図、メラネシア海洋民の認知地図」、『核としての周辺』p 159 - 193 松井健（編）、京都大学学術出版会。

2007「外在化された記憶表象としての原始貨幣―貨幣にとって美とはなにか」、春日直樹（編）『資源人類学 5　貨幣と資源』、弘文堂。

2008「禁忌と資源―人はいかに自然を説明するか」、岸上伸啓（編）『海洋資源の流通と管理の人類学』、明石書店。

寺嶋　秀明

2004「人はなぜ、平等にこだわるのか―平等・不平等の人類学的研究」、寺嶋秀明（編、）『平等と不平等をめぐる人類学的研究』、ナカニシヤ出版。

2007「からだの資源性とその拡張―生態人類学的考察」、内堀基光（編）、『身体資源の共有』〈資源人類学 09〉、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

2011『平等論―霊長類と人における社会の平等性の進化』、ナカニシヤ出版。

ドゥ・ヴァール、F.

2010『共感の時代へ―動物行動学が教えてくれること』、柴田裕之（訳）、紀伊國屋書店。

丹野　正

1991「「分かち合い」としての「分配」―アカ・ピグミー社会の基本的性格」、『ヒトの自然誌』、田中二郎・掛谷誠（編）、平凡社。

野嶋　洋子

1994「石蒸し焼き料理法の諸相―オセアニアにおける調理の民族考古学的研究にむけて―」、『民族学研究』59(2):146-160。

福井　栄二郎

2006「メラネシアにおける文化の真正性とその揺らぎ―ヴァヌアツ・アネイチュムの社会の伝統に関する歴史人類学的研究―」、神戸大学博士申請論文。

ブラウン、D. E

2002『ヒューマン・ユニヴァーサルズ―文化相対主義から普遍性の認識へ』、鈴木光太郎・中村潔（訳）、新曜社。

フリーマン、D.

1995『マーガレット・ミードとサモア』、木村洋二（訳）、みすず書房。

松田　素二

2009『日常人類学宣言！―生活世界の深層へ／から』、世界思想社。

松村　圭一郎

2007「所有と分配の力学；エチオピア西南部・農村社会の事例から」、『文化人類学』72(2)：141-164。

2008『所有と分配の人類学―エチオピアの農村社会の土地と富をめぐる力学』、世界思想社。

ミード、M.

1976『サモアの思春期』、畑中幸子・山本真鳥（訳）、蒼樹書房。

モース、M.

2009『贈与論』、吉田禎吾・江川純一（訳）、ちくま学術文庫。

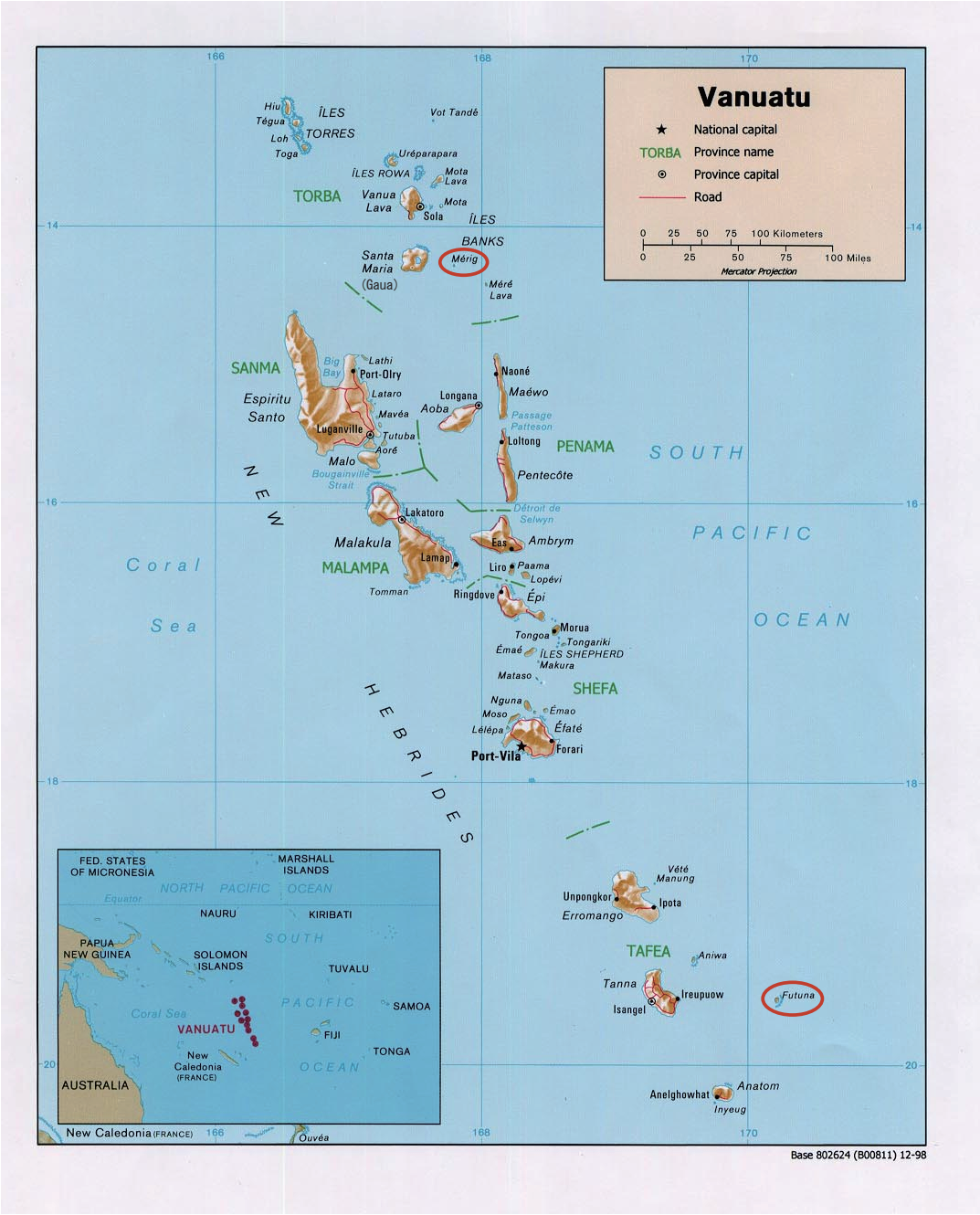
モルガン、L.H.

1958『古代社会』、青山道夫（訳）、岩波書店。

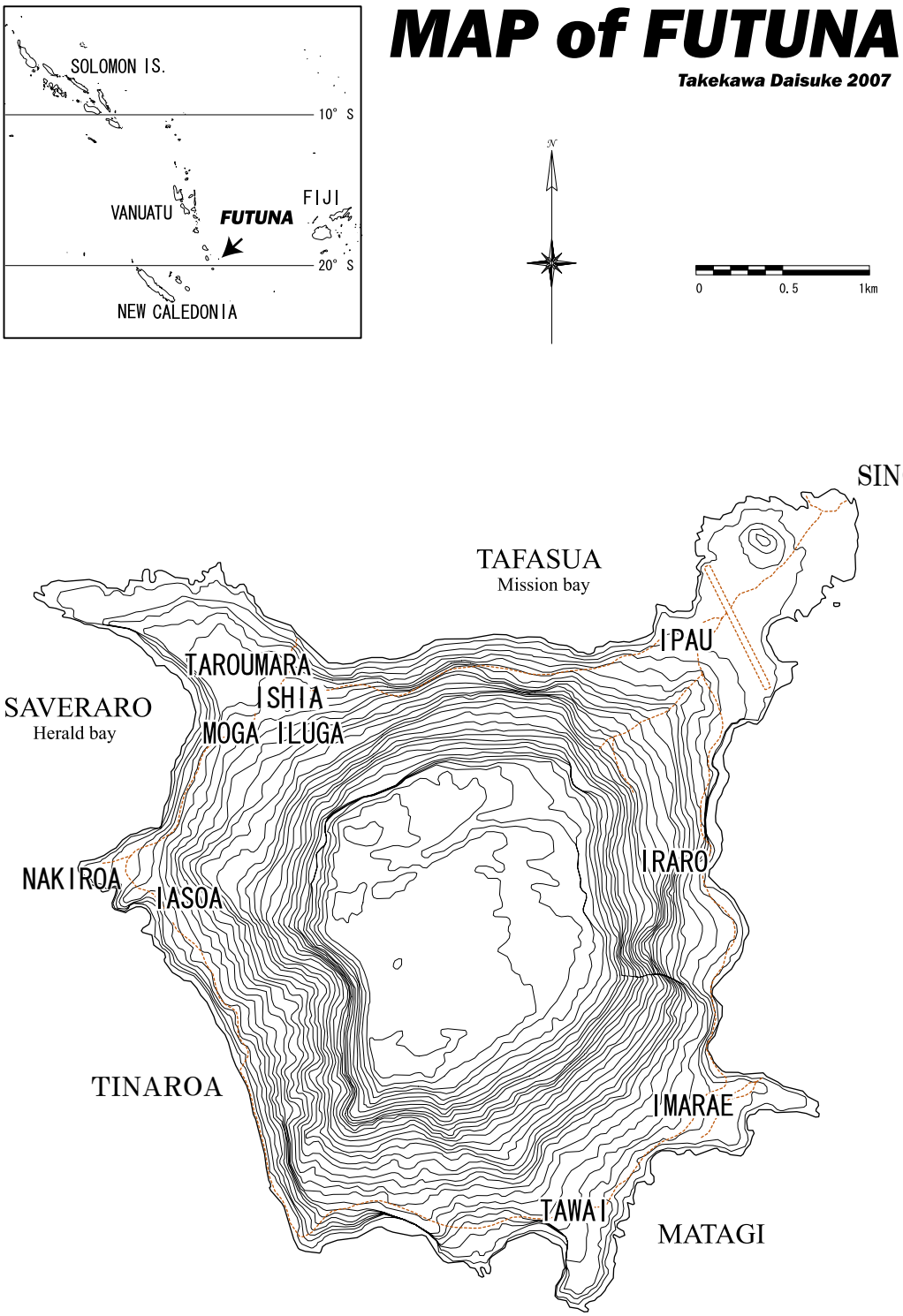
リーチ、E.

1974『人類学再考』、青木保・井上兼行（訳）、思索社。

地図１　バヌアツ共和国


Vanuatu
National capital
TORBA Province name
Province capital
Road
0 25 50 75 100 Kilometers
0 25 50 75 100 Miles
Mercator Projection
ÎLES TORRES
Hiu
Tégua
Loh
Toga
Vot Tandé
Uréparapara
ÎLES ROWA
Mota Lava
TORBA
Vanua Lava
Mota Lava
Sola
ÎLES BANKS
Santa Maria (Gaua)
Mérig
Méré Lava
SANMA
Espiritu Santo
Big Bay
Lathi
Port-Olry
Lataro
Mavéa
Luganville
Tutuba
Aoré
Malo
Bougainville Strait
Longana
Aoba
Naoné
Maéwo
Passage Patteson
Loltong
PENAMA
Pentecôte
Détroit de Selwyn
Lakatoro
Malakula
MALAMPA
Lamap
Tomman
Eas
Ambrym
Liro
Paama
Lopévi
Ringdove
Épi
Morua
Tongoa
Tongariki
Émaé
ÎLES SHEPHERD
Makura
Mataso
SHEFA
Nguna
Émao
Moso
Lélépa
Éfaté
Forari
Port-Vila
NEW HEBRIDES
Coral Sea
SOUTH PACIFIC OCEAN
Vété Manung
Unpongkor
Ipota
Erromango
TAFEA
Aniwa
Tanna
Ireupuow
Isangel
Futuna
Anelghowhat
Anatom
Inyeug
FED. STATES OF MICRONESIA
MARSHALL ISLANDS
NORTH PACIFIC OCEAN
Equator
NAURU
KIRIBATI
SOUTH PACIFIC OCEAN
PAPUA NEW GUINEA
SOLOMON ISLANDS
TUVALU
SAMOA
Coral Sea
VANUATU
FIJI
TONGA
New Caledonia (FRANCE)
AUSTRALIA
New Caledonia (FRANCE)
Ouvéa
Base 802624 (B00811) 12-98

地図２


MAP of FUTUNA
Takekawa Daisuke 2007
SOLOMON IS.
10° S
VANUATU
FUTUNA
FIJI
20° S
NEW CALEDONIA
N
0
0.5
1km
SINOU
TAFASUA
Mission bay
IPAU
TAROUMARA
ISHIA
SAVERARO
Herald bay
MOGA
ILUGA
IRARO
NAKIROA
IASOA
TINAROA
IMARAE
TAWAI
MATAGI

地図３　メリック島

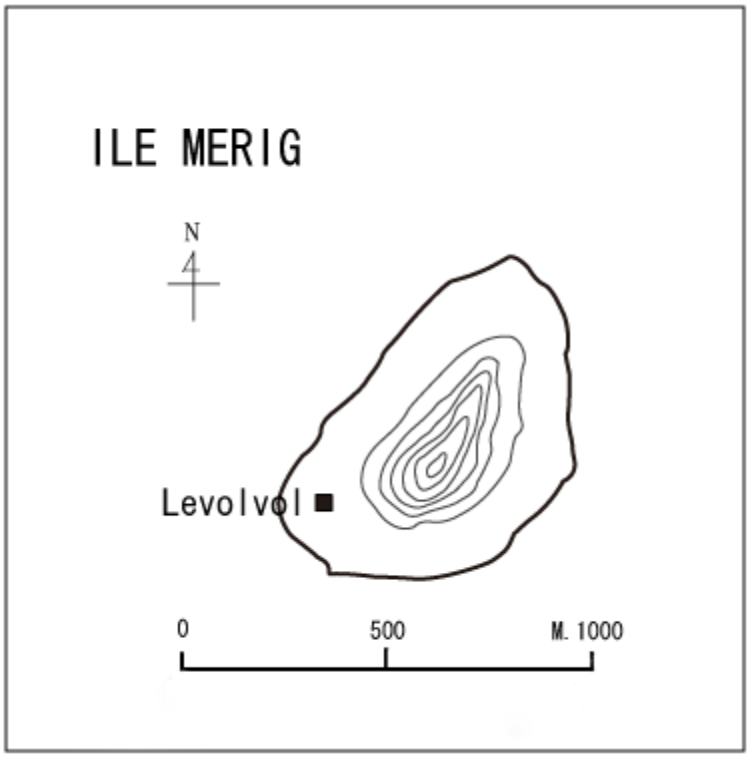
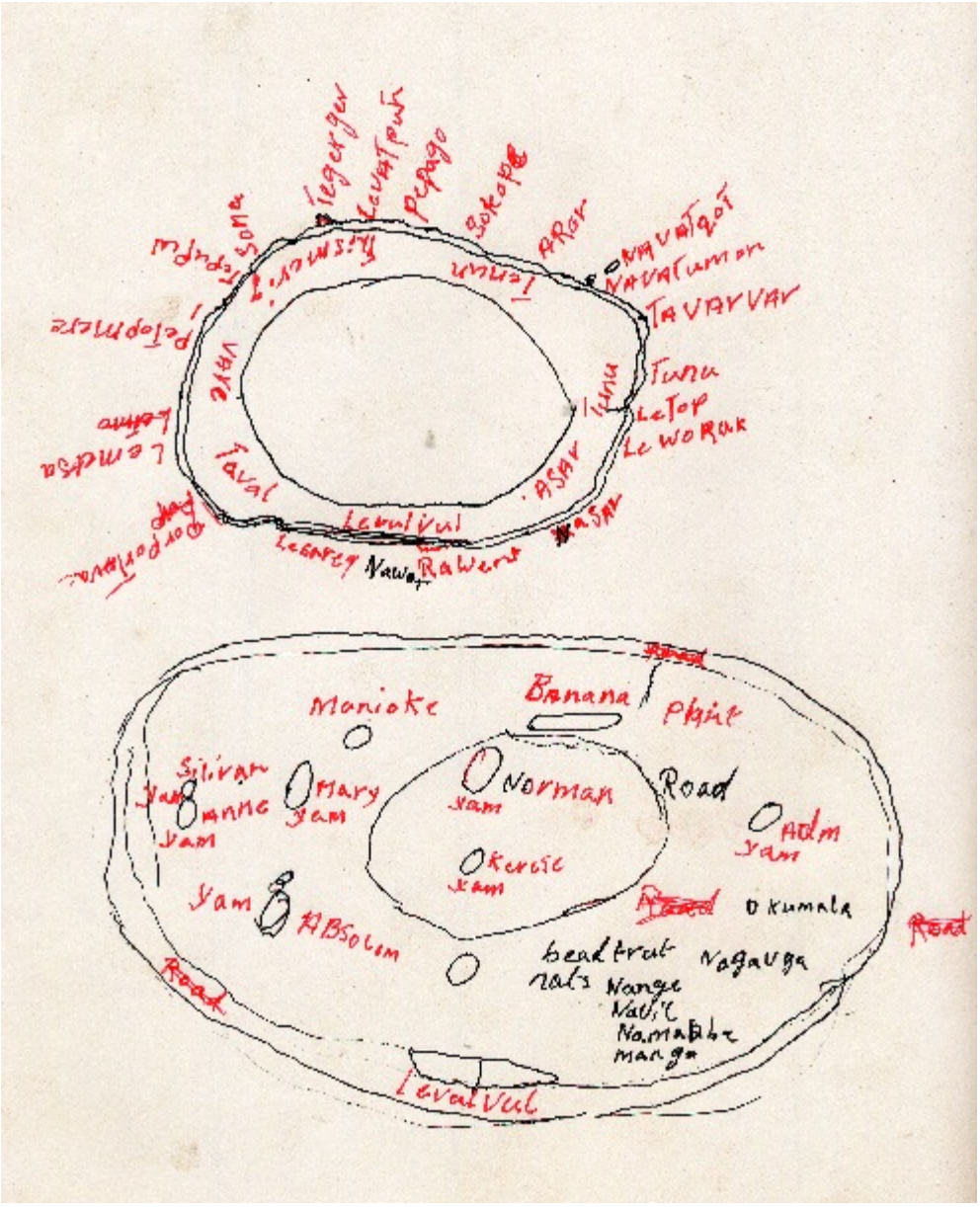


図１　A1m が描いたメリック島の地図



上の地図は、メリック島の地名をあらわしている。

下の地図は、畑や木の位置をあらわしている。

A1m の地図は、レヴォルヴォル村のある島の西側が下になっている。

図２　フツナ島ナキロア村

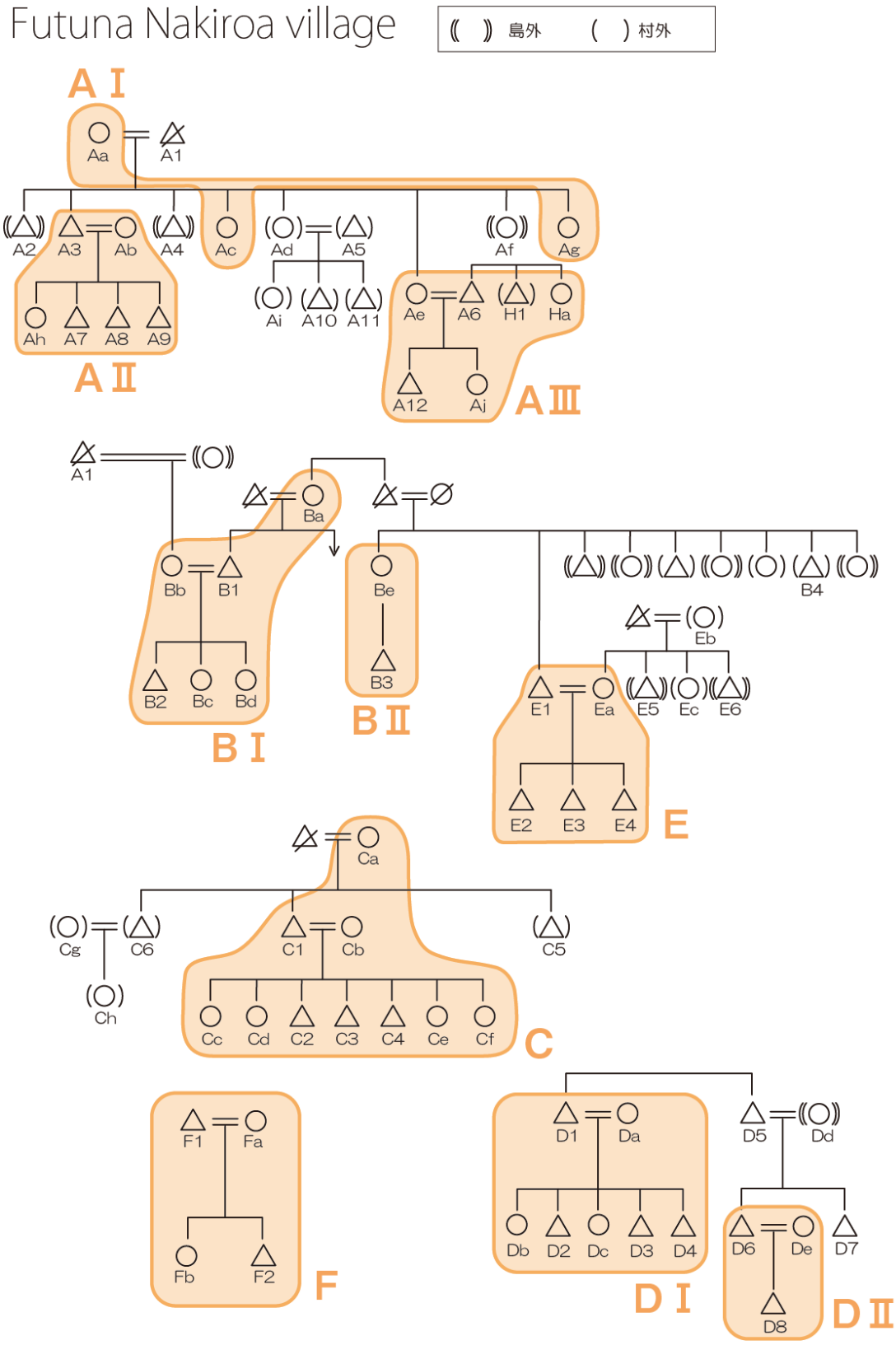


図 3　フツナ島イパウ村

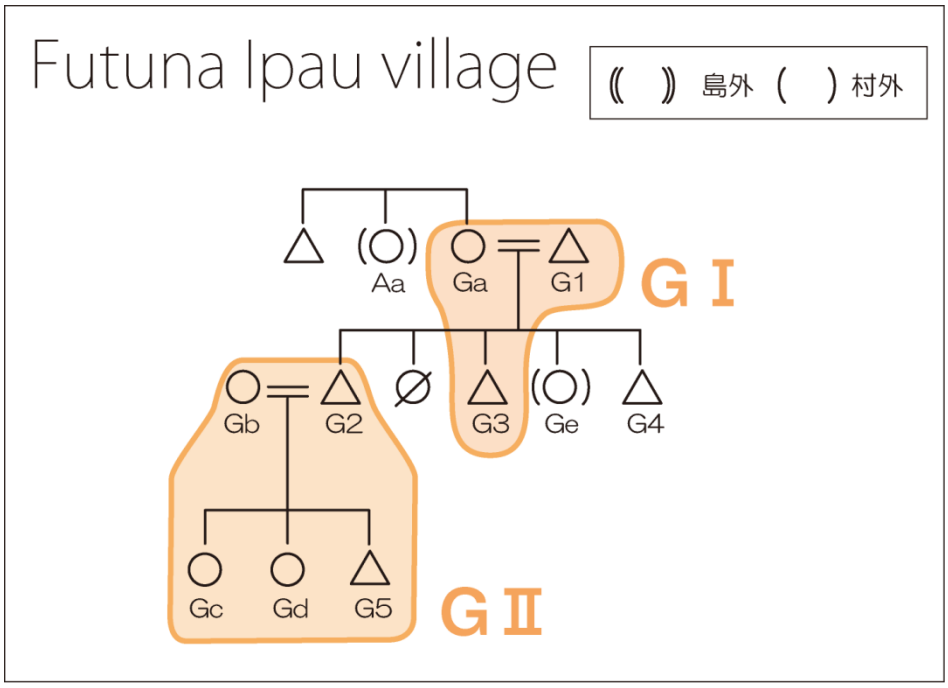
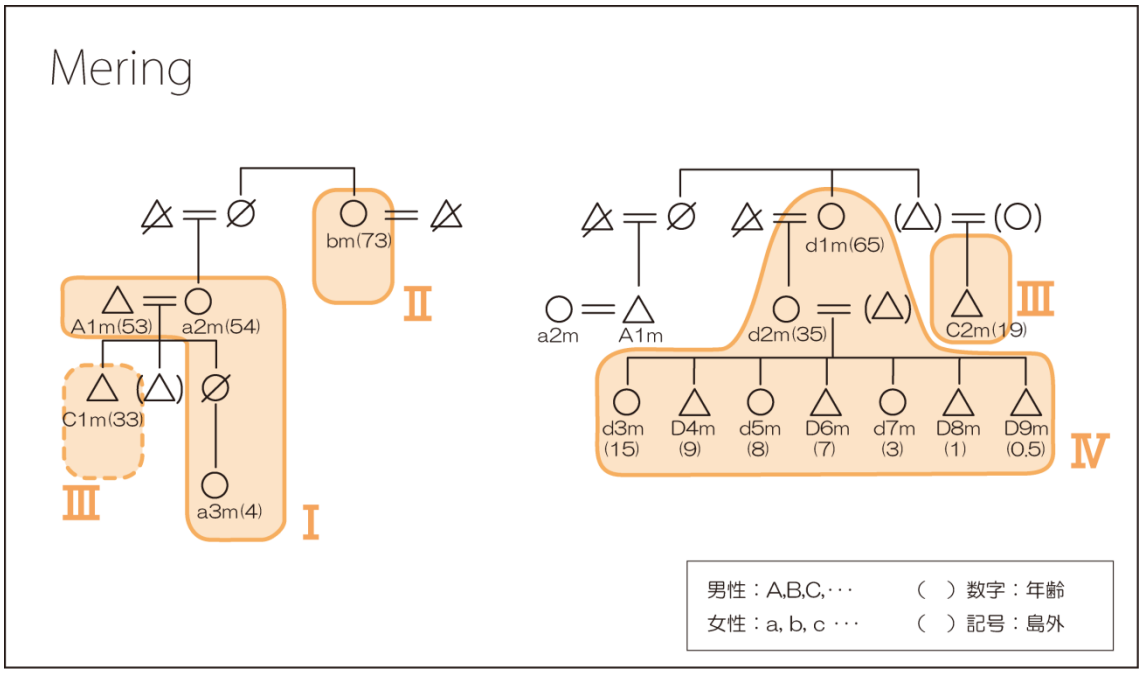


図 4　メリック島



［表2］ 主な食用植物

	フツナ語名	ビスラマ語名	学名	和名
根菜類	ufi	yam	*Dilscorea alata*	ヤムイモ
	taro	taro	*Colocasia esculenta*	タロイモ
	naleaji	taro	*Alocasia macrorrhiza*	クワズイモ
	pioko	maniok	*Manihot esculenta*	キャッサバ、タピオカ
	fue	kumala	*Ipomoea batatas*	サツマイモ
バナナ	fujitonga	banana	*Musa acuminata*	フルーツバナナ
	fuji	banana	*Musa paradisiaca*	調理バナナ
	nosi	banana	*Musa paradisiaca*	調理バナナ
	napanijila	banana	*Musa paradisiaca*	調理バナナ
堅果類	kuru	bredfrut	*Artocaupus altilis*	パンノキ
	ifi	namanbe	*Inocarpus fagiferus*	タイヘイヨウグルミ
	pau			
ココヤシ	niu	koknas	*Cocos nucifera*	ココヤシ
	rakita	konas	*Cocos nucifera*	飲料用の品種
	uto	swit koknas	*Cocos nucifera L.*	外皮（繊維部分）が甘い品種
豆	kamoni			カモニ
ナッツ	gai	nangae	*Canarium indicum*	ネイティブアーモンド
	fofoto	navel	*Barringtonia edulis*	ブッシュナッツ
葉類	saru	aelan kabis	*Hibiscus manihot*	食用ハイビスカス
	napari	nalaslas	*Polyscias scutellaria*	ナパリ
	tantani			タンタンニ
	puka			プカ
	namasi			ナマシ
	kokofe			ココフェ
	sili	pima	*Capsicum frutescens*	トウガラシ
ハーブ類	mole			モレ（ミントに似たシソ科の葉）
	kari			カリ（コブミカンに似た葉）
	lemoni			レモン
	onioni	anian	*Allium cepa*	ネギ
海藻類	rimtemoa			イワノリ
	rimrim			リムリム
果実類	esi	popo	*Carica papaya*	パパイヤ
	mango	mango	*Mangifera indica*	マンゴー
	taverao	nakatambol	*Dracontomelon vitiense*	ドラゴンプラム
	maranpuni		*Annona squamosa Linn.*	シュガーアップル
	kafika	nakavika	*Eugenia malaccense*	マレーフトモモ
	majarupe			イチジクの仲間
	mantarin	mandrin	*Citrus nobilis*	マンダリンオレンジ
	uotamelen	melen	*Citrullus vulgaris*	スイカ
	painapol	paenapol	*Ananas comosus*	パイナップル
その他	toro	sugaken	*Saccharum officinarum*	サトウキビ
	kava	kava	*Piper methysticum*	カヴァ（コショウ科植物の根）

［表3］ 調理に利用される主な植物

	フツナ語名	ビスラマ語名	学名	和名
パンダナス	fara	pandanas	*Pandanus tectorius*	パンダナス、タコノキ
	rou fara			パンダナスの葉
	fa fara			パンダナスの実
	kai fara			パンダナスの気根
ココヤシ	niu	kokonas	*Cocos nucifera*	ココヤシ
	rou niu			ココヤシの葉
	kafa niu			ココヤシの中果皮（繊維）
	gaja niu			ココヤシの核皮（固い殻）
	ume			ココヤシの花のガク
	fafa niu			やわらかい胚乳（緑色の実）
	niu tafa			少しかたい胚乳（緑色の実）
	niu feka			かたい胚乳（茶色の実）
	niu somo			スポンジ状の胚乳（発芽した実）
	re niu			ココナツミルク
	kaka niu			ココヤシの幹の外皮（繊維）
葉類	ji		*Cordyline terminalis*	センネンボク
	rou ji			センネンボクの葉
	fau	burao	*Hibiscus tiliaceus*	オオハマボウ
	rou fau			オオハマボウの葉
	koka			コカ
	rou koka			コカの葉
	riai	lif laplap	*Heliconia indica*	芭蕉の仲間
	nosi	banana	*Musa paradisiaca*	バナナ
	napanijila	banana	*Musa paradisiaca*	バナナ
	rou fijitoga maro	drae banana lif		バナナの乾燥した葉
	morokau	rop blong pig	*Epipremnum spp.*	モロカウ
	nonu	noni	*Morinda citrifolia L.*	ノニ
木類	rakau toga	kasis		ギンネム

［表4］ 漁撈・狩猟活動による主な獲物

	フツナ語名	ビスラマ語名	学名	和名
回遊魚漁	uarukago	tuna	*Thunnus spp.*	マグロ属
	uakago	wafu	*Scomberomorus spp.*	サワラ属
	tapatu	barakuta	*Sphyreana spp.*	カマス属
	roufau	karong	*Caranx ignobilis*	ロウニンアジ
	kauanta pura	karong	*Caranx tille*	アジ
	som foiaka		*Aprion virescens*	アオチビキ
	nasiro		*Ruvettus pretiosus*	バラムツ
トビウオ漁	save	fraengfis	*Exocoetidae*	トビウオ
			Ablennes hians	ハマダツ
釣り漁・	melomelo	los	*Cephalopholis spp.*	ハタ類
モリ突き漁	marau		*Sargocentron spiniferum*	トガリエビス
	totoana	longmaot	*Hemiramphus far*	サヨリ
	ika maru		*Scarus spp.*	ブダイ類
	ume	strongskin	*Balistes aculeanatus*	テングハギ
		renbofis	*Acanthurus lineatus*	ニジハギ
	marari	sop		ベラ類
	sumu		*Balistoides spp.*	カワハギ類
	mutu		*Kyphosus cinerascens*	テンジクイサキ
	feke	nawita	*Octopus spp.*	タコ
	ngu	katelfis,nawita	*Sepia latimanus*	コウイカ
	fonu			カメ
海浜部採集	ariri		*Turbo brunneus*	ケショウサザエ
	fasua	natalae		シャコガイ
	karikao	torokas		タカセガイ
	makuriri	strongbak		
	matapis			ヒザラガイ
	kamkama			イワガニの仲間
	popotu			スナホリガニ
イセエビ漁	ura	lobsta	*Panulirus penicillatus*	シマイセエビ
ヤシガニ猟	ureji	krab kokonas	*Birgus latro*	ヤシガニ
	tupa	krab		陸生のカニ
コウモリ猟	peka	flaengfokis	*Pteropus spp.*	オオコウモリ

表５　メリック島の生業活動（2004 年 8 月 21 日から 9 月 4 日）

８月２１日（土）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ビスケット	屋根を編む	ヤム、カピチをココナッツミルクで茹でたもの	畑（キャッサバ）	キャッサバ、魚
a2m	米	畑作業（カピチ・ヤム・ココナッツ）	同上	うちわを編む	同上
bm	ワイルドヤム	バスケット編み	ヤムラプラプ	畑作業（ココナッツ）	バナナラプラプ
C1m	バナナ	コウモリ猟	バナナ	コウモリ猟（ナンガイ）	米、卵
C2m	同上	同上	同上	同上	同上
d1m	バナナ	子どもの世話、バスケット編み	バナナ	子どもの世話	バナナ、魚
d2m	同上	畑作業、バスケット編み	同上	釣り（１５匹）	同上
d3m	同上	畑作業、屋根編	同上	釣り	同上

７月にコプラ回収の船が来たため、米、ビスケット、缶詰などがたまに食卓にあがる。しかし、これらの食材は１か月ほどですべてなくなっていた。

８月２２日（日）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ヤム	教会、歓迎会	ケーキ	調理	カピチスープ、米
a2m	ビスケット	同上	同上	同上	同上
bm	ラプラプバナナ、ビスケット	同上	同上	バナナ調理	バナナ
C1m		同上	同上	ナンガイ採り	バナナ
C2m		同上	同上	同上	同上
d1m	バナナ、キャッサバ	同上	同上	子どもの世話	カピチスープ、バナナ、キャッサバ、ナンガイ
d2m	同上	同上	同上	カピチ、キャッサバ、バナナ調理	同上
d3m	同上	同上	同上	ナンガイ採り	同上

日曜日は教会に行くためのんびりと過ごす。この日は筆者の歓迎会も開かれダンスなどが披露された。ナンガイ採りは小さな子どもたちをともなった遊び的なものである。昼食のケーキは筆者が持ってきた小麦粉を使ってみなで焼いた。

８月２３日（月）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ビスケット、バナナを焼いたもの	キャッサバ畑（C2mの)作り(バナナ）	米、ココナッツミルク	釣り（５匹）	バナナラプラプ、魚
a2m	同上	同上	同上	同上	同上
bm	バナナ	同上	ヤム	釣り（１０匹）	バナナラプラプ、魚
C1m	バナナ	同上（ココナッツ）	同上	モリ突き（６匹）	同上
C2m	同上	同上	同上	昼寝	同上
d1m	米、お茶	同上	バナナ	子どもの世話	バナナラプラプ、魚
d2m	同上	同上（薪）	同上	釣り（９匹）	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

この日は全員でC2mの焼き畑の手伝いに行った。午後はみな畑に行かず、釣りをするなどしてのんびり過ごした。

８月２４日（火）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ビスケット	畑（キャッサバ、タロ、ワイルドヤム）	米、魚	午前中採ったものをみなで石焼調理する	ナンガイとキャッサバのラプラプ、パンノミ
a2m	同上	同上	同上	同上	同上
bm	ヤムラプラプ	ナンガイ剥き	バナナ	同上	同上
C1m	バナナ	ナンガイ採り	米、魚	釣り	同上
C2m	同上	同上	同上	釣り	同上
d1m	バナナ	子どもの世話	バナナ	石焼調理	同上
d2m	同上	ナンガイ剥き	同上	同上	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

この日はアングリカン教会の聖人の日「ウンロンの日」なので日曜日と同じであるという。全員でナンガイを採り、殻を剥いて、キャッサバとナンガイの大きなラプラプを作って過ごした。

８月２５日（水）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ヤム、昨日のラプラプ	屋根を編む	パンノミ、ココナッツミルク	畑に行く（薪、ココナッツ、パンノミ、パパイヤ）	パンノミ、カピチ、ココナッツミルク、魚缶詰のスープ
a2m	同上	マットを編む、洗濯	同上	同上（薬草）	同上
bm	バナナ、昨日のラプラプ	バスケットを編む	パンノミ	焼き畑の火入れ（ココナッツ）	バナナ
C1m	昨日のラプラプ	トイレ作り（土木作業）	パンノミ、ココナッツミルク	トイレづくり	キャッサバ
C2m	同上	キャッサバ植え（パンノミ）	同上	バナナ植え（バナナ）	同上
d1m	同上	キャッサバ畑の手入れ	バナナ	キャッサバ畑の手入れ	バナナ
d2m	同上	同上（パパイヤ）	同上	同上	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

肌寒い朝だった。だいたい９時前くらいからみな動き始める。C1m は A1m 家のために新しいトイレを作っている。

８月２６日（木）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ビスケット、パンノミ	キャッサバ植え、畑の手入れ（薪、ヤム）	パンノミ	屋根づくり	米、卵、ココナッツミルク
a2m	バナナ、カピチ	同上	同上	マット編み	同上
bm	バナナ	ヤム畑の手入れ	タヴァップ（畑のカニ）	畑（カニ、ココナッツ）	バナナ、卵
C1m	バナナ	トイレづくり	パンノミ	C2m を散髪	米、卵、ココナッツミルク
C2m	パンノミ	ヤム畑の手入れ	バナナ	同上	同上
d1m	パンノミ	ヤム畑の手入れ	バナナ（畑にて）	釣り	パンノミ
d2m	同上	同上	同上	同上	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

８月２７日（金）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ヤム、バナナ	サザエ採り	パンノミ、サザエ、ココナッツミルク	焼き畑火入れ（薪、バナナ）	バナナ、ココナッツ
a2m	同上	屋根編み	同上	同上	同上
bm	カニ、ココナッツミルク	バスケット編み	同上	畑の手入れ（ヤム）	バナナ
C1m	ヤム、バナナ	トイレづくり	同上	トイレづくり	バナナ、ココナッツ
C2m	同上	畑の手入れ	同上	畑の手入れ	同上
d1m	米	畑の手入れ（キャッサバ、ヤム、バナナ）	パパイヤ	子どもの世話、うちわ編み	ヤム、バナナ、ココナッツミルク
d2m	同上	同上（薪）	同上	畑の手入れ	同上
d3m	同上	同上（バナナ、ヤム）	同上	調理	同上

８月２８日（土）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ビスケット、ワイルドヤムラプラプ	C2mのヤム畑開墾	米、カニ	畑の手入れ（ココナッツ）	キャッサバラプラプと魚のスープ
a2m	同上	同上（キャッサバ）	同上	キャッサバ調理	同上
bm	バナナ	同上	米	同上	同上
C1m	バナナ	同上	魚（海で）	モリ突き漁	同上
C2m	バナナ	同上	同上	同上	同上
d1m	キャッサバラプラプ	同上	キャッサバラプラプ	d3mの畑手入れ	同上
d2m	同上	同上	同上	釣り	同上
d3m	同上	同上	同上	畑手入れ	同上

午前中は全員でキャッサバ畑だったところをヤム畑にするために、藪を切り開く作業をする。午後はごちそうを作り、全員で同じものを食べた。

８月２９日（日）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	バナナ、ビスケット	教会	米、ヤムと魚缶詰のスープ	バナナラプラプ調理	バナナラプラプ、キャッサバラプラプ
a2m	同上	同上	同上	同上	同上
bm	キャッサバラプラプ	同上	同上	同上	同上
C1m	同上	同上	同上	キャッサバラプラプ調理	同上
C2m	同上	同上	同上	同上	同上
d1m	米	同上	パパイヤ	同上	同上
d2m	同上	同上	同上	同上	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

午前中は教会に行き、午後は全員でラプラプを作り、夜は同じものを食べた。

８月３０日（月）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ビスケット、キャッサバラプラプ	カニ採り	カニ、バナナラプラプ、カピチ	a2m のヤム畑の手入れ	米、魚と貝のスープ
a2m	同上	調理	同上	同上	同上
bm	同上	ヤム畑の手入れ	バナナ	bm の畑の手入れ	同上
C1m	同上	釣り（魚１、貝）		bm の畑の手入れ（カニ）	同上
C2m	同上	d2m のヤム畑の手入れ	バナナ、ココナッツ	d2m の畑の手入れ	同上
d1m	同上	子どもの世話	同上	同上	バナナ、米
d2m	同上	d2m のヤム畑の手入れ	同上	同上	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

毎日だれかのヤム畑の開墾、火入れ作業を集まってするようになる。

８月３１日（火）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ビスケット、バナナ	釣り（魚４匹）	米、魚	bm の畑の手入れ	キャッサバラプラプ
a2m	同上	キャッサバラプラプ調理	同上	同上	同上
bm	ヤム、バナナ	bm のヤム畑の手入れ	ヤムラプラプ（畑にて）	同上	同上
C1m	バナナ	同上	同上	同上	同上
C2m	同上	C2m のヤム畑の手入れ	バナナ	C2m のヤム畑の手入れ	米、魚
d1m	ヤム、バナナ	子どもの世話	バナナ	子どもの世話	同上
d2m	同上	C2m のヤム畑の手入れ	同上	釣り（魚６匹）	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

９月１日（水）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ヤムラプラプ（昨日 bm が畑で作ったもの）、バナナ	家の壁用ココナッツの葉を採りに行く	ヤム、バナナ	A1m のヤム畑の手入れ	米、魚
a2m	同上	壁用にココナッツの葉を編む	同上	a2m のヤム畑の手入れ	同上
bm	ヤムラプラプ	ヒヨコの世話	ヤム	bm のヤム畑の手入れ	ヤム
C1m	同上	トイレ作り、釣り（２匹）、ヤムの調理	ヤム、バナナ	bm のヤム畑の手入れ	米、魚
C2m	バナナ	C2m のヤム畑の手入れ	米、ヤム	C2m のヤム畑の手入れ	バナナ、魚
d1m	米	同上	同上	C2m のヤム畑の手入れ	同上
d2m	同上	同上	同上	同上	同上
d3m	同上	同上	同上	釣り（魚４匹）	同上

９月２日（木）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	キャッサバ、パパイヤ	C2mのヤム畑植え付け	ヤムラプラプ	釣り	ヤム、魚
a2m	同上	同上	同上	釣り（魚２匹）	同上
bm	ヤム	同上	同上	洗濯、釣り（魚７匹）	同上
C1m	キャッサバ	同上、ダイビング	同上	ナンガイ採り	同上
C2m	同上	同上、ダイビング	同上	同上	同上
d1m	米	同上	同上	バナナラプラプ調理	バナナラプラプ
d2m	同上	同上	同上	同上	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

C2mのヤムの植え付けをみんなでおこなう。C2mは手伝ってくれるみなのためにワラグというゲームを開催した。この一日はピクニックみたいに盛り上がった。午後は釣りに出かけるものが多かった。

９月３日（金）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	ヤム、魚	島内を回って散歩する	ヤム	a2m、A1m のヤム畑の火入れ	ヤム、バナナ、ロブスター
a2m	同上	調理	同上	同上	同上
bm	同上	畑の手入れ	同上	bmの畑の手入れ	同上
C1m	同上	d2mのヤム畑の手入れ	同上	釣り	同上
C2m	同上	同上	バナナ	d2mの畑の手入れ	米
d1m	バナナラプラプ、米	同上	同上	同上	同上
d2m	同上	同上	同上	同上	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

９月４日（土）

名前	朝食	午前の活動	昼食	午後の活動	夕食
A1m	米、魚	島を一周散歩	バナナラプラプ	畑の手入れ	パンノミ
a2m	同上	バナナラプラプ調理	同上	畑の手入れ	同上
bm	バナナ	同上	同上	畑の手入れ	同上
C1m	米、魚	d2mのヤム畑植え付け	ヤムラプラプ	ダイビング	同上
C2m	同上	同上	同上	同上	パンノミ、バナナラプラプ
d1m	バナナ、魚	同上	同上	バナナラプラプ調理	同上
d2m	同上	同上	同上	同上	同上
d3m	同上	同上	同上	同上	同上

［表8］ 畑の数

名前	ヤムイモ	キャッサバ	サツマイモ
A1m	3	3	2
a2m	1	1	
a3m	1		
bm	2	1	
bmの孫	1		
C2m	1	1	
d2m	2	1	
d3m	1		
D4m	1		
合計	13	7	2

［表9］ 利用される木

家（niun）をつくる

メリック語名	学名	和名（ビスラマ語名）	用途
lamor	*Bambusa spp.*	タケ	壁など
takor	*Metroxylon warburgii*	サゴヤシ	屋根

カヌー（na）をつくる

butu	*Artocarpus altikis*	パンノキ	カヌー本体
nebilbil		（ナウェス）	カヌー本体
natales	*Terminalia catappa*	（ナタブア）	パドル（nawosi）

実を食べる

nage	*Canarium indicum*	（ナンガイ）	３年ほど保存可能
nowatol	*Barringtonia edulis*	（ナヴィル）	半年ほど保存可能
mato	*Cocos nucifera*	ココヤシ	ココナッツミルク、オイル、ジュース
namyak	*Inocarpus fagiferus*	（ナマンベ）	保存できない
butu	*Artocarpus altikis*	パンノキ	保存できない

写真　1　フツナ島

写真　2　崖を登る階段

写真　3　メリック島

写真　4　レヴォルヴォル村 A1m の家

写真　5　島の人全員

写真　6　7つのラウに分けられた食物

写真　7　一家族分ずつのラウに分ける

写真　8　学校の新しいパソコンの祈祷をおこなう

写真　9　クリスマスにおける村ごとに用意された食事

写真　10　2008 年 5 月 9 日の葬儀のときの分配

写真　11　石焼き調理によってできたプリ・ピヨコ（キャッサバのプリ）

写真　12　マラエに並べられた食物

写真　13　結婚式のスイカ

写真　14　分配されたヤムイモ

写真　15　D1 が置いたラフの印（チナロアの浜）

写真　16　教会建築の共同作業

写真　17　共同作業の分配をする B1

写真　18　バラバラにされて分配されるカニ

写真　19　分配された 1 人分のカニとバナナ

写真　20　オオコウモリを料理する

写真　21　ピクニックで食物を分け合う子どもたち

写真　22　マグロを分配する B1

写真　23　吊るされてあったトビウオとアジ

写真　24　カヌーをつくるために切られた a2m の木

写真　25　持ち帰られるブッシュヒヨコ

写真　26　C2m の畑に集まり種芋をくり抜く